

女王様は十五歳 お忍び世直し無双剣

佐倉じゅうがつ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暴れん坊女王様が人の世の悪を絶つ！

西洋風異世界を舞台にした勧善懲悪もの。

ハイナリア王国の女王、アンナ・ルル・ド・エルミタージュは十五歳の誕生日を迎え、初めてのお忍びに出る。君主として見聞を広げ、苦しむ人々を救うために。

一章完結型をとるので途中からでも読めます。一か月で一章完結が目標。

なろう・カクヨム・アルファポリス・ノベルアップ+でも掲載しています。

目次

初めてのお忍び	1
酒場前での人助け	5
権力者の人脈	10
来たれ、星剣	15
いざ、旅立ち	20
女王の金策	23
競争中止	28
メイドのルネ、登場	32
「アンナ女王杯」出走！	37
優勝、そして男爵のもとへ	42
おねえちゃんみたいに	47
水車の町で、商売上手	52
先代女王のあしあと	57
職人ストガルドの焦り	62
先代もやはり強かった	67
宿にもどり……	72
会場での戦い	77
悪人親子、職人親子、女王親子	82
とある青年の分岐点	88
とまらない心	93
これは恋だと青年は悟った	99
つかの間のしあわせ	105
暗殺依頼、お断りします	110
いつか、また	116

野盗のウワサ	123
宿屋の秘密	128
月夜のたたかい	133
野盗の雇い主	138
ひびく怒号	143
鉄拳制裁	148
思わぬ再会	153
公爵の孫娘	158
ヒノカの母	163
通りすがりの旅の者です	168
ルネの反撃	172
決戦、バレンノース城	177
決着	182
女王の帰還	187
女王様は十六歳	192

初めてのお忍び

庭園に金属のぶつかり合う音が鳴りひびく。騎士団を相手に協奏曲を奏でているのは一人の少女だった。

その剣術を言い表すならば『目に見えない鋼鉄でできた竜巻』だ。屈強な男たちの剣がことごとく弾かれ、あるいは引き込まれ、強力無比な反撃を受けて倒れていく。前後左右、どこから打ち込んでも同じだ。

「お見事です、女王様」

一人残った大柄な騎士が称賛の言葉をおくる。それを聞きながら女王は彼のほうを向いて剣を構えた。

「ピエール団長、残るはあなただけです。構えなさい。それとも、私を打つのは気がすすみませんか？」

「滅相もございません、全力で打ち合うの稽古がわれらの伝統。騎士団長。ピエール、お相手しましょう」

「アンナ・ルル・ド・エルミタージュ。まいります」

ピエールは腰を落としてつつ両手の剣を頭上に構える。獲物をねらう肉食獣のように雄大だ。

対する女王はシンプルな中段の構え。

束の間の静けさが空間を研ぎ澄ませていた。

「ふんっー」

ピエールが動いた。

腰が地面をかすめそうなほど鋭い突進からの袈裟斬り。瞬間火花が散る。切っ先が地面の草の先にふれる。振りぬいた姿勢のまま、ピエールは地面に倒れた。

女王は彼の背後にまわっていた。背中ついた大きなくぼみが打撃の強さを物語る。

「そこまでー」

審判役の老人が右手をあげる。終了の合図。

「以前にも増してお強くなりましたな。このジョゼフ、まこと感動いたしました」

ジョゼフが頭を垂れる。しかし女王は不満げだ。

「もうっ！　またこうなるのですね！」

剣を地面に突き立てる。

「どうしていつも私が勝つのでしょうか！」

騎士の中には膝をついてなお、小柄な女王の背たけを上回るものがある。そんな者たちが一人の少女に齒が立たないなど、不自然に感じても無理はないだろう。

「ピエール団長……私がみなさんと打ち合い稽古をはじめてどれだけたちますか？」

「もうすぐ一年になります」

「その間で私が一本を取られたことは？」

「ありません……」

その言葉を聞いて、ゆつくりと剣をおさめた。

「明日、私は十五歳になります。人々が騎士に志願できる年齢……私も、女王でなければ志願していたかもしれない」

「……女王様の腕前ならば、合格は間違いないかと。しかしなぜそのようなことを？」

「明日の夜、もう一度稽古をします。次こそ私から一本を取りにきてください。もしできなければ……お忍びで城下町へ出ます」

騎士たちがどよめく。当代の女王がお忍びを口にするのは初めてのことだった。血相を変えたジョゼフがまくしたてる。

「なりませんぞ！　あなた様は先代の血をひくたった一人のお方なのです！　もしものことがあれば取りかえしがつきません！」

「母上……先代はお忍びでよく外へ出られたとのこと。爺やならよく知っているでしょう」

「確かに何度ワシを困らせたことか……ゴホン！　とにかくいけません。そもそも、これから式典が始まるではありませんか！」

「ええ、ですが式典は夕方まで。夜ならば時間があるはずです。手配を頼みますよ。そしてピエール団長、私を止めなければ……わかりますね？」

「……御意にございます」

その言葉には苦渋の色がにじみているように感じた。

「では爺や、行きませう。もうすぐ式典ですから」

「お、お待ちください女王様っ！」

女王とジョゼフが中庭を立ち去った後で、ピエールたちは頭をかかえた。

「ああ！ いつも最善を尽くしているがいつもこのザマだ。だが、こうなったらやるしかあるまい」

女王の誕生日を祝う式典はその前日、城でのパーティーから始まる。各地の貴族と名家が集う社交界の頂点だ。

「女王様、ご機嫌麗しゅう」

「お初にお目にかかります。私は——」

年齢を考慮して簡略化されてはいるものの深夜まで続く。

夜が明け、当日になると女王が乗った馬車と騎士団の行進がはじまる。青空の嵐とも形容される、一年の中で城下町がもつとも熱狂する時間だ。

「じょおうさまー！」

「ばんざいばんざーい！！」

「女王さまー！」

「おめでとうございますー！！」

ハイナリア王国の女王、アンナ・ルル・ド・エルミタージュの人気は老若男女を問わず高い。人々は紙吹雪をまき、歓喜の声をあげた。

「みなさま、ありがとうございます」

ほほえみと共に手を振って応えた。

式典のすべてが終わり太陽が大地に隠れたころ、女王は稽古着姿で中庭に立っていた。

相手の力量を見極めるのも実力のうちだと言われる。ピエールたちがずっと本気だったと気づかぬ女王ではない。

「私なら城の外でも身を守るはず……母上がそうだったように」

「女王様!? そのお召し物はまさか！」

「爺や。皆を中庭に集めてください」

ジョゼフはしぶったが、女王の決意は固かった。

騎士団はみな決意に満ちた目をしていた。彼らにとって命がけの戦いも同然なのだろう。

「うおおおおおーっ!!!」

「……だいぶ城から離れましたね」

初めてのお忍びに心がおどる。見聞のためと使命感を背負つての出立ではあるが、十五歳は多感な年ごろだ。胸の高鳴りは抑えようもなかった。

好奇心という名の羽がついた靴とともに、少女は月明りの中を軽やかに駆けた。

「ふふっ」

夜はすっかりふけていたが、城下町には式典の余熱が感じられた。まだ明かりのついた建物は少なくないし、中からにぎやかな声も聞こえる。

酔いつぶれたのか、瓶を手に地面で寝転がっている者がいる。

「まあ。あの方はまるで頭を悩ませているときのジョゼフのようですね」

祭りのあとといえは聞こえはいい。だが酒の匂い、捨てられたごみ……町が決して女王に見せないものがそこかしこに見える。

「しつっこいなアンタらー!」

女性の声が夜空に響いた。

「今のは……!?!」

酒場前での人助け

声の方角へ向かうと二人の男が女性につきまとう光景が見えた。向かいには酒場がある。そこから出てきた客だろうか。

「いいじゃないか、一回でいいからつきあえ。俺とふとくてかたい人脈を作ろうじゃないか、なあ」

「何が一回や、おことわりやっちゅうねん！」

「おーいおいおい、さっきまで愛想よかったのにつれない女だな」

「オラこつちにこい！」

男たちは酔っているようだ。上半身がフラついており、女性の腕を乱暴に引つ張っている。考えるより先に足が動いた。

「おやめなさい！」

両者の間に立ち、男たちの顔をまっすぐに見据えた。

「ああ？ なんだおまえは!? 邪魔するな!!」

突然の横やりで手を離れた男たちは、邪魔をされたとみるや歯をむき出しにして怒鳴ってきた。顔じゆうが炭火のような熱のこもった赤さだ。

「相手がいやがっているのです。どうか穏便に、このままお引き取り願えませんか？」

「うるさーい！ 俺を誰だと思ってる、どいてろ！」

突きとぼそうとする手。右足を一步さげて体をそらしかわす。相手は勢いあまってヨロヨロと壁に寄りかかる。この隙に女性の腕をとって走り出す。

「今です、さあこつちへ！」

「あつー！ こら待てー！」

道が石畳でなくなるまで走っただろうか。建物はまばらになり、男たちの怒号も遠くなった。

「ふう…………このくらい離れたら大丈夫でしょうか？」

「ちよ、ちよい待ち…………ハア、ハア…………アンタ、見かけのわりに体力あるな…………」

彼女はへとへとの様子だった。袖の長い華やかな衣装に長い髪、踊

りに映えそうな女性だ。したたる汗が月の光をあびてきらめき、息をきらせていても艶やかな印象を持たせる。

「あ、すみません……私、夢中で走ってしまっ……」

騒ぎを聞いて駆けつけてから今にいたるまで、考えるより先に行動をとっていたことに気づいた。

「ハアハア……ええって。助けてもらたんや……ハア……ありがとう
な」

「よかった」

ほっと胸をなでおろす。結果として目の前の人間を助けられたのだ。さっそく小さな善行ができた気がした。

「お怪我はありませんか？」

「大丈夫や。ハア……あいつら酒場からずつとからんできよつて、しつこかったなあ」

「だいぶ酔っていた様子でしたね。ところで、あなたも酒場から出てきたのですか？ お酒のおいはしないような……」

「ウチは旅芸人なんや。酒場で踊ったりしても、お酌や酒の相手はせえへん。まつ、そもそも十四歳で飲んだらアカンやろ？」

「ええっ!？」

思わず声をあげた。

「年上の方かと思っていました」

「おっ、そう見えるか？ まあ女一人、ナメられると商売にならんからな。化粧とか立ち姿とか、それなりに見えるよう工夫してん。その反応はウチの狙い通りや、すごいやろ！ ……ふーん年上やったんか、人は見かけによらんなあ」

こちらの顔を遠慮なくまじまじと見つめてくる。こんな視線を受けた経験がなく少し戸惑ったが、目をそらすと失礼だと思い見つめかえしながら言った。

「ええと、そのお年でこんな夜更けまで……尊敬します」

「へっ!？ や、やめえや。くすぐったいわ」

思わぬ反応だったのか、女性は首に手をあててもじもじしながらうつむいた。このしぐさはどこことなく年相応さを感じさせた。

「そや、このあたりは確か……うん、間違いない。世話になつてるおばちゃんの家近くやし、あとは一人で帰れるわ。ほんまにありがとう。アンタも早く家に戻ったほうがええで」
「……あ」

寝泊りのあてがない。

出てくるばかりに気を取られて全く考えていなかった。だからといって城にもどるわけにはいかない。翌日も町を見て回りたかった。

「ええっと、私は……その、まだ帰る時間ではなくて」

「なんでやねん。もう帰るやろ普通」

「ふつう……そうですよ、ふつうなら帰るのですが……ええと、そう！ 門限です！ 門限を過ぎてしまったので、帰っても中に入れないのです。おほほほほ」

「開けてもらえばええやろ」

「ほほ……ほ……」

何も言い返せなくなってしまった。泳ぐ視線がだんだん月にひきよせられる。なんだか苦笑されているように思えてきた。

「……ハア、なんかワケありみたいやな。なら一緒に来るか？」

「よろしいのですか？」

「助けてもらった礼や。大家のおばちゃんええ人やし、一晩くらいなら大丈夫やろ」

思いがけぬ提案！ まさに渡りに船だった。彼女の手をとって両手で握りしめた。

「ちよっ——」

「ありがとうございます、うれしいです！」

「お……おう。どういたしまして」

彼女はぱつと手を離しながらどこかどかと大袈裟に歩き出した。

「ホラついてきーや！ あと、その……なんや。ウチはヒノカつていうんや、よろしくな」

城下町の郊外にぽつんと二階建ての家があった。夜も遅い時間だが明かりがついている。ヒノカは扉をノックしてから開けた。

「おばちゃん、帰ったで！」

「ヒノカちゃん！ なかなか帰ってこないから心配してたんだよ」

中年の婦人が駆け寄ってくる。大家とはこの婦人のことだろう。

「へへへ、今日が一番の稼ぎ時やったし、ちよつと張り切ってもうたわ」

「この子つたら。たくさん人がいればそのぶん変なものも出てくるし……本当に気を付けてね」

ヒノカのことをよほど気にかけていたようだ。かける言葉の中に優しさを感じられた。

「うん、ありがとうなおばちゃん。で、一つ相談なんやけど……今夜はコイツも泊めてもええかな？」

「そりやかまわないよ。あなた、お名前は？」

「はじめまして、ええと……」

アンナ・ルル・ド・エルミタージュ。などと名乗るわけにはいかない。

「エルミーナと申します。よろしくお願いします。おほほほ」

「エルミーナちゃんね。今はヒノカちゃんしか泊まってないし気楽にしているからね」

「よつしや決まりやな！ おばちゃん、ありがとう！」

「おばさま、お世話になります」

深々と頭を下げた。

「いいよいいよ。さあ、スープがあるからおあがりなさいな」

初めて手に取る木製の食器。ふだん使っているものより軽くて分厚い。スープの味は……素材を生かしていると表現すべきだろうか。少々の野菜の苦み、それと薄い塩の味がする。今まで口にした食事とはまるで違うせいかな、美味かどうかを判断するのは難しかった。

「あー、夜風に当たった体が温まるで……」

ヒノカはホツと息をつきながらスープを飲んでいる。それを見ていると……

「私もぽかぽかしてきました」

「アンタもわかるか、この良さつちゅうもんが」

「二人ともおおげさだねえ」

このスープは忘れられない味になりそうだった。

権力者の人脈

もう夜は遅い。スープを飲んだ後はすぐ寝室に向かった。ヒノカと同室だ。誰かと同じ部屋で就寝するのも物心がついてから初めての体験だ。

「ヒノカさん、いろいろとありがとうございます」

『『ヒノカ』でええよ、『お嬢』』

「では……ヒノカ。私のこともエルミーナでいいですよ」

「うーん……アンタはなんか『お嬢』って感じがするわ。他人行儀で言ってるんじゃないで。そう呼んだほうが親近感ちゅうか自然に思えるんや。アンタええとこのお嬢様やろ？」

「そう見えますか？」

「相当な箱入り娘と見たで。おおかた外に興味があって家を抜け出してきたクチやな？」

「……はい。その通りです」

観念してうなずいた。身ひとつで世間を渡ってきただろう彼女を相手に、ごまかし続けるのは不可能だと思った。

「やっぱりそうか。さすがウチやな！……で、明日になったら帰るつもりなんか？」

「いえ、もう少し見聞を広げたいと考えています。まだ抜け出したばかりですから」

「止めはせんけど……大丈夫かいな」

心配するのも無理はない。だが、先ほどの男たちから彼女を助けた件が自信になっていた。

「はいっ！ ヒノカのおかげで人との話し方もわかってきたと思います！」

「そう言うてもお嬢、今夜泊まるとこのアテもなかったやんけ。まだ町にとどまるならこの部屋を使うのはどうや？ 勉強やと思つて明日おばちゃんとお交渉してみい、『ヒノカの次は私が使いたい』ってな。ウチも横で見てやるから」

「えっ？ ヒノカの次……ですか？」

「ウチがここにいるんは明日までや。町から町、村から村を渡り歩いて稼ぐ。道中でも人が集まれば稼ぐ。それが旅芸人ちゆうもんや。ま、行き先はとくに決まってへんから、歩きながら考えるかな」
「せっかくお友達になれたのに……とても残念です」

「お友達って……まっすぐなお嬢やなあ」

ヒノカは顔を見られないようにくるとベッドに寝ころんだ。

「ほなさっさと寝るで。寝不足じゃあちゃんとした交渉なんてでけんよ」

「ええ、おやすみなさい」

女王も部屋の反対側のベッドで横になった。城よりも狭い部屋、木のように固いベッド——すべてが初めての感触だった。

どうか目が覚めてもこの部屋でありますように。そう祈りながら明かりを消した。

日の光を感じて目を開ける。最初に見えたのは薄汚れた石の天井。昨日の出来事が夢でなかったことに安堵した。

しかし——

「足音？　しかも穏やかではない気配が……」

「お。やっと目が覚めたんか、お嬢？」

ヒノカは荷造りをしていた。

起きたばかりだが意識をすぐに覚醒させる。思案するうち足音の正体に思っていたった。

「ヒノカ、大家のご婦人はどこにおられますか？」

「おお、めっちゃやる気やんけ。でも慌てんでええ。おばちゃんなら外や、毎朝一番にいつも——」

「……おばさま！」

ベッドから飛び降りて部屋を出た。何かがあつてからでは遅い。

「ちよ、なんやどうした!?!　おーい、待たんかーい!」

「なんなんだいあんたたちは!?!」

婦人はたじろいでいた。朝から衛兵を連れた男が郊外までやって

くるとはただなことではない。

「この家で女の旅芸人が寝泊まりしているのは確かか？」

「なんでそんなことを——」

「答えろ！」

衛兵が槍の石突で地面をたたき、背筋を伸ばしたまま詰め寄る。

「あの子がなにをしたっていうんだい!？」

「おばさま！」

「あつ！ エルミーナちゃん!? 安心しな、大丈夫……大丈夫だから」

婦人が女王を守るように両手で制止する。続けてヒノカもやってきた。

「おばちゃん！ お嬢！ どうした……って、ああーっ!? アンタま

さか昨日の!？」

「フン、出てきたな。俺から逃げられると思っっているのか」

「旅芸人！ 昨夜お前にワイン瓶で殴りつけケガをさせられたとの通報があった！ よってここで捕らえる。おとなしくしろ！」

「ハア!? 何言うてんねん、そんなことするわけないやろ！ 『お持ち帰り』を断っただけや！」

「じゃあこの頭の傷はどう説明するんだ、んん？」

男は前髪をかきわけ見せつけるように頭を向けた。こめかみから後頭部まで続く大きな傷跡だ。

「最初からついてたやんけ！ 酒場でウチに自慢しとったやろ、決闘でついた名誉の傷だーってな！ おい衛兵、こんなヤツの言うことを真に受けたらあかんで！ あんなデカイ傷が昨日の今日でふさがるわけない！ 絶対おかしいやろ！」

「黙れ！ 浮浪者のお前とこのお方を比べれば、どちらが正しいかなど明らかだろう！」

「なんで——」

「ヒノカ、無駄です。この衛兵の顔をよく御覧なさい」

「あ……」

ヒノカは息をのんだ。相手は昨夜、声をかけてきた二人組だったのだ。

「そういうことか……クズがっ!!」

彼らは軽蔑の声を気にとめるどころか楽しんでるようにさえ感じられた。

「ワハハハハ、いつまでそんな口がきけるかな？　おい、そろそろアレを言つてやれ」

「ハッ！」

衛兵が一步前に出て高らかに述べた。

「控えよ！　こちらにおわす方をどなたと心得ておる！　西の名君バレンノース公の執政代理人、ゲオル・ベレッツオ様であるぞ！」

「な、なんやて!？」

「あのバレンノース様の!？」

バレンノース公は王国でも指折りの有力貴族で、人望も厚く名君として広く知られている。二人の反応が何よりの証だ。

「ただいまバレンノースは病に伏しておられる。嫡子もおらぬゆえ、俺が代理を務めているのだ。フッフ、あのジジイがくたばったときは俺が跡を継ぐことになるだろう。どうだ？　これが俺の『人脈』というものだ」

ゲオルは胸の勲章をなでながら続いた。

「さらに、昨日の式典で女王をはじめ多くの者たちに顔を売ってきた。じきに俺の顔を知らぬ権力者はいなくなる」

「わかったか、このお方はお前たちとは住む世界が違うのだ」

「小娘、お前は運がいい。言うことを聞けば昨夜のことは水に流してやる。屋敷でじつくりと『教育』を施してやろう。あわよくば『人脈』になるかもしれんぞ？」

なめまわすようにヒノカを見る目。バレンノース公がこのような男を重用しているなどにわかには信じがたいが、女王は彼に見覚えがあった。彼の言う『式典』だ。

「いけ好かないヤツやと思つとつたけど……想像以上やな」

「……ふむ。そうだ、断ればその二人も共犯にしておおう。衛兵、応援を呼ぶ用意をしておけ」

「ハッ！」

見せつけるように角笛を出してブラブラとゆらす。
「さあどうする。来るのか、来ないのか？」

来たれ、星剣

「おばちゃん、お嬢。ウチは行くで」

「ヒノカちゃん!？」

「大丈夫や、伊達に一人旅してへん。このくらいなんとかなる……心配いらん、な？」

ヒノカが一步前が出る。

「アンタについてったる。そのかわり二人には指一本触れるな」

「よしよし。衛兵、よくやった。あとで褒美を取らせよう。ほれ小娘、こっちに来い」

ゲオルは早速ヒノカをひきよせ、肩に腕を回した。肩から背中、腰へと手を這わせていく。ヒノカは口をまつすぐむすび拳を震わせて耐えている。

そして彼女のあごをつかみ、唇に――

「来たれ、星剣!!」

空から一筋の光が雷のごとく地面に――ヒノカとゲオルの目の前に突き刺さった。空気が破裂したかのような衝撃がまきおこる。

「ヒイエー！ ななななな、なんだ!？」

ゲオルは大きく飛びあがり両手をばたつかせながらひっくり返った。

解放されたヒノカの手をとって後ろに退避させ、飛来した『星剣』を鞘ごと引き抜く。女王の身長に匹敵するほどの大剣だ。

「ヒノカ、下がってください」

「お嬢、アンタいったい……?？」

「き、貴様！ 齒向かうつもりか!？」

衛兵がすかさず角笛を吹いた。応援要請だ。

剣を鞘に納めた状態のまま、肩の高さで立て構えた。

「これ以上の狼藉は許しません!？」

「無礼な！ おい、やってしまえ!？」

衛兵が槍を振り下ろす。肩をねらった切っ先による斬撃は命中せず、土を叩くだけに終わる。そこで槍はびくともしない、動かない。

女王が柄を踏みつけていた。

「このガキ！ あ痛っ！」

槍をもつ手に一撃。たまらず手を離れたところすれ違いざまに胴体を打ち抜く。衛兵はうめきながら崩れ落ちた。

「クツソオ使えんやつめ！ だがもうおしまいだ！」

まだ起きあがれないゲオルがニヤリと笑う。角笛を聞きつけた他の衛兵たちが城下町からやってきた。増援が到着したのだ。

「おいどうした！ なにがあつた!？」

「よく来てくれた！ このガキが武器を持って襲ってきたんだ！ バレンノース公の執政代理人、ゲオル・ベレッツォが命じる。こいつを止めろ、殺してもかまわん！」

うづくまる衛兵、座り込んだ貴族、武器を持つ少女……しらぬ者が見ればゲオルの言葉を信じるのも無理はないだろう。全員がただちに武器を突き出した。

衛兵は十人、槍と剣の混成。前方を囲まれている。

だが騎士団を完膚なきまでにたたきのめす『目に見えない鋼鉄でできた竜巻』の前には、この程度の数は何の妨げにもならない。

躲し、突く。流し、打つ。

女王たるもの、安易に人の血を流すわけにはいかない。星剣を鞘から抜かなかつたのは斬らぬため。打たれた者たちが痛みをこらえ、再び立ちあがれるのはこのおかげだ。

ゆえに二の太刀がある。

なすすべなく何度も倒されれば気力も尽きる。攻撃の手は次第に弱まっていき、ついに止まった。

「うりゃー……!!」

ようやく立ち上がったゲオルも剣を抜いて襲いかかるが――

一閃。

剣が、真つ二つに、折れた。

「ほへっ?」

あつけにとられた隙に、ひときわ強烈な胴抜きをたたきこむ。うめき声とともに倒れたゲオルの足に、折れた剣先がかすめた。

「お……恐れながら、その者は私めの頭を……その、瓶で殴りつけてきました。こ、この通り！ 負傷させられたのでございます！ 私は私なりに罪を罰しようとしただけで！」

「黙りなさい。昨日の式典でそなたが挨拶に参ったとき、既に傷跡があったと記憶しています。これは私の記憶違いですか？」

「あっ!!」

ゲオルは両手をついて崩れ落ちた。『女王と挨拶を交わした』と言つて人脈を誇示したのは彼自身だ。

「バレンノース公に使いを送り、この件について対応を求めます。覚悟しておくように」

「お、恐れいりました……」

「では……連れていきなさい」

「ハッ！ 仰せのままに！ さあ立て！」

一人の衛兵が立ちあがりゲオルの腕をつかんだ。ほかの者たちもゲオルを取り囲もうと動き出す。しかし女王はいったん手で制した。

「お待ちなさい！ まっさきに腕をつかんだあなた。あなたの働きについて衛兵長に伝えましょう」

「はい、光栄に存じます！」

「何を言っているのですか？ 光栄に思うことなどありません。あなたはその者と共犯なのですから」

腕をつかんだのはゲオルと組んでいた衛兵だった。

「くっ……くっそお……」

ヒノカを狙った二人は連行されていった。残ったのは女王と騎士、ヒノカと大家の婦人だ。

「ヒノカ、これでもう大丈夫ですよ」

「……ウチ、女王様とは知らず偉そうなことばかり言うてしても。申し訳ありませんでした！」

頭を下げるヒノカの手を取つてほほえんだ。

「どうか顔を上げてください。礼を言うのは私のほうです、あなたのおかげでたくさんのお思い出と学びを得られたのですから……ありがとうございました。それと、おばさまも」

婦人の方を向く。

「わ、わわわわたくしめでございますか!?!」

「一夜の宿と一杯のスープ……ご恩は決して忘れません」

「は、ははあー！　ありがたきしあわせー!」

婦人はすっかり恐縮したのか、地面にひれ伏してしまった。

「おばちゃんおおげさやで。顔を地面に埋める気かっちゅーねん!」

「だ、だつてえ……」

朝日の空に女性たちの笑い声が響いた。

「ふふふ。あなた方に会えて、本当に嬉しく思います」

「女王様。名残惜しゅうございますが、わたしと城へ戻っていただけますね?」

「ええ。此度の件についてやらねばならないことがありますし、ジョゼフたちも心配しているでしょう」

騎士に促されて馬にまたがる。

「ヒノカ。あなたとはここでお別れになります。ぜひ来年の『稼ぎ時』にも来てください。待っています。おほほほ」

馬の背にゆられ、朝日の光を浴びながら『やらねばならぬこと』に思案を巡らせた。まだ、終わりではない。

いざ、旅立ち

二日後。城下町の聖堂で祈りをささげる人々の中に、ヒノカの姿があった。

「いつもはこんなことせんけどな……今回は世話になったヤツがいるし、女神さんに聞いてもらうことがあるねん」

聖堂の最奥に立つ女神像は慈悲深く耳をかたむけている。ヒノカは城下町の出来事を細やかに話し続けた。

「今日この町を出発するで。ウチを助けてくれたアイツのこと、これからも見守ってやってくれな……それと、ありがとうとか何か伝えておいてくれるか？ んー、もつと気のきいた言葉にすべきやろか……思いつかん。そこんとこ女神さんの裁量で言葉選んどいてくれると助かるわ」

「あら、そこはちゃんと自分の言葉で伝えるべきですよ？」

「……は？」

隣に女王がいた。

「な、なんでおるねん!!」

「しーっ！ 大声を出してはいけませんよ」

「おおつとと。じゃあ外にこいや、ちよつとツラ貸してもらおうかい！」

どかどかと大股で聖堂を出る。庭の木の下なら迷惑にならないだろう。女王もそこそことついでにきた。

「なんでここにおるんや。城におらんとあかんちやうの?」

「抜け出してきました」

「またかーい！ しかも今度は真っ昼間に!」

「ヒノカこそ、もう出発したものだと思っていました。ですがおばさまから聖堂にいると聞いたもので急いで来たのですよ?」

「あー、まあホラ。旅は何があるかわからんし、ゲン担ぎくらいしてもおかしくないやろ」

「それにしてもはげしいぶん熱心に祈ってましたね?」

しばしの沈黙。枝の葉のさざめき。

「ぬああー……！」

ヒノカは頭を抱えて叫んだ！

驚いたのか、木から二羽の鳥が飛び出す。

誰にも聞かれたくないことを——女神像は別。この場合は人間に對してだ——最もそう思っている相手に聞かれて体が震える。

頭の上に鍋をのせたらお湯が沸くかもしれない。少しでも熱を逃がさなければ。

「横で聞いてたならもうええやろ！ 言いたいことは全部言った、この話は終わり！ よっしや今度はそっちが答える番やで！ なんてまた抜け出したんや」

「ゲオルの件で改めて感じました、私はもっと多くを知るべきだと。今度は各地を旅してまわろうと思います」

背筋を伸ばして答える女王の瞳には、強い意志の火が宿っていた。「ヒノカ、私と一緒に来ていただけですか？ 旅慣れたあなたがいてくれたら、とても心強いです。行き先は……歩きながら決めるのはどうでしょう。あなたが行きたいところでもいいですよ」

女王はにっこりとほほえむ。多くの人間と出会ってきたヒノカにとっても、とびきり手ごわい笑顔だ。

「ははっ、相変わらず一途なお嬢やな。アンタと一緒になら退屈せずすみそうやわ」

「まあ。お願いを聞いてくれるのですね」

「おう。アンタは強くてええやつやけど世間知らずやし、ちゃんと見てないと落ち着かんわ」

「ありがとう、ヒノカ！」

女王が両手をにぎってくる。手だけでなく笑顔からも暖かさを放っているかのようにだった。彼女は太陽だ。それも、とびきり気まぐれで、少し頑固な。

「こういうところがなあ……」

木から飛び出した鳥たちが、仲睦まじく町の外へと向かう姿が見えた。

野原の緑がそよいで美しいグラデーションを奏でる。遠くに見える林にはどんな自然の営みがあるのだろう。空に浮かぶ雲は気ままに流れる。

道は優しく足を受け止め、次の一步を心待ちにしているようだ。どうして足が二本しかないのだろう、そんなもどかしさすら感じるほど、歩くのが心地よい。

振り返ると、すっかり小さくなった町と城が見える。あと少し歩けば完全に地平線の向こうだ。

「……行つてきます」

「おーいお嬢！ はよ行くでー！」
「ええー！」

女王の旅が、始まる。

女王の金策

「甘い甘い、甘いなあ」

女王とヒノカは宿で夕食をとっていた。話題は今後の行き先と、『お金』についてだ。

「手持ちが銀貨3枚はさすがに少なすぎるやろ。お嬢なら出てくるときにもっと持ってこれたんとかやうの？」

「あいにく手元にはほとんどないんです。自分でお金を扱う機会が少なかったものですから」

「そんな理由でカネがないヤツなんて、そうそうおらへんで……」

ヒノカは口をとがらせている。

「足りないと思い、手に届く品物をいくつか持ってきました。それを売ればしばらく大丈夫なはずですよ」

「ほほう、見せてみい」

袋の中のものをテーブルに並べる。持ち出したのは小さな金の燭台と銀の皿、そして髪飾りなどが入った小箱だ。

ぱっと目を輝かせたヒノカがひとつずつ観察を始める。それなりに価値があると思っっているが、彼女の目にはどう見えるだろう。

「……うん。言うだけのことはある。これなら路銀の心配をせずにすみそうや。お嬢、やるやん」

物を手早く袋にしまいこみ、小声で言った。

「ヒノカの見立てではどのくらいになりそうですか？」

「ここでは言わん。宿の食堂つてのは誰が聞き耳たててるかわからんもんやからな」

袋をかかえて立ち上がるヒノカ。

「部屋に戻るで。明日になったら、近くの店で売りに行こか」

「……でしたら、その後は私に任せてくれますか？ 実はお金を増やす方法にあてがあるのです」

「おお、なんか自信ありげや。お嬢の商売か……じゃあ見せてもらおうか」

この時期、この周辺にきたならば、絶対に足を運びたい場所があっ

た。そこならばお金の都合もつくはずだ。

「2番の子は少し……では他の子たち……あつ、見てください。5番の子がとてもいいです。馬体が良く凛々しい顔つきをしていますよ。あの子にしましょう」

「……お嬢、ここがどこだか言うてみい」

「競馬場です」

「カネを増やすつちゆうのは、つまりそういうことか?」

「はいっ」

「おーーい!!」

「しーっ! 静かに。馬が驚いてしまいます」

観客の視線がヒノカに集まる。さすがにばつが悪そうだ。頭を下げて周囲に謝罪すると、今度は肩をつかみ耳元で話しかけてきた。眉間がピクピクと震えている。

「こういうところで稼ごうとして散っていったヤツはたくさんいるんですよ。みんな今日はいける、今回は勝算があるとか言ってるな」

「大丈夫です。自信があります」

「ハア……これも勉強になるやろか? 好きにせえ」

この日は大盛況。どこに行っても人だらけだった。

「しっかし客が多いな。こんだけ集まるなら道中で芸の一つでもやるとくんやったな。競馬はよう知らんかったけど、新発見やわ」

「うふふ。毎年この時期は大きなレースがいくつも行われるんですよ。最高の競走馬たちが集まってきました。ああつとても楽しみ!」

城の外でヒノカが知らないことを知っていると、少しだけ得意げになっってしまう。

この競馬場は1着でゴールすると思う馬にお金を賭け、当たれば倍率に応じて払い戻しが行われる仕組みだ。

女王の手には小箱を売った銀貨50枚がある。さっそく目を付けた5番の馬に全額投入し、見立て通りの中した!

銀貨は200枚。さらに――

「ヒノカ、やりましたよっ！ 10倍です、10倍！」

二連勝で金貨20枚（銀貨2000枚分）になった！ 喜びに任せ
てヒノカに抱きつき、ぐるぐると回った。10倍だから10回転！

「嘘やろ……なんで？ なんで当たってるん？」

「幼いころから毎日馬を見ていましたのでっ」

「だからってこんな簡単に……え、なに？ カネってこんな簡単に増えるものなん？ 勉強が足りんのはウチなんか？ 世の中って、いたいなんや……？」

「次が今日最後のレースですよ、しっかり当てて明日に備えましょう！」

なぜか呆然として動かないヒノカを抱えてパドックへ向かう。

言葉が出なかった。その馬があまりに素晴らしかったからだ。

蹄がしっかりと地面をつかんでいて、前腕の線がまっすぐ伸びている。ハリのある肩、うっすらとあばら骨が浮き出る体つきがとても美しい。理想的な筋肉のつきかたをしている。トモははち切れそうなほど。首の角度も申し分ない。

まるでドレスのような光沢ある栗毛、騎手と息の合った歩様。調子は最高のようだ。

「——嬢、お嬢！ ちょいキツイわ、放してーや！」

「あつ。失礼しました」

馬の頼もしさにつられて腕に力が入っていたらしい。暴れ始めたヒノカを降ろした。

「ふー。なんか気づいたらお嬢に抱えられとったわ——ん？」

着地して腰をぐいぐいとひねる動きが止まる。

「あの1番の馬……きれいやなあ。他とはモノが違って見える。おとぎ話や絵画から飛び出してきたみたいや」

「ヒノカにもわかりますか？」

「馬はまったくわからんけど、あれが別格なのはわかる」

「おねえちゃんたち、トキをおうえんしてくれるの？」

下から女の子の声が出た。見ると子供がこちらを見あげている。胸の高さほどの、まだ小さな子だ。

「まあ、かわいらしい。こんにちは」

「こんにちわー!」

「あの子はすごい馬だから応援しようって、二人で話してたの」

「ほんと? うれしいな。トキはすごいんだよ! それでね——」

「アニー! どこにいるの?」

女性の声が聞こえる。

「あつ! おかあさんがよんでる。おねえちゃんたち、またねー!」

「はい、またねー! お気をつけて」

子供は観客のすきまをスルスルと走って去っていった。

「元気なお子さんでしたね」

「あの馬のことをよく知ってる感じやったな。牧場の子かなんかかな?」

パドックでは競走馬たちが歩き続けている。これが終われば締め切りだ。1番のトキに賭けるべく投票所へ向かった。

「さて、ではトキの勝利に——」

「1番だ!」

「こつちも1番」

「1番でお願いしますわ」

他の観客たちもトキに注目しているようだ。

「お嬢、これじゃ的中してもほとんど元のままになるんちゃう?」

払い戻し倍率は出走馬の人気、つまり賭けられた金額によつて決められる。あまりにも一頭の馬に偏ると、ヒノカが言ったように極端に配当が低くなる可能性がある。

「それでも賭けるのです。当たっても利益が少ないからと、自分だけ安全な場所に退避しては誠意を欠くというもの。私はトキを応援すると決めました……よつて!」

金貨20枚分のチップをどすんと置く。

「1番に賭けます!」

「うおお! 見ろよ、あの金貨!」

「いいぞ、お嬢ちゃん！」

「1番、1番追加！」

女王の巨額投入にあてられて観客の熱がさらに上がり、1番トキは近年稀に見る大本命馬となっていた。

競争中止

この日の最終レースには『馬男爵』と悪名高いアデュウ男爵が観戦にやってきた。関係者席よりも一段上のテラスに陣取っている。ここだけみるとちよつとしたお屋敷だ。

一方、女王が座っているのは、吹きさらしに多少の日よけが設置されただけの、一般用の客席だ。お忍びだから当然だが。

「おーおー、さすが男爵様やなあ」

テラスをおおぐヒノカは、わざとらしく絶景を見るのように手をかざす。

「いつも『式典』に自ら馬に乗って出席するのですよ。騎士団の馬を気に入ってしまい、連れてかえると言っては毎年みんなの手を焼かせます」

「ほうほう」

「今年も最小限の顔出しで、お昼前には帰ってしまいました。ご丁寧に『主賓』へ直接言ってきたのですよ。『競馬場へ行くので、これにて失礼』と。『主賓』は深夜まで公務を続けたというのに」

「……お嬢、けっこう根に持っとなるな」

「とんでもございません、おほほほ」

そうこうしているうちにファンファーレが鳴りひびいた。出走の時間だ。演奏を食いつくさんとばかりの歓声があがる。大声を出すのは少しはしたくない気がしたので、拍手でめいっばいの気持ちを送る。

「トキー、頼むでー！ ばしっといっただれやー！」

「まあっ。ヒノカも熱心に応援してくれるのですね」

「ウチらの大金がかかっとなるからな！」

号砲が鳴る。一斉に競走馬たちが駆けだす。栗色の馬体が鮮やかに抜け出して先頭を取った。

「さっそくー一番が飛び出したぞー！」

トキはぐんぐんと伸びるように走り、差を大きく離していく。残り半分を過ぎたあたりで10馬身を超える差が付き、もはやトキとそれ

以外といった様相だ。

はつきり言ってしまうえば、次元が違う。

「すげえ……どこまで飛ばすんだ」

「ウオオオオオオオオオ！ 行けー！ー！！」

「もう勝つ気しかしねえー！」

これだけ離れてしまえば、他の競走馬は勝負をしかけようがない。

「おおお……すがすがしいほどの走りやな。これ、後ろの馬は追いつけるものなんか？」

「いいえ、とても届きません。他もよい馬ばかりですが、絶対的な能力に差がありすぎ……っ!？」

おそらく、女王が最初に気づいた一人だろう。異変が起きたのは最終コーナーの手前。そこからトキが減速しはじめていた。

周囲は『息を入れている』と思ったのか、終盤にむけて声援を送りつづけていたが、後続の馬との差が縮まっていくにつれ悲鳴に塗り変わっていく。

ついに6番が追い抜いた。

誰かがつぶやく。

「故障……っ?」

トキは競走を中止した。降りた騎手が心配そうに声をかけているようだが、じつと立ったまま動こうとしない。

6番が一着になった瞬間を見た者がどれだけいただろうか。女王もちらりと見ただけ。ただただ、トキの容態が気がかりだった。

トキは大勢に引っぱられていやいやながら場内を去っていく。皆、静まりかえっていた。

予想もしない結末に、天も憂いをもったのだろうか。さつきよりも雲が増え、太陽は目を伏せるように隠れていた。

ふと、勝った6番が関係者席へと向かう姿が目にとまった。数人が立ちあがり喜びに満ちあふれた表情で抱き合っている。嗚咽をもらす者もいた。

アデュウ男爵のテラスからも、拍手喝采と笑い声が送られていた。気づいたときには手を強くにぎりしめていた。指先と手のひらが、互いに痛みを与えるように。

ヒノカがそつと肩を抱いた。

女王は帰路につく人々を遠くから眺めていた。皆どこか虚ろな足取りで、喪失感の大きさを思わせる。

「お嬢」

「……はい？」

隣に立つヒノカが穏やかに声をかけた。

「何を悩んどるんや？」

「それは……そう、外してしまったのがとても残念で。おほほほ」

「ハッ、賭けですって落ち込むようなタマじやないやろアンタは。ホンマに嘘をつくのが下手やな」

「ヒノカ……」

「こういうときは頼ってええ。一人で抱え込んでないで、言ってみい。旅の連れなら、ここで言うのが大事なんやぞ」

「……私は、トキばかりを見ていました。他の競走馬、それに関わった方々のことを心の中でないがしろにしていたのです」

ヒノカはだまつてうなずいてくれる。

「勝者を祝福し、全員の健闘を称えなければならぬのに、終わってからもトキの心配ばかり……自分の器の小ささ、視野の狭さを思い知りました」

このまま胸の中に沈む想いを吐き出すべきだろうか。

彼女は受けとめてくれるだろう。頼れと言ってきたのだ。『このくらい隠してしまっただろうが楽だ』と心のどこかで誘惑される。それでも――

「こんな私でも……母上のような立派な人になれるでしょうか？」

肩をポンとたたかれた。

「なれる。絶対になれる。反省してんのやろ？ なら、さつきより大きい人間になったってことやで」

ヒノカは両手を腰に当て、うつむくこちらをのぞき込む。

「体を張って人を助けられるヤツが……あのときウチを助けたアンタが、ちっぽけなまま終わる人間のはずない。違うか？」

そのとおりだ。ヒノカだけではない、信頼して城を任せたジョゼフたち、式典で祝ってくれる人々。彼らのことを思うと誇りと使命感が湧いてくる。背中を押してくれる。

ひとしきり自分を叱った後は、進もう。

「あんまり動かんようなら、尻をけっ飛ばしてでも前に行かせるから覚悟しとけな」

「お、お尻をけられるのはちよつと……」

想像して思わず両手をお尻にあてる。

「じゃあまづは顔を上げよか」

「……はい。ヒノカは厳しいですね、ふふふ」

「それも見込んで、わざわざ旅に誘ったんやろ？」

「ええ……ええ、そうでした。至らないところを支えてくれると思うたから、私はあなたに……」

胸に空いていた穴が優しく満たされているのを感じる。やはり同行してもらったのは正解だった。

「……まったくこの人つたらしが。あーあ、ガラにもないことよう言ったなー。なんか熱くなってもうたわ」

袖から扇を取りだし、パタパタと仰ぎはじめた。

「で、気持ちは切り替わったか？」

「はい。おかげさまで」

「だいぶ調子が戻ってきたな。じゃあ、どうするか考えてもらおか」

「……考える、ですか？」

「今晚、泊まるよこや」

『今日は任せてほしい』と言ったのは自分だ。もちろん宿の手配を含めての宣言だった。さっそく訪れた、小さな使命に取りかからねば。

今、思いついたものだが——寝床の当てがある。

雲のすきまからのびるかすかな光が、その場所を示すようにきらめいていた。

メイドのルネ、登場

競馬場から少し歩いた一带に、競走馬たちの過ごす厩舎がある。太陽と雲が朱に染まり、世話人たちの仕事が終わったところを見計らい、建物の影から身を出す。

「馬房の中とはよく知つとるなあ。カネに困った旅人が使う手やで。まあ競馬場のを使うやつはそうおらんやろうけど」

「子供のころ、城の馬房に隠れて遊んでいたものです。わらの中が心地よくてそのまま眠ってしまい、大騒ぎになったことがありました」
「あー……なんだか目に浮かぶようや」

どの馬房にも、明日のレースに出走する馬がいた。彼らを刺激しないよう気を配りながら空いている馬房を探す。

競走馬が中にいるなら心配ですぐわかるが……厩舎の屋根からるかすかに気配を感じる。

「……あらっ」

右側から人間の子供のすすり泣く声がかすかに聞こえてくる。のぞいてみると、パドックで出会った女の子がうずくまっていた。

あの子はトキをよく知っていた。競争中止になってとても悲しんだだろう。放っておくことはできない……確か『アニー』と呼ばれていたはずだ。

「アニーちゃん？」

「ぐすつ……だれ？」

「覚えてるかな？ パドックでトキを見てたお姉ちゃんよ」

「あつ、おねえちゃん？」

アニーは涙をぬぐってこちらに寄ってきた。

「おねえちゃん、トキをなおせる？」

「ここにトキがいるの？」

「うん。こっち！」

アニーに手を引かれた先、ある馬房の中にトキはいた。

最初に見た雄姿はどこへいったか、ゆがんだ目つきでただぼんやりと立っていた。ほとんど動かない口からは、粘性の高そうなよだれが

垂れている。

「お医者様には見てもらった？」

「うん。おとうさんとむずかしいことだった」

「なんて言ってたか覚えてる？」

「えつとね、おいしやさんは『シヨブンしなさい』って」

頭の中を衝撃が跳ねまわる。後ろにいるヒノ力を向くと、目と目が合った。

処分。つまり『死なせる』ということだ。この言葉の意味を、アニーが理解できなかったのは不幸中の幸いというべきか。

深呼吸をしてアニーの顔を見る。

「……それでアニーのお父様は、お返事をしたの？」

「ううん。こわいかおして『ゆっくりはなしをしよう』って、おいしやさんといっしょにかえつちやった。わたしはトキがしんぱいだから、ついていかなかったの」

おそらくアニーの父親は判断を渋っている。だが猶予はない。

頭上に目を向けて声をかけた。

『ルネ』、出てきていいですよ」

「はいはい」

屋根の上から影が降ってくる。音もなく着地したメイド服の女性は、裾を持ち上げ礼をしてみた。

「お呼びですか、『お嬢さま』？」

「わあっ、びっくりしちやった！ ねえねえ、どこからきたの？」

「うーん……空からかな？ にしっ」

「今話を聞いていましたね？ 一刻を争います。どうかトキを診てあげてください」

「はい、ただちに」

ルネはトキの体を調べ始めた。

「……おおう、いきなりでなかなか言葉が出てこんかったわ。お嬢、あの姉ちゃんはいったい？」

「城のメイドで、ルネという者です。城下町からここまで追いかけてきたようですね」

「ひよつとしてお嬢を連れ戻しに？」

「大丈夫。彼女は私の味方ですから、そんなことはしませんよ」

何かわかったのか、飼い葉が入った箱をまさぐると、真つ黒な団子のようなものをつまんで取り出した。そのままかじって口に含む。

「……こりゃ『一服盛られ』てる。効き目が遅くなるよう細工までして……ずいぶんと手のこんだことをしますねえ」

そう言うのと布切れを取りだし、粒を吐きだしてしまいこんだ。

「治療できますか？」

「んー、ちょうどピッタリな薬草が手持ちにあるし、ちやちやつといけますよ」

アニーは今のやりとりを不思議そうに聞いている。『毒』とわかりやすい言葉を使わないのはルネなりの気づかいだ。

「では頼みます。私たちはアニーのお父様とお医者様に話を」

「トキ、げんきになるの？」

「もう安心ですよ。一緒にお父様のところに行つて教えてあげましょう」

「うん！ こつちだよ！」

涙で濡れていたアニーの顔がぱあつと明るくなり、一生懸命に走りだす。あの笑顔がいつまでも続いてほしいと願った。

関係者の居住地区は馬房の脇に点在している。アニーの家族は牧場の経営者だそうで、レースの時期はいつも借りて寝泊まりしているらしい。

案内された建物に入ろうとしたその瞬間、一人の男が乱暴に扉を開けてきた。

「きやつ」

「なんだ危ないなあ、ホラどきなさい」

「おいしやさん！ トキがげんきになるんだって！」

「は？ そんなこと誰が言ったんだね？」

「おねえちゃんたち！」

医者らしき男は目を丸くして驚いた様子だったが、こちらを見ると深いため息をついた。

「そうかそうか、そりやよかったねえ。じゃ、先生はもう帰るからすれ違いざま、こちらにだけ聞こえるようにボソツとささやく。」

「期待させるのはやめたまえ。この素人が」

「なんやと、オマエ——」

ヒノカが何かを言いかけたところを制止する。ここであれこれ言いたいのは良くない。アニーを怖がらせないためにも黙って見送った。

ひと呼吸おき、あらためて扉を開ける。

「ただいまー！」

「アニー、帰ってきたのか。そちらの方々は？」

アニーの両親だ。いよいよヒノカとの練習の成果を出すときが来た。これから何度も繰り返すであろう大事な儀式。勇気を出して頭を軽く下げた。

「私は、旅芸人一座の座長でエルミーナと申します。こちらは共の者です」

「ヒノカといいます、よろしゅう」

しつかりとあいさつできた！

相手にとっては何気ないやり取り。しかし女王にとっては『エルミーナ』という人間が初めて自分の足で立ったような心持ちだ。

あいさつの勢いを生かしてパドックでアニーと会ったこと、トキの故障を見ていたこと、馬房にアニーがいたことを説明した。

「……それで、本当にトキの容態はよくなるんですか？」

「病や薬に詳しい者がおりまして、手元にある薬で対処できると。既に治療を始めています」

「あ、ありがとうございます！」

アニーの両親は深々と頭を下げ、絞り出すように言う。

「エルミーナさん、その……お薬代はいくらほどで？」

「いいえ、私もトキのすばらしさに感動した身です。私が治したいの

ですから、お代はけっこうです」

ちらりとヒノカのほうを見た。満足気な笑みを浮かべている。彼女も賛成のようだ。

「代わりにと言ってはなんですが、一度トキの様子を見に来てくれませんか？ 万全を期すため、あの子をよく知る方に見ていただきたいのです」

「わかりました。行きましょう」

一家を連れ、もういちどトキの馬房へと向かった。

「アンナ女王杯」出走!

皆がトキの馬房に集まるころには日もすっかり落ちていた。手に持つランプは、馬を刺激しないよう弱めにしてある。

「薬はさつき飲ませたので。明日になってボロをすっかり出せば、ピンピンになりますよ」

「本当にありがとうございます。なんとお礼を言ったらいいか」

「おおきいおねえちゃん、ありがとう!」

「ところで医者に診てもらったって言ってたけど、すぐ匙を投げちゃうなんて根性のないやつですね!。こんなの難しいもんじゃあるまいに」

「あの人はここの専属医師です。男爵様のお墨付きで、腕前のほうは確かはずなんですけど……たしかに今回は雑だったというか。しかし……いえ、なんでもありません」

「へえー、ふうーん……」

ルネの反応には意味がある。その理由に心当たりがないわけではなかった。確かめる必要がある。

「つかぬことを伺いますが、明日のレースに出走する競走馬はお持ちですか?」

「え? ええ、反対側の馬房にいる『ソラ』という子が出ますが……どうして?」

「明日も観戦する予定なので、ふと気になって。おほほほ」

「ソラはね、わたしとおなじひにうまれたんだよ!」

「ほお、誕生日が一緒か。そりゃ思い入れもひとしおやろなあ」

「とつても素敵ですね……」

「出走するのは、最終レースの『アンナ女王杯』です」

「えーっ?!?!?」

すつとんきような声をあげたのはヒノカだ。

「そんなレースあるん!?!」

「あつ。そういえばヒノカは知らなかったような……」

「知らん知らん! この年じゃ知らんやろ、普通は!」

女王が明日のことを気にかけていたのは、何を隠そう自身の名を冠するレースがあるからだだった。そういえばレースの名前について話していなかった気がする。

「実は、アニーの名前は女王様の名前からつけたんです。少しでもあやかれればと思いますね」

「えーっ?!?!」

二度目。今度は同じように驚きの声を出しそうになったが、ヒノカの方が早かったおかげで押し殺せた。

「女王杯でソラが走る……自分で言うのもなんですけど、運命的な巡りあわせのように思えてならないんです」

「えへへ」

「いずれこの子が大きくなったら、誕生日式典を見に行きたいものです。そのとき、うちで生まれ育った馬たちが行進の中にいたら……なんて高望みしすぎでしょうか。ハハハ」

「へ、へー……女王様って慕われてるんやねえ……」

アンナ・ルル・ド・エルミタージュ。その名にあやかっただけの子供の名前を決める親をよく見ると聞いている。とはいえ目の間に実例がいると、嬉しいような恥ずかしいような気持ちでムズムズする。

羽毛のように心地よい感覚にひたりたいのはやまやまだが、今はやるべきことがある。ルネに視線で合図を送った。

「……じゃ、ここらでお開きにしませんか。トキをゆっくり休ませてあげないと」

「ええ、私たちも宿に戻りましょう。おほほほ」

「ありがとう、ありがとうー!」

馬房の前で一家を見送る。アニーは見えなくなるまでずっと手を振り、両親はなんども振り返っては頭を下げた。

「……ん? 結局ウチらの寝泊まりはどうなるんや? 結局わらの中か?」

「ええ。このままソラの馬房で夜を明かしましょう」

「お嬢のことや、何か考えがあつてのことか」

「わたしもお供しますよー」

ソラの馬房に向かう。のぞいてみるとのんびりしている様子だったが、こちらに気づくとトコトコと近寄ってきた。

「ソラ、こんばんは。お邪魔させてください」

中に入るとソラが鼻先をピタツとくつつけてきた。大きな口をもごもごさせながら、女王の肩から首にかけてさすってくる。とてもあたたかい。

「歓迎してくれるのですか？　ありがとうございます」

お返しに首をなで、東の間の交流を楽しんだ。

「では、わらの中で『待ち』しましょう。私がしっかり見ているので、眠っても大丈夫ですよ」

「踏まれたりしませんかね？　怖いんですけど」

「驚かせなければ大丈夫や。ほら入るで」

三人でわらの中に入る。なかなか暖かく、夜風がふいても問題はなさそうだ。

「なあなあ、ソラもええ体つきしてる気がせえへん？」

「ヒノカもだいぶわかってきましたね」

「ちやうわい。なんとなくや、なんとなく」

「そのなんとなくを風格っていうんですよ、『ヒ・ノ・き・ん』」

「ヒノさん……自分よりでかいやつにそんな呼ばれかたすると変な感じや」

女王たちがわらに潜ってどのくらい経っただろう……夜の闇の中、馬たちが奏でる乾いた草の音をずっと聞き続けていた。

そこに雑音が混ざる。土を踏む軽い音。来なければそれでよしと思っただが、やはりそうはいかないようだ。

足音が馬房の前でとまる。わらを抜け出し、月明りがうつす影に忍びよる……気づいたときにはもう遅い。

手首をつかんでひねりあげ、その体を地面にたたきつけて屈服させる。苦痛の声をあげる暇もなかったろう。

「か、く……っ！」

「このような時間に何のご用でしょうか、『先生』？　ぜひお聞かせください」

翌日。

『証人』を確保した女王は、遠巻きにソラの入場を見とどけてから客席へ行くつもりだったのだが、どうも様子がおかしい。

駆けつけてみると、アニーの父親と係員が口論をくりひろげていた。

「騎手がいないってどういうことですか!？」

「彼はアデュウ男爵の命令によって謹慎処分を受けたのだ。この馬を出走させたいなら、別の者を探してくれ」

「そんな急に処分が下るなんて聞いたことがありません、騎手が何をしたっていうんですか!？」

「なんだっていいだろう。とにかく、今おこなわれているレースが終わるまでに代わりを連れてきなさい」

「ひどい、時間がなさすぎる!？」

「私に言われたって困るんだよ!？」

他に道はない。

「あの!　私にやらせてください!？」

まさか騎手としてレースに臨むことになるなんて……しかも自身の名を冠する『アンナ女王杯』に。

乗馬の経験はある……どころではない、大好きな趣味の一つ。ただ、城の外を走ったことはなかった。まだ早い、とジョゼフに何度も言い聞かされたものだ。この姿を見たらららひっくり返ってしまうかもしれない。想像すると少し笑ってしまう。

ファンファアレ。競馬場が期待に波打ち、人々の願いを天に放つ魔法の時間。

人前に出るといえば式典のパレードだったが、まったく違う。

式典は女王が中心になって祝福と喜びを分かち合う、渦のようなものだ。レースでは競い合う騎手、そして競走馬たちと肩を並べる。みんな対等の立場だ。

観客がそれぞれの想いを送り、ひとりひとりが湧き水のごとく、競馬場の中で混ざりあい激流となって打ち寄せている。

この勝負、力の限りを尽くそう。

横たわる静寂……そしてスタートの号砲が鳴った！

優勝、そして男爵のもとへ

スタートはうまくいった。まず逃げ馬が一頭、そのすぐ後ろにつける馬、数頭……ぐいぐいと前に出てレースを引つ張る。全体が縦長のびていく中、女王はやや後方に位置をとった。

この展開は悪くない。馬群の中に飲まれてしまえば、経験のないこちらには不利だからだ。

むやみに内や外を意識せず、余裕を持って走る。

レースの時間は短い。熱々のスープを冷ましながら、飲みほすころには終わってしまうほどに。

だが集中力というものは時間をひきのばす。女王だけではない。おそらく全ての騎手が、無数の未来を想定し、愛馬との声なき意志交換をくりかえしている。するどい駆け引きが千日手のごとく行われているのだ。

ソラはのびのびと走っていた。前に行きたがるそぶりもなく、『いつでも大丈夫』と語りかけているようだ。なんて賢くて頼もしい子……騎手として、この力と信頼にこたえなければ。

最終コーナー。ここで手綱を押して合図を送る。勢いよく上がっていこうとしたが、勝負どころなのは相手も同じ。

先行馬たちが塊になっていく。最後の直線にむけて、壮絶な位置取り争いが始まった。ここに割って入るのは得策ではない。

最終直線――

馬群が左右に広がって進路を阻む。速度を落とさぬよう、ゆるやかな曲線を描いて突入した。馬群の外側を、大きく回る。結果、道はひらいた。

ここです！ 温存した力を解き放つ。

わずか左にヨレかかる。すかさずムチを左、逆手に持ってたたき、方向を調整する。やがてクツ……クツ……と体が沈みこむ感覚がやってきて地面の感触が消える。

空と地面の境界……地平線の中に入りこんだような、不思議な世界

だった。

大外一气。ムチをたたきつづけ人馬一体、空を切り裂く刃になった。一頭を追い抜く。二頭、三頭、四頭、五頭——そこから相手も強い。ほぼ横一線に並んだ状態でゴールが迫る。

最後の瞬間、他の競走馬が視界から消えていた。自分の前に、誰もいなかった。

アンナ女王杯、一位入線。9番ソラ。

人々がつむぐ激流のいきつく先は、清らかな大海原だった。海が裂け、あらわになった大地が道を作る。女王とソラの栄光に満ちた道。すべての声が、すべての叫びが、すべての想いが今、彼女たちのためにある。

関係者席に目をやると、めいいっぱい腕を振って喜ぶアニーと家族の姿が見えた。

「おねえちゃーん!!」

「エルミーナさーん!」

皆、顔をくしゃくしゃにして喜んでいる。そんな一家の様子にっられて、万感の想いがこみあげてきた。目頭の熱さを伝えるように、ソラを優しくなでる。

「ソラ……ありがとう。よくがんばってくれました」

青く透きとおった時間が、長く、長く、女王の心身を満たしつづけた。

レースの余韻とともに観客たちが席を立ち始めたころ。ようやくソラが馬具から解放され、一家のもとに帰すことができた。こちらが恐縮してしまうほどの勢いで、何度もお礼を言ってくる両親をなだめながら、飛びつくアニーを受け止める。

そんな歓喜の中に割ってはいってきたのが、アデュウ男爵の家来だった。

「男爵様が、お前たちを直々にたたえたいとのことだ。来てもらおう」「えっ！　だ、男爵様が？」

両親は驚きをかくせないようすだった。観戦した貴族が、レースの勝者を呼ぶことはよくあること。牧場主なら、経験しているはずだ。呼び出しに驚く理由は他にある。

「光栄に存じますが、その……あのお方と顔を合わせるのは……」

「まさか断るとは言うまいな？」

「うっ……」

背筋を伸ばし、ムチをビシリとのばすように挙手して家来の注意を引く。

「私が行きます！　騎手としてあの子の力を引き出し、勝たせたのは私の功績ではないでしょうか！　おほほほ」

「エルミーナさん!？」

「フム……急な騎乗にもかかわらず一着にしてみせた。その手腕は認めるべきか。まあ『騎手でも効果は充分にある』だろう。よし、お前だけでいい。ついてこい」

どこか憐れむように鼻で笑って、スタスタと歩き始める。

「エルミーナさん……実は、アデュウ様はうちと揉めたことがあります。この呼び出しも一体なにを言われることやら……」

「はい。『先生』から、事情はくわしく聞いています」

「それって、あの医者のことですか？」

微笑みながらうなずく。優しく、さとすように。

「どうか私に任せてください。きっと、あなた方に良い知らせを持ちかえってみせます」

アニーの頭をなで終わると、小走りに家来の後を追いかけた。

背中から小さなつぶやきが聞こえた。

「あのお嬢さん……何者なんだろうっ?」

レース中、アデュウ男爵は昨日と同じくテラスにいた。ヒノカが見上げていたのを思い出す。そのテラスに通じる石造の建物には、他の席とつながる通路などない。壁のぼりでもしないかぎり、侵入ルート

は入り口の門だけだ。

女王もここで何度かレースを見たことがある。内部では立食パーティーを行えるほど広い空間がある、壁も厚い。『多少の音や声』があがっても外に漏れないだろう。

もともと男爵に会うべく乗り込むつもりだったが、いい形で来ることができた。これならば他の人々に騒ぎを広げる心配はない。

あの二人もきつとうまくやっている。

「ヒノカ……ルネ……こちらは順調ですよ」

「なにか言ったか？」

「いえいえ、なにも。おほほほ」

大広間の中央につくと、両手を重ねて頭を深く下げた。礼の形である。

「アデュウ男爵様の、おなーりー」

奥から男爵がやってきた。立つ場所は上段の間。背後には絵画やトロフィーがずらりと展示されている。

「お前が騎手か。もしやと思っていたが、まだ子供ではないか？」

「……このたびはご招待くださり、ありがとうございます」

「フン！ あの頑固で融通のきかん田舎牧場の輩も、よほど窮したと見える。どこの馬の骨とも知らぬ者に騎乗させるとは」

『ひとレースが終わるまでに代わりを探せ』などと言われれば、誰でも良いと考えるのも無理ないかと」

「しかし、それで勝ってしまうのはいささか出来すぎだ。これほど腕のいい人間がすぐ近くに……まったく運のいい奴らめ！」

つま先で腹立たしげに床をたたきながら吐き捨てる。その様子に、貴族の誇りを感じることはできなかった。

「もし私の力をお認めになつてくださるならば、ひとつ男爵様のお耳に入れたいことがございます」

「よけいなことを言うな、男爵様の御前だぞー！」

「よいよい。この者と再び会うこともない。貴族の情けだ、聞いてやろう」

いま彼は『再び会うこともない』と言った。残念ながら、呼んだ理由は想像の通りらしい。

わずかに視線を上げてトロフィーのひとつをちらりと見ると、ルネの姿がわずかに映っているのがわかる。

「さすがは男爵様、感謝いたします」

準備はととのった……はじめましょう。

おねえちゃんみたいに

女王は敬礼の姿勢をたもったまま、男爵の耳にしっかり聞こえるよう、ゆっくり、はつきりと話し始めた。

「先日の最終レースで競争を中止した1番の競走馬についてですが、その後の調べで毒物を口にしていたことがわかりました。飼い葉の中に、何者かが混入させていたのです」

「ほう、それで？」

「男爵様は、あの子……ソラをたいへん気に入られ、牧場主から買い上げようとしたところ断られたと。自分のものにならぬ、いつか他の者の手にわたると思うと我慢ならんと——」

「おい貴様、まさか俺が指示したというのか!!」

広間中に怒声が響きわたった。飾られた絵画やトロフィーが一瞬ふるえるかというほどの剣幕だ。

「俺の顔をよく見ろ、誰と話しているかわからんとでも言うか!!」

「男爵様……」

顔を上げる。『黒幕』は目の視点がさだまらないほど打ち震え、肌という肌が紅潮していた。その怒りを突きさすように、ただ真つすぐ見返す。

「私の顔をよく見なさい。あなたこそ、誰と話しているかわかりませんか？」

「……おのれ! もういい、今すぐその首をはねてやる!!」

激情の男爵が腰の剣に手をのばしたそのとき、ハッと息をのんで女王の顔をもう一度のぞきこんだ。

「まさか……女王……さ……ま? う、うわーっ!」

悲鳴をあげながら転げ落ちるように平服する。家来もあわてて主人にならった。

「しししし、失礼しました!」

「アデュウ男爵。私怨をつのらせ、罪のない競走馬に毒を盛り、葬らんとした罪……女王として、許すわけにはいきません」

「お……恐れながら申し上げます。女王様のお言葉ではございますが、まったく身に覚えがありません。何かの間違いでは？」

「それは通じないよー、男爵さま？」

上段の間からルネの声があがった。昨夜つかまえてた医者を引きつぱり、男爵の前に突きつける。

「あなたの悪事は、この人がゼーんぶ白状しちゃったから！」

「だ……男爵様あ……」

「お、お、お許しを！ 名誉ある『女王杯』を汚してしまい、まことに申しわけありません!!」

「最初に詫びることがそれとは、なげかわしい。競走馬の命と、手塩にかけて育てた人々の想いを踏みにじった罪こそが、最も重いと知りなさい」

「う……ぐっ」

「女王の名において、あなたの爵位および全ての権限を剥奪します。この地域をおさめるユージウフ公によって、厳しい裁きが下されると覚悟するように」

「……くそつたれ！ みんなのもの、出会え、出会えーっ！！」

建物中の兵士たちが集まる！

「こいつは女王様の名を騙る不届きものだ、生かして返すな!!」

言葉をかけるのはここまで……武力をもってアデュウを制す。

まっすぐに手をかざし、意識を集中させる。

「……星剣！」

周囲に衝撃波をもたらしつつ、手中に星剣があらわれた。

「クソツ、ひるむな!!」

最初の攻撃は背後からやってきた。軸足を床に突きさし、すばやく回転しながら返す剣を打ち込む。仲間を壁にたたきつけられた兵士

たちは、一瞬おどろいたものの、すぐに襲いかかってきた。

剣筋のすきまに体を流してすり抜け、右、左と二人の背後を叩く。次の相手は……と槍のような視線をめぐらせると、兵士たちはそれを避けるような足運びを見せた。

後退していく氣勢を見逃さず、二歩……三歩とアデュウとの距離を詰める。

うち数人がルネのほうへ向かっていくのが見えたが、彼女はただのメイドではない。

徒手空拳ならば騎士団長ピエールさえも組み伏せる。その実力は女王も認めるところだ、問題なくなぎ倒すだろう。

「うわああああー！」

思わぬ劣勢に臆したか、武器をやみくもに振りまわしはじめた者たちは、もはや隙だらけだ。流しつつも体重をのせた強烈な一撃を食らわせていく。

全ての兵を倒されたアデュウは、顔をこわばらせて飾り棚にすがりつく。そして棚上のトロフィーを手あたり次第に投げつけてきた。

「くるな、くるな、くるな、くるな！」

最後のあがきをすべて打ち払い、間合いに入る。

「覚悟！」

青くなつた顔に横一閃。アデュウは体ごと二、三回転し、白目をむいて倒れた。

終わった。

ルネがこちらに駆け寄って裾を持ち、礼の姿勢を取る。ちらりと見える脚には短剣が忍ばせてある。

「この人、どうします？　なんなりとお申しつけを」

「そのままに。まもなくヒノカが、ユージウフ公の使いを連れてやってくるころでしょう」

「かしこまりました」

物見窓をのぞくと、ちょうど頃合いだったようだ。ヒノカと一緒にちかづいてくる集団が見えた。

彼女には大急ぎで書状を運んでもらっていた。昨日からずっと振

り回しつづけていたから、後でお礼をしなくては。

その後しばらくはアデュウたちの捕縛があわただしく進められた。混乱を避けるためアニーたちにはあえて真相を話さず、ただ『不正行為があきらかになった』とだけ説明した。

「まさかあの方が捕まるなんて、世の中なにがあるかわからないものですね……」

「わるいことをするひとは、ちゃんとかメガミさまがみてるんだよ。わたしきいたことあるもんっ」

アニーは小さな胸をはって父親を諭している。

「そうだねアニー。そう考えると……あの方を連行するために、馬車を使わせてくれてって言われたのも……うちが頑張ったご褒美みたいなものかな？」

「むりやりトキをつれてこうとしたバツだね！」

父親はそうだね、と微笑みながら愛娘の頭をなでた。

「それでは名残惜しいですが……私たちはそろそろ、おいとまします。ソラに騎乗させていただいたこと、一生忘れません」

「とんでもない。こちらこそソラとトキがお世話になって、なんとお礼を言ったらいいのか。本当に、本当にありがとうございます」

「ねえ、おねえちゃん」

アニーが袖をひっぱってきた。宝石のようにきらめく目でこちらを見ている。

「わたしのおおきくなったら、おねえちゃんみたいなカツコいいひとなるっ！」

じんわりと心臓が熱くなる。そのまま膨らんで風に吹かれ、雲ひとつない空へと飛んでいってしまいそうだ。

自分は今どんな顔をしているだろう。生まれて初めての表情をしているに違いない。そんな想像すらも楽しく思ってしまうほどの高揚感だった。

思わずアニーを抱きしめる。

「とても……とても光栄です」

その後の道中、ヒノカには大層からかわれた。ほんのり浮かれた良き時間を、親愛なる友人と共有しながら次の町へと道を歩く。

仲睦まじい二人の様子を、ルネも楽しげに眺めていたが、いつの間にやら巻き込まれ、話の花がいつそう賑やかになっていくのだった。

水車の町で、商売上手

轟音の中、女王はめいっぱいに上を向きながら驚嘆の声をあげた。

「なんて大きい！　これが噂にきくメルルバルの水車っ！」

「そうや！　この町に来たら、見ておかんと損やでえ！」

「こうして目の前で回っているのに！　水車だと知っているのに！

現実なのかと思えるほど……大きいですねっ！」

以前メルルバルの町を訪れたことがある、とヒノカが言うので案内してもらっている。

「どんなところなのか尋ねてみても『見てのお楽しみ』と、なかなか教えてくれなかったのも納得だ。」

名物の巨大水車は、たとえば伯爵の城がすっぽり入ってしまうのは、と思うほどだった。

垂直に流れる滝の力をうけ、ざあざあ、ごうごうと唸りをあげて回り続ける。自然と人工の共演は目と耳だけでなく、肌にも存在を感じさせた。

城で読んだ書物によれば、メルルバルと水車には二百年以上の歴史があるという。

その間ずっと回りつづけてきた、人々の暮らしを守る『大先輩』。一歩すすんで軽く膝をつき、あらためてその雄姿を心に刻む。

「これからも、どうか私たちを見守ってください……」

「嬢—まつ、そろ——き—んか？」

ルネがなにやら話しかけてきたが、日ごろから控えめな声でこの音の中では聞き取りにくい……おそらく『そろそろ行きませんか』と言っているのだろう。

もう一度、水車に軽く礼をしてその場を後にした。

水車から離れ、町の中心部までやってきた。

赤い屋根に白塗りの壁、見た目にも華やかな建物がずらり、きれいに並んでいる。これらのほとんどが商店と工房、そして宿屋らしい。大通りを見渡せば、露天商もそこら中にいる。ある者は手をたたき、ある者は品物をかかげて売りこむ。

城下町や競馬場とは違う、太陽熱のような活気にあふれる町だ。

「……いやあすごい音でしたー。お嬢さまとヒノさん、わたしの声、聞こえますかー?」

「聞こえてますよ。うふふ」

「んー、なんだかまだ耳の中で音がしてる気がしちやいますよ」

「ウチは一年ぶりやけど、あいかわらず腹の底まで響くなあ。ようし、気合は充分や。始めよか!」

やや人の少ない一点に目をつけ、袖に手を引つ込めゴソゴソし始めたヒノカ。これは彼女が芸を始める準備だ。

観光名所……訪れた人々が気前よくお金を使う地域。つまり旅芸人にとっては良い『稼ぎ場』である。

『ここやと思つたらすぐにやる』のがコツ、とのこと。

ヒノカは取りだした横笛に口をあてると、小気味のいい音色を鳴らしはじめた。

「さあさあ、よつてらっしゃい、みてらっしゃい! お代は観てのお帰りやでー!」

まずは道ゆく人々の注目を集める。喧騒に負けてはいられないと、大きくも澄んだ声を響かせた。

何人かが立ち止まったのを見計らい、笛を口にくわえたまま、両袖から扇を取りだして踊りをはじめぬる。

長い袖が、つむじ風につけて舞う花びらのように美しくたなびき……ヒノカの周囲に人だかりができていった。

この間、笛の音色も絶やさない。

口だけで器用に、簡素で覚えやすい旋律をくりかえし続ける。

踊りに一区切りがついた瞬間、扇をパチンと閉じる……すると先端から大量の紙吹雪が吹きあがった。

「おおー」

人々が見とれて感嘆の声をあげる。

視線がヒノカのほうへ戻るのを見計らい、再び扇を勢いよく開く。するとどうだろう、先ほどは真つ白だった扇が、鮮やかな朱色に変わっていた。

再開した踊りは、うってかわって直線的な振り付けと、情熱的な音調で魅了する。

ところどころで印象的な『見栄』をきって静止……しつつ扇を開閉、そのたびに青・黄・緑・紫——と色が変わって民衆の目を飽きさせない。

旅芸人ヒノカの舞台は盛況のなかで幕を閉じた。

惜しめない拍手とおひねりが送られ、子供たちが目を輝かせて彼女との握手を求めた。

女王はあいさつして回る友人に気づかれないよう、そつと銀貨が入った袋を地面に置いた。

賞賛するひとりとして、少しでも気持ちを表現したかったからだ。

「いやあ、すばらしい！ すばらしかったよキミ！」

身なりの良い痩せ身の青年が手をたたきながら声をかけてきた。

「さぞ懐も重たくなっただろうねえ」

「……どうも、おおきに」

「……ではそこにいるお連れの美しいお嬢さん！ お近づきのしるしにこれを受けとつてくれたまえ」

青年はくるりと女王のほうを向くと、小さなブローチを手渡してきた。

「まあ、これをいただけるのですか？」

「なかなかいい品だろう？ あそこにあるボクの店、陶磁器を取りあつかってるんだけど……もっと美しくて価値のある品がたくさんあるよ！ さあこっちにおいで。まずは中に入って話を——」

早口でまくしたてながら背中手に手を添え、わずかに押してくる。一

見親しげなもの、客を引き入れるにはやや強引な印象を受けた。

誘導しようとする方角には、ひととき目立つ新築とおぼしき大きな建物があつた。

「せっかくのお誘いですが、持ち歩くには少々かさんでしまいますし……」

「小さくてかわいらしいのも揃えているよ。その手の中のブローチが何よりの証拠、さあ行こう」

「いえ、その……困りましたね」

「待った!」

ヒノカが割って入ってきてくれた。彼女の後ろにひかえていよう。

「ここは任せたほうがよさそうだ。」

「あんちゃん、ちよつとしつこいんとちやう?」

「まさか! まつとうなお誘いだよ? お疲れだろうけどキミもおいで。その美しさをいつそう引きたてるものを見つくりつてあげよう」

「お断りや」

両手を突きだして拒否を示した。青年は一瞬、眉をひそめたが、すぐに笑顔を取り繕ってヒノカの袖をつかんだ。

「そう言わずに中へ、さあさあ、中へ!」

腕をひっぱった拍子に、彼女の袖からガチャリと小瓶がいくつかこぼれ落ちた。

「おっと……あつ!」

小瓶からこぼれたのは鮮やかな色の液体だった。

蓋が取れてしまったらしく、青年の服にも飛び散って、極彩色のしぶき模様を作っていた。

「ああああああ!! ぼ、ボクの服が!」

「おっとつと、芸人の袖にはいろいろなモンが入ってるさかい、気いつけや」

ヒノカは悪びれることなく小瓶を拾っていく。

「コイツはウチ特性の染料や。早く洗わんと一生かかっても色がとれへんで」

「冗談じゃないよ！　ちくしょう、おぼえてろよ！」

染まってしまった部分をかばってガニ股になりながらも、青年はタバタと足を動かして走り去っていった。

先代女王のあしあと

「ヒノカ、ありがとう。助かりました」

「どういたしまして。悪質な客引きやったなあ……前はあんなのおらんかったで」

「悪質ですか……強引だと思っただけでしたが、判断しかねなくて……まだまだ勉強が必要ですね」

「今の人が言っただお店って、あの派手なところですよね」

「ん？ ああ、あの看板か……目が痛くなるような色やな」

『シャルカン商店・メルル焼きならここが一番！』

かがやく銀色に加えて七色のらせんが縁を飾る看板をはじめ、白塗りの多い町のなかでとても目立つ店だった。

遠くからながめるだけでも繁盛しているとわかるほど、長い行列ができています。

「お嬢さま、そのブローチ見せてもらえますか？」

「ええ、どうぞ」

ルネといっしょに、先ほど渡されたブローチと店を見比べる。

メルルバル産の陶磁器は『メルル焼き』と呼ばれ特に有名で、女王の城にも多くの名品が納められているほどだ。

人気店ならばツヤ、色合い、形……あらゆる点でも最上級にちがいない。

そう思っていたのだが……

先に口を開いたのはルネだった。

「言っちゃなんですけど……すごく良いもの、というほどでもないような……」

「そう見えても、たくさんのお客様が足を運ぶ理由があるはずですよ」

「二人そろって難しく考えてるようやけど」

小瓶を拾い終えたヒノカ。

「繁盛の理由は『目につきやすい』からやと思うで」

「それだけで人が集まるのですか？」

「目立つのも大事や。誰も来んかったら商売にならんからな。もちろん、値段と質もおろそかにしたらあかんぞ？」

「値段と質……あのお店の品はどうか、気になりますね」

「ひよつとして中に入るつもりなんか？ やめといたほうがええ、またアイツに絡まれるかもしれんで」

「とはいももの、『商売』については知らないことが多い。この機会に少しでも学んでいきたかった。」

そこに助け船を出したのは中年の紳士……もとい、変装したルネだった。

「なら、ここはわたしにお任せくださいな」

「うおつ!? え……その声、まさかルネの姐さんか？」

「その通りですー。これならさっきの人にもバレないですよ。にしっ」

「頼みましたよ……あら、もう行ってしまいました」

「ずっと思つとつたんやけど、あの人ただのメイドじゃないやろ……いったい何者なん？」

「うふふ。彼女は本物のメイドですよ。腕がたち、医療にもくわしい……薬師になりすまして隠密活動ができる素晴らしいメイドです」

「つちゆうことは……なんて言うんやっけな……あー思い出した。『忍者』みたいなもんか」

「ニンジャ……？」

聞きなれない言葉だった。けれど――

「なんだかい響きの言葉ですね……これから使わせてもらってもいいですか？」

「えっ……うん、まあ、お嬢がええと思うならええんやないかな」

メイド忍者、ルネ。

いつか城にもどったら彼女をそう任命しよう……使いどころは難しいが。

本物のメイドあらため『メイド忍者』が帰ってきたのだが、報告の
声はすこし残念そうだった。

「商品の数ばかり多くて質はあんまり……それでいて値段はいつちよ
まえでした。ちよつとぼつたくりかなーと、わたしは思いますね」

「それでもお客さんがあんなに……商いとは複雑なのですね」

「あまりにたくさん人がいたんで、天井にはりついて偵察するハメに
なりました」

「アンタはクモかなんかかーい!!」

ヒノカの切れ味するどい声が響きわたった。

その日の夜、宿屋の広間でたいへん興味深いものを見つけた。

精巧なメルル焼きの人形。それも――

「……母上？」

幼いころの記憶より若い顔立ちがよく似ている。なによりも頭
上にかかげる剣が『星剣』そのものだった。

宝物を見つけたような気持ちになり、二人を呼んで一緒にながめ
た。

「どうです！ このお姿、とつてもよくできているではありませんか
！」

「へえー……こりやたしかに誰かさんそっくりやなあ」

「わたしは絵でしかお姿を見たことありませんけど、そっくりです
ねー」

「横から失礼します。お客さん、その人形に興味がおありで？」

ちよつどよく宿屋の主人が声をかけてきたので、聞いてみることに
した。

「このメルル焼きがいつごろ作られたものなのですか？」

「二十年ほど前……先代の女王様が、お忍びでお越しになったとき
のお姿をもとに作られたものです」

「まあ！ やはり先代をかたどったお人形なのですわね！」

「ええ。ストガルドという名の職人が、その勇ましさに感銘を受けて作ったとか。『先代が一晚を過ごしたこの宿に置いてくれ』と、私の父がゆずり受けてここに置かれたそうです」

「一晚を……ここで？」

「はい。当時この宿はできたばかりでして、お客さんがぜんぜん来なくって……私も子供ながらに、頭をかかえる父の心配をしたものです」

「そこへ先代が泊まりにきたつちゆうわけか」

「もちろん最初からわかっていたわけではありません、お忍びですからね。後でわかったときは大騒ぎでしたよ。それからお客さんが入るようになって……あのお方には本当に感謝しています」

「女王が泊まったとなれば、このうえない宣伝になったやろなあ……」

「ジョゼフ様が苦労したっていうの、ちよつとわかったかも……」

「お忍びで……この町に……」

母の話を聞いていると、好奇心がわいてくる。

女王として目標であり理想の人物……なによりも今は亡き肉親。

もつとよく知りたいと思った。

「あの、お人形を作られた方に、ぜひお会いしてみたいのですが……ストガルド殿は今もこの町におられますか？」

「いますけど、あの人はなかなか気むずかしくて……いや、最近は宣伝に力を入れるって言ってたから大丈夫かな。わかりました、工房の場所を教えましょう」

翌日。

職人をたずねて工房までやってきた。大通りから外れた脇道に立つ、質素だが広さのある建物だった。

古そうな木製のとびらの上に、不器用な字で書かれた看板がぶらさがっている。

『メルル焼きならここが一番！』

「お嬢さま……つい昨日、同じうたい文句を見たことあるんですが

……」

「偶然でしょうか……コホン。気を取りなおして……」

とびらをノック。

「ごめんくださいませ」

中からドタドタと足音がして、勢いよくとびらが開く。

女王たちを出迎えたのは真つ白な髪と髭をたくわえた、体格のいい男性だった。彼が職人ストガルドだろうか。

「いらっしやいますし！ メルル焼きのご注文でござえますか！ おつと待てよ、見学つてのものもあるし……あとなんかあったかな、あーつと——」

「ストガルド先生、落ち着いて！ 用件は客が自分から言ってくれます」

「ああ……こいつは失礼しやした！ なんなりとお申しつけを！」

後ろの男に指摘されると、慣れない様子で頭をぺこぺここと下げはじめる。

「はじめまして。私は、旅芸人一座の座長エルミーナと申します。こちらの二人は、共の者でございます」

「こりやごていねいにどうも！ あっしはストガルドでござえます！」

『職人ストガルドは気むずかしい』と聞いていたが、想像とは違った意味でむずかしいかもしれない……

職人ストガルドの焦り

職人ストガルドは不器用ながらも出迎えてくれた。

奥にあるこじんまりとしたテーブルに案内され、席につく。

「ほら先生、次はお茶ですよ！」

「よっしゃ茶を出せばいいんだな。お嬢さんがた、ちよつと待ってく……待っててくださいえ」

ストガルドは小柄な男に言われるまま、飲み物をもってきた。

「さあどうぞどうぞ」

「ありがとうございます……いただきます」

出されたお茶を飲んでみる。

すこし冷たい……

陶磁器を焼くための窯はたいへんな高温になるという。今もそうだが、工房の中はどうぜん暑くなる。

おそらく彼は、このように低温の水分を取ることと熱と戦っているのだ。

「先生、これすっかり冷めてるじゃないですか。『お茶はあつあつに限る』っていつも言ってるくせに！」

「ああその……外から来た人にや、ここはちよいと暑いんじゃないかと思ってるよ」

どうやら違ったらしい。

しかし、精いっぱいもてなそうとする心意気をうれしく思った。

「お心づかい、身に染みわたります……おいしいです」

「……では先生、そろそろ時間になりますんで、これにて失礼しますよ」

「おい待ってくれよ。客人のもてなしはこれからなんだ、もう少しいしてもらえねえか」

「ダメです。もらったお金のぶんしか働きません」

「なら追加料金を出すから、頼まれてくれよ！」

「そういうのは無し、との契約でしょ？」

「う、ううむ……」

「ま……じゃあですね、お土産をお客さんに渡します。ここまでを特別にタダでやってあげましょう」

男はそう言つて棚から紙に包んだ『お土産』を出すと、テーブルの上にころりと転がす。

「記念品なんで、お代はけっこうですよ」

包みを開けてみるとメルル焼きとおぼしきブローチが入っていた。

よほど急ぎの用事があるのか、男はこちらが開けるのを見もせず、そそくさと出ていってしまった。

一人とりのこされたストガルドのほうは不安げだ。

「弱つたなあ……」

少しでも気を楽しませたい。そう思つて声をかけた。

「ストガルド殿、差し出がましいようですが……少々ご無理をなさつてくれるように思います。どうぞ普段通りの言葉でお話してください」

「えっ？ いやいやとんでもない！ そんなことをしたら相手は何も買つてくれないと言われてるんで……」

「先ほど出ていかれた方にですか？」

「そうそう。あいつは金さえ払えば、客商売の指導をしてくれる奴で。あつしにとつては向こうが先生みたいなもんなんでさあ」

「先生ねえ……」

ぼそつとつぶやいたヒノカは、お茶を一気に飲み干し、コップをテーブルに置いた。

「ま、ウチらは言葉使いで気を悪くしたりせえへんから、お嬢の言うとおりにして大丈夫やで」

「わたしからもお願いします。気楽にいきましようよー」

「そこまで言われたら……断るわけにはいかねえな。普通にしゃべるとするか！」

肩をぐるりと回しながらくだけた口調になったストガルド。表情も自然な形に見えた。

大きく息をついたあと、何かに気づいたようにポンと手をたたいた。

「おおそうだ！ すっかり後回しになっちまったが、お嬢さんがたはなんの用でここに？」

「宿屋で、先代女王をかたどったメルル焼きの人形を拝見しました。そこのご主人の話ではストガルド殿の作品だと」

「あれか！ いやあ、あのころは俺もまだヒヨッコだった。懐かしいなあ」

「先代の女王様が町に来られたところに作られたと聞いております。当時のお話をうかがいたいのです」

ストガルドは遠くを見るような目で語りはじめた。

「毎年この時期になるとメルル焼きの『品評会』がひらかれるんだ。ドーコー伯爵が出席してその年一番の作品を選ぶ。それがこの町の職人にとっちゃ最高の荣誉なんだ。当時の俺にとっちゃ雲の上の話だったぜ。出品しようとしても無名だってんで断られる……伯爵に見てもらうだけでも高い壁があるのさ」

「品評会か……去年は『当日および前後の日は露店・演芸の一切を禁止する！』って怒られたな。人が集まるからええ稼ぎ時と思ったんやけど……」

「ヒノさんが昨日すぐに仕事したのって、そのせいだったりします？」
「そう。なにせ『明日が開催日』やからな。今日じゃ、あんなふうにはれんのや」

「ストガルド殿、大事な催しがあるのなら、私たちが来てご迷惑だったのでは？」

「んなこたあねえって！ 自慢じゃないが、今の俺はいつも最優秀賞を争うくれえの腕前でね……きっかけになったのが、あの先代様の人形なんだ。あれが俺にとつての壁をぶっ壊したんだよ」

胸をドンとたたいた後、すこし視線を落としてつぶやく。そこには言い知れぬ執念が宿っているように思えた。

「今年はずつたいに負けねえ……シャルカン商店にはな……」

つかの間の沈黙の中、かける言葉を思索していると、工房の奥から若い男の呼び声がした。

「お父ちゃん！」

「こ、こら！ 仕事中は親方と呼べって言うてるだろ！ 客がいるんだぞ客が！」

「え!? お客さんが!？」

飛び出てきたのはストガルドに似た顔立ちをした壮年の男性だった。

「うわっ本当だ！ ええつと、いらっしやいませ！」

「こんにちは、お邪魔しております。どことなく面影を感じます……息子さんですか？」

「はい、親方の息子のザットといいます。どうぞお見知りおきを！」

ザットはきちつとしたお辞儀をして挨拶をする。とてもまじめそうな印象だ。

「……で、何の用だ？」

「なんだっけ、ああそうだ！ 窯出しできる温度になったよ」

「もうそんな時間か……おー、たった今ひらめいたぜ！ お嬢さんがた、よかつたら見てくか？ これから今年の品評会に出すやつの上げに入るんだ。先代様のことは、やりながら話そうじゃないか」

「まあっ、見せていただけののですか！」

窯出し……作品にとって『誕生』への重要な一歩だ。そこに立ち会えるとはなんとという幸運だろう。しかし、話しながらでも仕上げができるものなのか。

『負けねえ』と言った彼から感じる『焦り』は相当根深いようだ。

仕事の邪魔にならないよう注意を払わねばならないが、もう少し探ったほうがよさそうだ。

ふと、手の中のブローチに目を落とす。

この小さな作品も同じ窯の中から生まれた兄弟。そう、同じ窯の中から――

——そうでしょうか？

女王はよく似た品物を知っている。まさに兄弟に見えるものを。

「……ルネ、これの出どころと、先ほどの殿方について調べてください」

「そう言うと思ってました。にししっ」

窯出しの立ち合いには、ヒノカと二人で行くことにした。

先代もやはり強かった

メルル焼きを生みだす窯……その周辺は、熱そのものが『膜』を作っているのではと錯覚するほど空気が違った。

火を止めて丸一日以上たっているそうだが、燃えさかる暖炉のそばより熱いのではないだろうか。少なくとも城ではこれほどの熱さを感じたことがない。

ストガルドとザットが窯の中へと入り、取りだし作業をはじめ。汗をにじませながらテキパキと運ぶ姿は強く、頼もしい。

ほんの一端にすぎないと理解しながらも、彼らの偉大さを知ることができたように思う。

「よいさっー！」

「はいっー！」

二人のかけ声、作品が台に置かれる音……それら一つ一つがメルル焼きたちの産声。

灰と土ぼこりのおいさえ、神秘の一部のように思えた。

邪魔にならないよう、離れたところから見守りつづける。

こめかみから汗が流れる……体にもじつとりとした感触。となりのヒノカも同じのようだ。

彼女の袖には扇が入っているが、不思議と使う気にはならなかった。あおぐことで空間の何かを変えてしまいそうに思えたからだ。

「よっしゃあ、これで全部だ！ お嬢さんたち、もっとこっちに来ていいんだぜ。遠慮しないで見てくれよー！」

「では、失礼して……」

台のまわりをぐるりと歩き、目に焼きつけるように眺めていく。お皿、カップ、ソーサー……どれも良いものだが、際立ったものが一つ、目についた。

直径が女王の肩幅ほどもある大きな皿。

「ストガルド殿、このお皿が特にすばらしいと思います。もしかして

品評会へは、これを？」

それにはメルルバルの巨大水車の絵が描かれていた。

水と苔——青と緑のなめらかな色調は、熱さを忘れるほどに涼しげ。さらに大皿そのものが二百年の年月を過ごしたかのような、水車本体の色合いが絶妙だ。

そして夜空にうかぶ月のような円、月光のごとく穏やかに輝く光沢……平穏、希望、情熱、期待……職人の感情が込められた名作だ。

伯爵の目にとまるのは確実と思えるほどに。しかし——

「いや、それはザットが作ったやつだ。俺が品評会に出すのはこっただぜ」

そう言つてストガルドが指差したのは、鈍い金色のティーポットだった。

白を下地に、金のツタがすみずみまで巻きつき絡みあっている意匠。口から取っ手までの曲線美から、並はずれた技術がうかがえる。

端的に言えば『美しい』一品。

作者の心境が垣間見えた、そんな気がした。

「……そう、俺はこいつを出品するんだ……ああ、そうだ。そのつもりだった」

ポットに手をそえて独り言のようにつぶやくと、やがて意を決した表情で息子のほうを向いた。

「ザット。お前のその大皿、今日中に仕上げを終わらせろ。他のは後でいい」

「えっ……どうして？」

「どうしてもだ。ほら、さっさと自分の持ち場まで持っていけ！」

ザットはとまどいながらも慎重に皿を持ち、工房の一室の中へ入っていく。

作業の様子を見たい気持ちはあるが、大事な作業。控えるべきだろう。

「さて、お嬢さん」

ストガルドは真剣なまなざしでこちらと向き合う。決意の眼光はますます強くなるばかりだ。

「あんた、最初に息子のメルル焼きに目をつけたな。理由を聞かせてくれねえか……いや、見当はついてる。それでも、あんたの口から聞いておきたい」

「……もつとも惹かれたからです。技術的にすばらしいだけでなく、魂が込められているような、生き生きとした何かを感じます。先代女王のお人形と、よく似ていました」

「じゃあ俺のはどう見えた？ 正直に言ってくれ」

「わかりました。では……」

目を閉じて深呼吸をする。これからつむぐ言葉が、彼の今後を左右するかもしれない直感があった。

「最初に受けた印象は、苦しさでした。窮屈さに包まれた羨望……これが私の見解です」

「たいしたお嬢さんだぜ……その通りだ。ちよつとした愚痴になるが、聞いてくれるか？」

「はい、よろこんで」

ストガルドは目を伏せ、朗々と語る。

「品評会に参加できなかったころの話だ。審査すら出させてもらえねえ、無名の時代……技術じゃ誰にも負けねえ自信があった。『名前が売れてさえいれば俺だって』と悔しがったもんさ」

「かなり昔のことですね」

「ああ……んで、ある日のことだ。注文のメルル焼きを店まで運んだとき、一人の若い女が俺に言ってきたんだ。『とてもいい作品ですね。心を込めてお作りになれば、もっとよくなると思いますよ』ってな」

『若い女』とは、おそらく――

「当時の俺は『いつも完璧なものを作ってる。俺のメルル焼きは一番

だ』とうぬぼれてたんだ。だからついカツとなっちまってな。あまりに頭に血がのぼったんで、なんて言ったかさっぱり覚えてねえんだが……」

頭をぽりぽりとかきながら話をつづける。

「勢いあまつてつかみかかろうとしたら、風みてえにスルリと避けられたんだ。まるで最初からいなかったみてえにだ。派手に転んで、気がつけばそいつはいなくなってた」

「スルリと……ねえ。ウチも似たような光景を見たことあるわ」

そう言ったのはヒノカだ。おそらく初めてお忍びに出た、あの夜のことだろう。

「事件が起きたのはその日の夕方だ。どこから来たのか知らねえが、巨大水車をぶっ壊そうとした奴らがいたんだよ」

「あの大きさを……いったい、どうやって?」

「水車の上……つまり滝の上だな。ここからでも見えたほどのドデカイ大砲が現れたんだ。もう町中が大騒ぎだぜ。みんな下に集まって『やめてくれ!』って叫びまくったよ」

「大砲……」

そんなものを持ち出せる人間は限られる。貴族、あるいは裕福な商人といったところか。

「なんでそいつらはわざわざ上から撃とうとしたんや? 下から行けばバレずにやれたんとちゃうか」

「さてな……たくさんの人間に、その瞬間を見てほしかったとか?」

「あるいは、町の中では途中で衛兵に見つかってしまいうから、でしょうか」

「ま、なんにせよ止められるやつはいなかった。たった一人を除いてな」

「先ほどの話に出てきた女性……ですね?」

「ああ。例の女がよ、剣を掲げてよ、ぶっそんな奴らを叩きのめしたん

だ。それだけじゃねえ、なんと大砲を一撃で壊しちゃったんだよ！」
「ええ……一撃って。ハンパないやつぢやな……」
「だろ？ 真っ黒な砲身がぐしゃっとなったときは痛快だった！ みんな拍手喝采よ。で、英雄の正体を知ったのは翌日のことさ。背筋が凍るってのはああいうのを言うんだろうな……なにせ女王様にケンを売っちゃまったんだから」

ストガルドは苦笑いを浮かべていた……どこか懐かしそうに。

宿にもどり……

「うふふ、ストガルド殿のお気持ちはお察しします。ですが先代は寛大なお方。おとがめはなかったのでしょうか？」

「こっちは殺されてもおおかしくねえって覚悟してた。家族だけはどうか御慈悲をって、遺書も用意したっけ……が、何もなかった。『なんて器のでかい人なんだ』と一人で感動して、心のままに作ったのがあの人形さ」

星剣をかかげる母の姿。女王自身、見たときの高揚は並々ならぬものがあつた。

それを作つた彼の胸の内に宿つた火の大きさは察するにあまりある。

『心を込めて作る』……その一言を胸にきざみこんで、メルル焼きを作り続けて……気が付いたら品評会の常連よ。それがどうだ、ちよつとつまづいたからって……こんなもんを作るようになつちまつたなんてよ」

金色のティーポットを悲しげな目で見つめながら、両膝をたたいた。

「情けねえ……どんだけシャルカン商店にうろたえてたんだ俺は！」

「いったい、あのお店となにがあつたのですか？」

「品評会は無名じゃ出られないってのは話したよな。あそこは去年開店したばかりなのに、いきなり出品が許された。そんなこと今までになかつたことだ」

「ドーコー伯爵の臣下に、シャルカンという名の者がいます。もしやと思つていたのですが……」

「そういうこつた。あそこの店長はシャルカンの息子……つまり『名前』で選考を通過するくらいは朝飯前なのさ。品物を一度だけ見たが、はつきり言つて質は中の下……つてところか」

女王はこの町で客引きにあったことを思い返していた。あの若い男が、シャルカンの息子だろう。

「なのに最優秀賞を取りがやがった！ 俺は思った……目利きの伯爵が選んだんだ、きつと俺の知らない何かがあるんだって。だがいくら考えてもわからなかった」

ストガルドはしぼり出すように言う。

「そんなときに『選ばれるための流行と商売を教える』って言われたんだ……あんたらが店に来たとき、俺の横にいた男だよ。あのときから、大事なもんを失ってたのかもしれないねえ……」

「……今はいかがです？」

「そうだな……モヤモヤは晴れたぜ。自分のすべきことがはつきり見える。楽な道じゃねえが、やってやるぜ！」

ストガルドの目に光がともり、最初のころの面影はすっかり消えた。

もう心配する必要はなさそうだ。

「では、私たちは宿に戻ろうと思います。お気づかいと貴重なお話がありがとうございました。明日の品評会で……また会うかもしれないですね」

「礼を言いたいのはこっちのほうさ。お嬢さん、ありがとうよ」

彼は少し考えるようなしぐさをしてから、ぽつりとつぶけた。

「……にしても、あんた只者じゃないねえ……ま、俺の勝手な想像だがな」

宿に戻ってヒノカと汗をふきあいながら、工房での出来事を話した。あった。

「あのじいさん、想像よりも素直やったな」

「今日会ったばかりにもかかわらず、私の言葉に耳をかたむけてくださいました。良い方です」

「お嬢と先代が似てたのも大きいと思うで。最後の感じやと、薄々気づいてるやろ」

「似ている……そう思われていたら光栄ですね……」

ほんのりと頬があたたかくなる。尊敬する母の面影が自分にあるとしたら、とても喜ばしい。

同時に『もつと精進しなければ』と身が引きしまる思いだ。

「ウチは先代のことほとんど知らんけど、話を聞かきりそっくりやと思うわ」

「えっ！」

彼女から言われるとは思っていなかった。不意打ちをうけた感覚だ。

頬があたたかいどころではなくなってくる。体の汗をふいているのに、また吹きでてきてしまいそうだ。

「ど、どのあたりがでしょうか」

『お嬢もやつとるなあ』って。じいさんの手を避けたとか、悪人を叩きのめしたとか。頼りになる親子やで」

「はあ……」

まっさきに出てきたのは武術だった……頼りにされるのはとても嬉しい。しかし気恥ずかしさももある。

ヒノカの中の女王像はどうなっているのだろう。競馬場で出会ったアニーから『カツコいいひと』と言われたことを思い出した。

かさねがさねになるが、頼りになる人間だと評されるのは良いことだ。しかし女王たるもの。知恵や気品、思考なども磨いていかななくては。

この旅の中で、ヒノカに他のところも褒められるようになるろう。女王の中で、小さな目標ができあがった。

「ただいま戻りましたー」

「きゃあっ!？」

突然の声に悲鳴をあげたのはヒノカだ。汗をふくため半脱ぎだった服を引きよせて体を隠している。

「つと、あれれ？　もしかしてお邪魔でしたか？」

「ちやちやちやちやうわ！　ぜんぜんちやうわ！」

「にししつ、すみませーん。次からは『入ります』って言いますね」

「天井から頭を出しながらそれを言いますか」

帰ってきたルネは天井から戻ってきていた。無音で出てくるためにそうしたのでろう。部屋の鍵は閉まっていたのだから。

「いたずら好きはほどほどに……と言いたいところですが、普段のヒノカとは違う声が聴けましたね」

「おつ、もしかしてお許しになつたりします？」

プルプル震えながら赤くなっているヒノカを見てると、いたずらしたくなる気持ちも理解できる。

「今回は大目にみましょうっ」

「二人ともおぼえとけよ……」

いつか逆襲されるかもしれない。それを待つのも旅の楽しみ方だと思つた。

「……それで、ブローチの調査はどうでしたか？」

「ご想像の通りでした。町で渡されたものと同じ……シャルカン商店の人が作ったものでした」

「片方はじいさんのところでもらつたのに、なんでやねん？」

「うんうん、そう思いますよね。でも渡してきたのはストさんじゃない。覚えてます？」

「ストガルド殿にあれこれと指導をしていた者……」

「結論から言うと、『まわし者』ってやつですよ。なんと、あのあと商店のほうに来たんです。あの客引きが『今日もごくろう』なんて言つてお金を渡してました」

「あのじいさんにそんなことして、なんか得があるんかいな」

「職人ストガルドというと、この町じゃ品評会で何度も賞をとつたすごい人らしくて。去年も最有力候補だったそうですよ」

「しかし、私たちが聞いたところによれば『去年はシャルカン商店が選

「ばれた』と。理由がわからず、たいへん苦悩された様子でした」
「これは調査のついでに取ってきた情報なんですがね……」

ルネの口から語られたのは、シャルカン商店の大胆な『不正行為』
だった。

さらに、今年もまた同じことを企んでいるという。

事実なら明日の品評会——介入しなければならぬ。

会場での戦い

メルルバルの大通りにたてられてた特設会場。円形劇場のように広いが、それを逆さまにした、山のような形。つまり観客が舞台を見上げるかっこうだ。

女王一行はその最前列を確保するため、夜明けごろから訪れた。

そこにあるのは縄でつくられた簡易な柵……壇上は少し遠い。女王の式典パレードでも、人々との距離はもう少し近いはずだ。

「これじゃあ壇上の作品がどんなもんか、ほとんどわからんやんけ」

「去年から始まった形式なんだそうですよー。つまり……」

『『工作』のため……なのででしょうか』

「大衆環境の中なのによくやりますよ。何度もやったら誰か気づきそうなもんですけどねー」

「二度目を防ぐために、私たちは今ここにいます」

壇上へ次々と運ばれる木箱を、正面・最前列から見守る。

あの箱ひとつひとつの中に、職人たちの作品が入っているのだ。ストガルドの工房から提出された、青いシミのついた木箱もあった。

「ずいぶん熱心な子たちがいるな……」

「よほど近くで見たい観光客だろう」

関係者の視線をうけつつ、時を待つ。

品評会は雲ひとつない空のもとで始まった。司会進行をつとめている男こそ、黒幕のシャルカンである。

ドーコー伯爵が壇上にあがると、見物に来た人々からは拍手が巻き起こった。

軽いあいさつの後、伯爵が並べられた作品をじっくりと見て回る。真剣な姿につられるのか、みんなが前のめりになっていく。

しばしの静寂——ある作品の前で、左右から見直しては感心した様子でうなずきはじめた。

それは間違いなく、シミ付きの箱から出されたものだった。

伯爵はシャルカンに耳打ちをして一步、二歩と下がった。声を高らかにあげる彼は満面の笑みである。

「えー、コホン。諸君！ 厳正な選考の結果、今年の最優秀賞が決まった……シャルカン商店の者、前へ！」

「やあやあ、通してくれ。すまないね、通してくれたまえ！」

これ見よがしと手をあげながら群衆をかきわけていくのは、昨日の客引き……シャルカンの息子だ。

人々の中から『またあそこか』といった声も聞こえる。

ここであの店が呼ばれなければ……とも思っていたが、やはりそうはいかなかった。

「ヒノカ、ルネ……昨夜の仕込みはご苦労様でした。あとは、私が」

「おう、かましたれ、お嬢！」

「いってらっしゃいませ」

息を吸って、おそろく人生でもっとも大きな声をあげた。

「その判定、異議がございます!!」

ざわめきが止まる。

女王は縄をもちあげてくぐり、『一般客、立入禁止』の領域に足をふみ入れた。

衛兵よりも早く詰めよってきたのはシャルカンの息子である。

「おいおい、何を考えてる。今ここに出ていいのはボクだけだ……ん？ ひよつとして昨日の田舎嬢じゃないか？ まあいい。衛兵、こいつを追いはらってくれたまえ！」

「ハッ！」

二人の衛兵が、槍を交差させて行く手をはばむ。だが、伯爵の言葉が次の動作を止めた。

「待て。直訴とは、並の事情ではあるまい。その異議とやら、申してみよ」

「な、何をおっしゃいますか伯爵様！」

「よいではないかシャルカン。聞くだけでも損はあるまい」

ドーコー伯爵がひとり、階段を下りてくる。不正の黒幕がこのまま
見ているわけがなかった。

「みなの方、何をぼーつとしている！ 伯爵に万が一があつてはならぬ、その娘を捕まえろ！」

「シャルカン!? なにを——」

「やあやあ伯爵様、危ないからボクといっしょに下がりましたようそう
しましょう！」

「行け！ 行くのだ!!」

迷う様子を見せながらも武器を構え、縄を肩にかけて集まってくる
衛兵たち。

「仕方ありません……来たれ、星剣!!」

閃光と衝撃が、目の前の衛兵たちを吹き飛ばした。星剣が、天から
道を切り開いたのだ。

周囲から悲鳴も上がる中、シャルカンだけは威勢を保っていた。

「驚いている場合か！ 小娘ひとりなんだというのだ!!」

星剣を肩の高さに立てて構える。

「しばしの間、おとなしくなさい！」

「だああああー！」

いつせいに叫んで攻撃してくるも、槍の柄で押しこもうとするばかりで突いてこない。背後に無関係の観客がいるからだろう。

一般人を巻き込めないのはこちらも同じだった。いつものように
相手の武器をはじき飛ばすなど、危険すぎる。

前に進みながらあらゆる攻撃を下に叩きおとし、地面に封じこめて
一太刀を返す。

目指すは、壇上のシャルカンだ。

「ぐあっ!!」

「くそー！」

歩むほどに相手の攻めかたが強くなる。階段に足をかけたところで猛烈な突きがやってきた。

「おらああああー！」

右足を軸に回転して、かわす。

勢いあまつて階段に突っ伏した相手に、強い打撃をくわえた。

「なんだよ、なんだよ、あいつは!? おいお前たち、深追いするな、ボクをちやんと守れ！」

「おいふざけるな！ 私を、シャルカンのほうを守れ！」

「聞くな衛兵！ 選ぶなら若いほうに決まってるだろ！ 父上は放っておけ、階段を上がるんじゃない！」

「おまえ……っ!!」

ののしりあいを始めた親子の姿に、とうとうドーコー伯爵もしびれを切らしたか。

普段の温厚さからは想像もつかぬ怒声をあげた。

「貴様らー！ いいかげんにしろ!!!」

彼からこれほど強い言葉が出てくるとは……女王はすこし驚いた。家来たちは肝を冷やしたどころではないだろう。

「私は『異議を聞く』と言ったのだ！ 勝手なことをするなあっ!!!」

シャルカンの息子を押しつけて、壇上に向かって再び叫んだ。

「シャルカン！ 下りてこい！」

「しかし伯爵様——」

「黙れ!!!」

「は、ははーっ！」

階段を転げ落ちるように下りてくるシャルカンは、もはや顔面蒼白だ。

衛兵たちも槍を地面に置き、膝について服従の意志をしめした。

家臣たちがひれ伏した後も、伯爵は肩で息をしつづけていた。

高齢だけに、あまり頭に血がのぼるのはよくないと思い、声をかける。

「あの、伯爵様……まずは深呼吸を。どうか落ち着いてくださいませ」
こちらを振り向いた伯爵の口から出たのは、これもまた思わぬ言葉だった。

「とんでもない。こちらこそ見苦しいところをお見せて面目次第もありませぬ、女王陛下……」

沈黙。

「……ん？ 女王……陛下……？」

意識して言ったわけではないらしい。

みるみるうちに目が丸く、呼吸はいっそう乱れていく。

「じよ……じよおう……へい……か……??」

「はい、そうです。さあ息を吸って、吐いて。心を落ち着けてください」

どよめく人々の視線の先に、だれよりも頭を低くしてひれ伏す伯爵の姿があった。

悪人親子、職人親子、女王親子

「……つまり、わたくしめが選んだメルル焼きは、シャルカン商店の作品ではない……と?」

女王が語った事实に、ドーコー伯爵は驚きを隠せないようだ。

当然、『黒幕』とされたシャルカン親子は反論してくる。

「女王様のお言葉ではありませんが、何を証拠にそのようなことを!」

「そうだそうだ!」

「……では、作品を壇上から降ろし、誰が作ったのか名乗らせましょうか?」

「な……ならば我々の手で、責任を持って運ぶべきです! もし——」

「あ、ボクの見聞も聞いてください! 階段で落としてしまったら、割れてしまいますよ? それじゃ困りますよね?」

「おい馬鹿者! せっかくの策をつぶす気か!」

「え? どういうこと?」

息子はぼかんと口を開けている。どうやらシャルカンの最後の一手を読めなかったようだ。

むろん、その手を使わせるつもりはない。

「あなたの言うことはもつともです。仮に、粉々になってしまったら、誰の作品かわからなくなってしまうですね」

「あ、そうか……」

「馬鹿が……馬鹿息子が……っ!」

「ですので、『決して落とさない者』に運ばせましょう。私が指名します」

『彼ら』が群衆の中にいることは、気配でわかっている。方向に検討をつけて呼びかけた。

「ストガルド工房の親方さんとお弟子さん、こちらへ来てください」

親子が人々をかきわけ、柵をまたいでやってくる。そろって両ひざをつき、うやうやしく頭を下げた。

「ここにおりやす」

「み、右に同じくです」

「ではストガルド殿、ドーコー伯爵。壇上の最優秀作品をここへ。息子さんは待っていてください」

指名された二人は、作品をいちど元の木箱に入れて、慎重な足取りで運んできた。

女王が目印にしていた青いシミの正体は、ヒノカが持っていた染料である。昨夜、ルネにつけさせたのだ。

「あーもうダメだ！ ボクはここで失礼します！」

「お、同じく失礼いたします！」

箱が置かれたと同時に、シャルカン親子が立ちあがって逃げだした。方向は階段からみて正面、つまり――

「うわわわわわっ!?!」

いきおいよく重し付きの縄が投げ入れられた。逃亡者の足にくるくると巻きつき、自由をうばう。

「うおっ！ なんだこれは……!?!」

たちまち地面に倒れこむ両者の前に現れたのはヒノカとルネだった。

「芸人、なめんなや」

「おとなしくしてくださいねー」

「親子って似るもんやな……似なくていいところも、な！」

「ぐへえ……っ」

背中を押さえつけ、完全に身柄を確保した。

ヒノカは女王と先代を『頼りになる親子』と評してくれたが、彼女たちも本当に頼もしい……何度そう思ったことか。

「二人とも、お見事です。では、あらためて……作品を見ましようか」

ストガルドが箱のふたを開けた。壇上では見えなかった、今年の最優秀作品。大衆の中から感嘆の声があがった。

「職人ストガルドよ。陛下が指名された理由は、ひとつしか考えられぬ。このメルル焼き……そなたのものであろう?」

「……いいえ、あつしではございません」

「な、なんだと!」

あのととき、彼の決心を正しく理解できていたのだと、女王は安堵した。

木箱に入っていたのは、水車が描かれた大皿――

「では誰が作ったというのだ?」

「あつしの息子、ザットです」

「お……お父ちゃん!」

「伯爵様、神聖な品評会で『すり替え』という重大な違反行為をしたこと……申し訳ございません」

「謝る必要はない。そもそもシャルカン商店が自分らのものだと思っていたのだぞ? もし陛下がご指摘くださらなければ……愚かな私は気づかなかっただろう。こちらこそすまなかつた」

「それはそれ、これはこれでございやす。あつしは『息子の作品こそ評価されるべきだ』と。選考方法を利用し、あなた様を偽ったのでございやす」

老齡の職人は両手をついて、深く頭をたれた。

「本日をもってストガルド工房の看板を下ろしやす。どんな罰でも謹んでお受けいたしやすから……息子のメルル焼きを、どうかお認めに!」

「お父ちゃん!」

「後は任せただぞ、ザット」

伯爵はひざをつき、親子の肩をそつと……いたわるように抱いた。「顔を上げてくれ。お前たちに罰を与えるなどできるものか」

自らに言い聞かせるように何度も頷くと、こちらに向かい直し、改めて頭を下げた。

「女王陛下。このたびの不祥事、最大の原因である私めに……どうか

厳しい処分をお与えください」

女王は考える。

若いころのストガルドは品評会に出たくても出られなかったという。息子のザットも、これまでの規定では同じ。ならば――

「……では、この会の選考方法を改定してもらいます。無名ゆえに出品が許されず、そのまま埋もれた職人もいることでしょう」

「数十年の月日を考えればおそらく……いや、確実に存在するかと」
「よって出品者については制限を設けず、すべての作品を人の目で見つて評価してください。たいへんな労力が必要でしょう……ですが、メルル焼きの発展を想うならば、信頼できる家臣とともに、やり遂げてごらんください」

「はっ！ このドーコー、必ずや果たします」

「もう一つ。シャルカン親子への処分ですが……」

そう言うと当人たちは、釣り上げられた魚のようにじたばたと動き出した。

「ヒイヒイ！」

「ひええええっ！」

「こらっ、暴れんなや！」

「伯爵にすべて任せます。ただし、商店で働くほかの人々が困らないよう、代替りの経営者を呼ぶなどの対応をするように」
「かしこまりました」

「ストガルド殿、そしてザット殿……」

「へい」

「は、はいっ！」

「先日はたいへん勉強になりました……ありがとうございます。これからの働きにも期待していますよ」

「ザット、お前におっしやってるんだぜ？」

「あ、あの、えっと……精いっぱい、頑張ります！」

どこからともなく拍手の音が鳴り、次第に大きく会場をつつんていった。

翌日。

「お父ちゃん、今日は休むのかい？」

「俺は看板を下ろした……引退だ。もうメルル焼きは作らねえ」

『もう作るな』なんて、女王様も伯爵様も言っただけじゃないか」

「これは俺なりのけじめってやつだ。作らんと言ったら作らん」

「ハア……強情だなあ」

「うるせえ。はやく仕事場に行きな、『ザット親方』さんよ」

「……昨日のことだけどき。女王様、すごかったよね」

「そうだな、先代によく似ていらっしやって……って、それがどうした？」

「来年の品評会のことなんだけど、女王様の人形でいこうかと思ってるんだ」

「な、なんだと!? お前……ハンパなもん作ったら無礼つてもんだぞ、おい！」

「お父ちゃんも、むかし先代の人形を作ったんだよね。盗みたいなあ……その技術」

「……ずいぶんと口がうまくなったじゃねえか」

ドン、と胸をたたく音がした。

「一年やそこらでモノにできると思うなよ！ ストガルドの技は甘くねえぞ！」

威勢のいい声とともに、二人の気配は遠くなっていた。

「……これでめでたしめでたし。ですね」

「昨日あれだけ大立ち回りしておいて、今日は壁越しに聞き耳をたてるか……忙しいお嬢やで」

「見つかったら大騒ぎですもんねー」

はやくも来年が楽しみになった女王は、そのときどうやって自分を模した人形を見にいかうか、あれこれと思案を巡らせるのであった。

とある青年の分岐点

斧をにぎっていた僕の手が、プルプルと震えている。

「ハア、ハア、ハア……」

「よし、これで終わりだ。ごくろうだった」

「お……お疲れ様でした」

木こりとはなんて体力のいる仕事なんだろう。鍛えているからと自信を持って挑戦したけれど、思いあがりだった。

同時に、鍛錬にはもってこいだと思った。これを続けたら、きつと

「ずいぶんと真面目なんだな。ダグラスの息子にしては」

「——っ！」

「ほれ、金だ」

ぶつきらぼうに投げられた小銭袋。中には数日をすごせるくらいのお金……顔に当てられても痛くはない。

痛いとしたら心のほうだ。疲れきった体がますます重くなる。

ダグラスの息子にしては。

僕のこと誰かが評価するとき、どうしてもついてまわる言葉。

「ありがとうございます……」

慣れている……そう、慣れたことじゃないか。くちびるを噛みながら自分に言い聞かせた。

いつか必ず、言われない……言わせないほど立派になってみせる！

帰り道が夕日で真っ赤に染まっていたが、沈みきるまでにはまだ少し余裕があった。

涼しいそよ風にも踏んばりきれず、そのまま倒れこんでしまいそうなほどの疲労感をかかえたまま……どこまでやれるのか。挑戦しよう。

すこし道から外れ、枯れ木と土ばかりの……僕だけの訓練場に来てきた。

こんなところにやってくる人はいない。お手製の道具をたくさん置いてあるが、無くなったことなど一度もない。

カカシに練習用の剣を打ちこむ。力が入らないにもかかわらず、その音がなかなかのものだった。

再度、一連の動きをくりかえして分析してみる。

足運びは地面をすべるように。そこから体の回転が無駄なく剣先へと運ばれ……カカシへ。

剣を『振った』というよりは『空気のススキまに滑りこませた』感覚。さつきは見てなかったけれど、カカシの足元が大きく傾いていた。

「脱力ってやつなのかな……」

手にかえってくる衝撃は大きくなかった。なのに音は大きい。音の源となる力……このほぼすべてがカカシに行き渡ったのだとしたら。

「これはすごい威力なんじゃないか……?」

何度も同じ動作をくりかえしてコツを全身に染みこませる。意識しなくても、明日もできるように。何度も、何度も。

そのうちに要領がわかってきたので『脱力しつつ全力』で一撃！するとカカシの胴がボキッと折れた。こんなことは今までになかったことだ。

僕はいま、自分の限界を破った！

充実感に任せて剣を天につきあげた。

「よし、この動きを『剣のつむじ風』と名付けよう！」

さつきまでの暗い気持ちはすっかり吹き飛んでいた。

この高揚をまだ冷ましたくなかった。

よし、弓だ、弓の訓練もやろう。

父さんは弓も得意だったと聞いている。

狩りに出かけては百発百中の腕を發揮して、たくさんの部下に料理をふるまったとか。

「僕だって……！」

木にくくりつけた的に狙いをさだめる。矢は十本。

弓の弦がいつもの何倍も固い。だからこそ、力がもつとも伝わりるところを使わざるを得なくなるのだろう。

しなやかな手ごたえを指に感じた一点、背中の筋肉をつかって矢をひきしぼり……はなつ！

的に描かれた『印』にみごと命中した。

息をふうー、と吐きだして大きく吸う。つづけて二発目。

命中。

三、四――

命中。

五、六、七、八――

命中。

九――

命中……そして、十発目は――

「誰だ！」

背中の方角、首にチリチリと感じる視線は気のせいではない。誰かいる。もしも悪意ある相手ならば、この矢をうちこむ！

「フム、なかなか鋭いじゃないか」

陰から見えていたのは黒いローブに身をつつむ老人だった。彼は手のひらをこちらに向けながら言った。

「ワシはこのとおり丸腰だ。弓を下げたまえ」

十本の指すべてに宝石のついた指輪がはめられていた。かなり裕福な人物なのだろう。

ひとまず盗賊の類ではなさそうだ……危険はない。そう思って弓を降ろした。

「さきほどから見ていたぞ。すばらしい腕じゃないか。さすがはダグ

ラスの息子だ」

「！ 父を知っているのですか？」

父さんの子として『さすが』なんて言われたことがない。言い知れぬ高揚感に、疲れがどこかへ吹き飛んでいく。

「よく知っているよ、トーマスくん。ククク……共にカランド公に仕えたところがなつかしいのう」

「カランド公……!?!」

それは、父が仕えた、主君の名。しかも僕の名前を知っているということは――！

「もしやあなた様は、ユンデ卿では!?!」

「よく知っているのう。その通りだ」

僕は反射的に膝をついた。かつて『剣のダグラス』と並び『賢のユンデ』と称されたお人が、こんなところに！

「そうとは知らず弓を向けるなど、とんだ無礼を。もうしわけありません！」

「苦しゅうない。むしろ、たゆまぬ『武』に感心したぞ……褒めてつかわす」

「あ、ありがとうございます！」

「……さて、わざわざここまで来た理由だが」

ユンデ卿はこちらの目をのぞきこみ、僕が人生でもっとも待ち望んでいた言葉を口にしてくれた。

「トーマスくん、父ダグラスの汚名をすすぎ、かつての名家を再興したくはないか？」

「はい!!」

最後まで聞き、返事をするまでもどかしくてたまらなかった。

ああ！

なんども夢に見た、僕の生きる意味であり、すべて。

二十年前から『乱心のダグラス』などと、悪の代名詞になってしまっ

た父さん……何があったのかは詳しく知らない。わかっているのは
——
今、やれるのは僕だけという一点のみ。

「亡き両親にかわって、なんとしてもやりとげる悲願であります！」

「よくぞ言った！」

肩をポンとたたかれた。

僕の人生で何かが始まる。そう知らせる合図に思えてならなかった。

「単刀直入に言おう。ダグラスの仇をとるときが来た」

「父の仇でございませるか……!?!」

「とはいえ、その者はすでにこの世におらんがな」

喉に冷たい刃をそつと当てられた。そう錯覚するほど絶望的な寒
気。

僕は再興こそが一番だと信じている。だけど、もし誰かが父さんをおとしめたのなら。そのせいで僕らの今があるのだとしたら。恨みがないといえばウソになる。

目を閉じて、努めてゆつくりと息を吸った。おさえろ！ 卿の前で
感情的なふるまいをしてはみつともない。

そもそも今の話が本当なら——

「この世にいないとなれば、『仇をとる』とは……どのよう？」

『『やつ』には娘がいる。十五になったばかりの、一人娘がな』

とまらない心

僕は、暗殺依頼を引き受けた……その夜は月が雲におおわれ、真っ暗だった。

毎日をすごす小屋の中は、まるで知らない場所のようで心細くなつていく。

揺れるろうそくの火が、ゆらゆらとあざ笑う。うすく照らされた木製の壁には……ナニかの顔？

目をそらした瞬間に襲われるような気がして、見たくないのに見てしまう。

「うっ……！」

声を出してはならない。後ろに——ナニかいるかもしれないんだ、気づかれる！

そうだ、寝袋に入ってしまったおう。音をたてず、ゆっくりと。

ナニかから目をはなさず……顔をそっと覆って隠すんだ。暗闇の中で息をひそめるんだ。

ああ。どうしてこんなに恐怖しているのだろう……まるで亡霊にまどわりつかれたみたいだ。

『やつの一人娘こそ、お前の父の仇だ。そやつを始末してもらいたい』

僕はまだなにもしちやいない！ 寝袋の中で……心の中で……そう叫んだ。

なのに、とても怖い。

『みごと成し遂げたあかつきには、親衛隊の候補として、カランド公に紹介しよう』

また……喉に冷たい刃が当てられたような感触がやってきた。

名誉回復のために人の命を奪う。

自分のために？ いや、父さんのためでもある。直接ではないが仇討ちなんだ、願ったりかなったりじゃないのか。

そうだよ……騎士でも兵士でも、賊の討伐をする。人々をおびやかす存在を、武器で貫く。ありふれた話だよ。

たまたま『初めて』が因縁のある相手の娘だっただけさ。

まだ若い？

年下とはいえ、十五歳だぞ。騎士見習いになれる……僕は、父さんのことで門前払いだった。

悪人の子は悪人じゃない。わかってる。

しかし、卿の話によれば親の跡をついで『親と同じ』所業をくりかえしているのだそうだ。

父さんがおとしめられたように、誰かが犠牲になっているとしたら……悲劇を止めなければ！

——自問自答するうちに眠っていたのだろう。目をあけると朝日の光がさしこんできていた。

寝袋から這い出し、昨日もらった地図をひろげる。町の周辺が描かれていて、一つの道に線が引かれている。

今日の……太陽が一番高くなるころ、この道を通って『標的』が町に到着すると言っていた。

そこは、うねる岩山を縫うような崖道がつづく場所だった。

「——弓だ」

生活のために何度も通った。狩りで仕事で、何度もだ。どこから狙えばいいかはよくわかる。

目を閉じて、思い描く。

あの崖の上で待ち伏せるんだ……僕は岩陰に隠れている。聞こえるのは風と草の音だけ。

ほんの少し、すなほこりが舞っているけれど大丈夫。よく晴れた日

だから通行人がよく見える。

さあ来たぞ……僕は標的の横顔を見下ろす。道を……曲がる……
そうすると、完全に背を向けた格好になるんだ。

いまだ、弓を引いて……！

「……くっ！」

矢を放つ寸前で、頭の中の景色が消え去った。まぶたに覆われた暗闇が、やたらグラグラと揺れる。

目を開けてもしばらく焦点があわず、三回ほど深呼吸をしてようやくおさまってきた。

人を射る瞬間が思い描けなかった……

当てる自信はある。かならず命中する。だからこそそのためらいなのか？

一晩たっても消えてくれない。

「弱気になるな。感情を殺せ。なすべきことをなすんだ、しっかりとしろトーマス！」

—そう言い聞かせながら、弓と地図を持って外に飛びだそうとした—
—そのとき。

扉が開いた。

「うわっ!？」

「……ユンデの使いで来た、ル・ハイドという者だ。お前の仕事をみとどけさせてもらうぞ」

尻もちをつきそうになった僕を気にするそぶりもなく、黒ずくめの来訪者は淡々と話す。

「ふむ、準備はできているようだな。得物は……弓か」

「は、はい」

「では行くぞ」

「ええっ!？ ちょっと待って——」

急いで身支度をすますと、今度こそ小屋を出た。少しびっくりしたけれど、好都合かもしれない。彼の淡泊さにつられてしまえば、あれこれ悩まずに済むかも。

この依頼には、ああいう感じで臨めばいいんだ。

「ここで狙い打ちます」

「そうか」

「では、相手が来るのを待ちます」

「いちいち言わなくていい」

待ち伏せ地点についたはいいが、会話が続かない。気をまぎらわしたかったけど……

「そういえば——」

言いかけた口をつぐんだ。

うちの扉を開けるまで気配すら感じなかったことを思い出したからだ。

想像だけど……この人はすごく強い。僕よりもずっと。

腰かけて腕を組んだだけなのに、全身から得体のしれない圧力すら感じる。

見ているだけで背筋が寒くなってきた。あまり刺激しないほうがいいかも……

だまって座るだけの時間がとても長く感じられた。

「……来たな」

「え？」

あれからずっと動かなかつたル・ハイドが立ちあがった。

岩陰からながめてみると、三人の女性が道にそって歩いているのが見えた。

身なりの良い人、袖の長い凛々しい人、メイド服の人……あれ？

「ここで僕は、とてもとても大事なことに気がついた。

「さ、三人いるようですけど……」

「相手は旅をしている身だ。連れがいても不思議はない」

「申し訳ありません！　どれを狙ったらいいのでしょうか!？」

「人相は聞いているはずだが？」

「あの……その……忘れてしまいました……」

昨日からずっと、相手の顔を認識しないように心がけていた。顔を見なければ、知らなければ、いくらか気が楽になるから……

「だけど、しかし。」

誰を狙えばいいのかわからないなんて。

あれほど心を殺せと言いつつ聞かせていたのに、僕はまだ自分を守ろうとしていたんだ。

「……真ん中、いちばん背の低い者だ」

「あ、ありがとうございます！」

助かった！

ちよつと……いや、すごく怖い人だけど、いてくれてよかった。

気を落とした反動か、いまならできる気がする、この勢いのままやっつけてしまおう。そうしよう。

左手に弓を、垂直に。

右手は握りこぶし、中指と人差し指の間に矢を。

距離は……三十歩ほど。こちらから見て、前方へ歩いている。速度はゆっくりめだが、じよじよに離れていく形。

崖上にいるから、弓の角度はいつもよりすこし下。

障害物はなにもない。なにも問題ない。

弓を押し、矢を引く……等しい力で。

ああ、命中までの軌道がはつきりとわかる。『弧』が見える。

狙いは心臓。無防備な背中――

背中――
が。

くると回る。

『彼女』と目が合った。

とっさに上半身をひねり、後ろへ倒れこんで身を隠す。拍子で矢を手放してしまったのか、どこかへと飛んでいってしまったようだ。

極限まで高まった鼓動が、ドクンドクンと僕の全身を揺らしていた。

これは恋だと青年は悟った

目が合った!? 気づかれた!?

「ハッ……ア……う……」

立ちあがろうとしても脚は震え、手は土をかくばかり。

息ができない! 胸が苦しい!

あ、そうだ……逃げ——逃げないと。

「——おい。——おい」

誰?

「いつまでのたうち回っている、青年?」

「え……あ、ル・ハイドさん?」

声をかけられて、じよじよに意識が、体が、『自分』に戻っていく。手足と感覚がつながって、なんとか膝で立つことができた。

彼が立っている場所は、さっきと同じ。崖から離れたところにいる。たぶん……そこからまったく動いていない。

だから、彼女と目が合ってしまったことは知らないはずだ。

あ……『彼女』だなんて。心の中とはいえ気安いような、恥ずかしいような……心臓がきゅつとなった。

「えっと、そのう……」

そうだ、『あの人』なら! まだ名前も知らないのだし、失礼にならないはずだ。

名前か……なんて名前なんだろう?

「射線にジャマが入ってしまつて……ここはいったん仕切りなおすべき、と」

離れていても僕には見えた。星のまたたきのような瞳が。あんな目は生まれて初めて見た。

どんな家族と、どんなところで育つたのかな?

「とすると、どうする。やつらは町に——」

「町……」

町へは何をしに行くのだろうか？ それとも、どこかへ行く途中？
一泊はしていくんだらうな。

「——弓の腕がどれほどかは知らぬが、大衆環境で——」

「知る……」

もっと相手のことを知るべきだ。知らないまま射るなんて礼を失
するというもの。これは動物を相手にした『狩り』とは違うのだから。

「——よって、接近して仕留めるほうがよからう」

「接近……」

もしあの人に近づいて、あの目をもう一度むけられたら……僕はど
うなってしまうのだらう。

疑う余地はなかった。

経験したことはない。だけど、本能で理解した。

これは——恋だ。

僕は、あの人を好きになってしまったんだ。

「そうだ、追いかけてよう！」

「——ふむ。その執念……おもしろい。やつが町から出るまでに終わ
らせろ。さもなければ失敗とみなす」

「……はい！」

残された時間は少ない。急ごう！

「とはいっても……ハア……」

町に追いかけてきたはいいものの、どこにいるかがわからない。
目をこらし、行き交う人たちを見渡してみても——

「あっ、あれはもしかして——！」

と、反応しかけては違った……そんなことをくりかえすばかり。で
もあきらめるもんか。

気合をいれなおしたそのとき。

『グウ〜』

「あ……」

僕のおなかが大きく鳴る。そういえば起きてから何も食べてない。自覚するとますます空腹感が強くなってきた。

「うう……さすがに何か食べないとだめか」

あの人の前でこんな醜態をさらしたら、恥ずかしいこと極まりない。

日はまだまだ高い。大通りの屋台が営業しているはずだ、そこへ行く。

「さあさあ、よってらっしやい、みてらっしやい！ お代は観てのお帰りやでー！」

屋台からただよう香ばしいにおい……とは少しずれたところに人だかりができていた。背伸びしてのぞいてみると、女性の旅芸人のようだ。

両手に扇子をもつて舞う姿は、芸術にうとい僕からしてもみごとなもので、しばし空腹も忘れて見入ってしまった。

「はいはい〜おひねり〜おひねり〜」

メイド服を着た女の人が、観客から小銭を回収してまわっている。どうやら同行者のようだ。

そしてこつちに来た。にこやかな表情で、小銭をいれるお皿を持っている。

懐によゆうがあれば銅貨の一つあげたいくらい……なのだけど、今はちよつと厳しい。

すみません、といった顔をするとうこうもわかってくれたみたいで、隣の人へとうつつていった。

あぶなかった。

ふたりともすごくきれいで、魅力的な人だった。いつもの僕だったから気持ちで負けて、食事代をけずってでも払ってしまったと思う。

そうならなかったのは、きっと――

あの人に劣っていると言いたいわけではないんです。ただ、ちよつと巡り合わせがわるいだけなんです。

もうしわけありません！

おひねりをもらって回っている二人に、心のなかで謝りながら頭を下げた。

どこかで見えた覚えがある人だし、また見る機会もあるはず。次はちゃんと用意しますから！

『グウ~~~~』

僕はさつきから何を考えているんだ？ お腹を満たさなくては、頭も回らなくなってくる。

屋台……屋台に行かなきゃ。

近くでクスクスと笑い声が聞こえたような気がした。

ああ、食欲をそそるにおいの源！ イモの塩だれ焼き！

日ごろの稼ぎからするとちよつとぜいたく。だけど大事な用をこなす前となれば、食べる理由には十分だ。

昨日もらった賃金があるし――

あれ？

「あああああっ!？」

財布がない!?

必死にこれまでの行動を思い起こす……

頭をかかえた。

朝あわてて出ていったから、持っていくのを忘れたんだ！

もどって取ってくる？

でも、時間が……いや、でも……
全身がどんと沈んでいくような感覚……

そのとき。

「おひとついただけますか？」

「はいよ、まいどあり！」

「はい、どうぞ。お食べになってください」

「え？」

「差し出がましいとは思いますが、お困りのようでしたので
「いいのです……か？」

言われるがまま、ほかほかのイモ焼きを手渡される。

同時にやってきた衝撃は、雷でもかなわないだろう。

窮地を救ってくれたのは『あの人』だったからだ！

両手は頭にあったわけで、イモを渡すにはまず腕をとって、
手って!?

触れた？

あの人のほうから？

おそろおそろ顔をあげると、僕の心を射抜いた、あの瞳が……僕を
見ていた。慈しむような優しい光とともに。

もはやイモより自分の体のほうが熱い。

恥ずかしいところを見せた感情よりも、会えた喜びのほうが勝つ
た。

「はははじめまして！ 僕、トーマスといいます！」

「まあ、ご丁寧にありがとうございます、私はエルミーナと申します」
「あ……こちらこそ、これ……ありがとうございます。エ、エ、エ、エ、

エ——」

がんばれ！ がんばれ！ トーマス！

「エルミーナ……さん……」

「どういたしまして。ふふっ」

あ……笑っ——

「これ！ すごくおいしいので……自分だけ食べるのもなんだか申しわけないような！」

とにかく、とにかく一緒にいられるようにしなきゃ！

「はんぶんこして、どこかで食べませんか?!」

「まあ、はんぶんこ！ 素敵なお提案ですね」

わが人生に悔いなし……心から、そう思った。

つかの間のしあわせ

人のいないところで食べようと誘い、少し歩いて空き地にたどりついた。

二人きりに……なんて気持ちはあつた。でもそれ以上にやるべきことがある。近くに他人がいるとちよつと困る。

「このあたりで食べましょうか」

「はい。それでは……いただきます。はむっ
！」

エルミーナさんのイモを食べる姿に思わず見入ってしまった。

頬を膨らませずに、少しずつ口にに入れてよく噛む。音は……：ぜんぜんしない。静かで優しい、そんな食事だと思った。

口つて、あんなふうに動かせるものなのか……

不意に、あたたかいものがじわりと指に触れた。

「あちちっ」

塩味のたれが指にたれてきたんだ……舐めとつてからふと思った。

今のを彼女が見ていたらどう思うだろう。と、これまで行儀作法を学んでこなかったことを悔いた。

考えて気がついた。今、僕は彼女のことを『良家で生まれ育った人』だと思っっている。いっぽう、ユンデ卿からは『父の仇の娘』としか聞いていない。

相手を知るための一歩……会話の糸口。

なんのために会いたいと願ったのか。もつと知りたいと思ったからだ。

気合を入れるようにイモをほおぼつて飲みこむ。

さあ話しかける、トーマス！

「エルミーナさんはどこの出身ですか？ 僕はずっとこのあたりです」

僕のことには聞いてないと思うぞ、トーマス！

「私は……ハイナリア城下町です、おほほほ」

「女王陛下のおひぎもとですか！」

「ええ、私も生まれた地域からなかなか離れられず……この旅が初めての遠出なんです」

「そうなんですか……ひとり旅でないとはいえ、いろいろな苦勞があるのでは。今まででいちばん困ったことってなんですか？」

一瞬、エルミーナさんの目がするどく光った気がした。
やってしまった！

話をはずませるなら楽しいことを聞いたほうが！ ああつ僕のバカっ！

「……ひとつは、お金です。もし自分だけで旅立っていたら、すぐに窮してしまっただでしょう」

「今、お金の工面はどんなふうによ？」

「芸に秀でた連れがおりまして、頼らせてもらっています。私がかつとも尊敬する……自慢の仲間なんですよ」

そう語る表情がとてもまぶしくて、楽しそうで……なぜだか負けたくない気持ちがわいてしまった。

「芸だったら、僕もちよつとできるかな！ なんて……」

「まあ……そうなのですか？」

「そうなんですよ！」

「ぜひ見せていただけますか？」

「え？」

背筋につめたい汗がながれる。思わず勢いで言ったものの、人からお金をとれる芸なんてできない。

僕の取りえといえば、父さんゆずりの体力だけだ。

けれども期待に満ちた目をむけられると……なんでもいいからやるしかない！

胸をこぶしで軽たたき、覚悟を決めて宣言した。

「ダグラスの息子、トーマス！ 口笛をふきます！」

『フ〜……』

鳴らない。甘いしびれが口の中であやしくうごめく……！

エルミーナさんの視線が僕ひとり注がれている……そう認識している限り、くちびると舌をうまく動かせない！

も、もう一度だ。と、目を閉じたとき。

「くすつ……ふふ」

心臓がドカンとゆれる。拍子に目をあけると……口もとを指で隠しつつ笑う少女がいた。

「すみません、なんだかおかしくて……ふふふ」

「いえこちらこそ失敗してしまつて！ 見ててくださいね、今度こそ鳴らしますから！」

また笑つてくれた。もしかしてすごくいい感じなのでは？

しびれがそのまま力になり、感覚がとぎすまされてゆく。

『ピー……ピ。ピーピッピー』

広くて建物がないせいか、口笛の音がよくとおる。今までで一番うまく吹けた気がした。

次に鳴つたのはエルミーナさんの拍手だった。

「すごいですね！」

「それほどでも……えへへ」

「練習をしたら私にもできるでしょうか？」

「もちろんですよ。エルミーナさんならできます。ちよつとコツがあつて——」

自分でもおどろくほど自然に、口笛の吹きかたを教える流れになった。

しばしの練習、そして——

『ピー……』

「わ！ 鳴りましたよ、さすがのみこみが早い！」

「トーマスさんがいいねいに教えてくださつたからですつ！」

二人で喜びあうのは、なんて素敵な時間なんだろう。

自分の技術が彼女へと伝わる……そう言うにはささやかな出来事
だけど、目頭と胸が熱くなった。

もし明日もこんなひとときを過ごせたら――

明日。

『いつになったらやるべきことをやるのだ？』

ふと頭の中によぎった使命感が、あたたかさを急速に奪っていく。
思考がふたたび迷いはじめた。

もつと相手を知るべき？　ただ近づきたかっただけじゃないのか
？

『今が好機』

『やりたくない』

動けない。何もできない。だから、すぎるような気持ちで問いかけ
た。

「エルミーナさん……ひとつ大事なことを聞かせてください」

「……はい」

やるかやらないか……どちらでもいい。背中を押してほしい！

「どうしても成しとげなければならぬことがあって……でも自分は
それをやりたくない……あなたなら、どうしますか？」

「自分のやりたいように、成すべきことをなします」

「……っ！　即答ですか」

「まさに今、そうしていますから」

彼女はいたずらっぽくほほえんだ。

「トーマスさん……あなたが成しとげたいことはなんですか？」

「僕は……」

立派になって……父さんの汚名を晴らす。それが僕の――

「もしどうしても……どうしても。望まぬ方法でしか使命を果たせなくなつたなら……私は心を殺し、使命を選ぶでしょう」

エルミーナさん。あなたは――

「あなたはすごい人だ……」

成すべきこと。

やりたいこと。

やりたくないこと。

ああ……なんだ。ぜんぶ満たせるじゃないか。

彼女の言葉によつて胸にともつた炎のようなものを、きつと覚悟と呼ぶのだろう。

足りないものが埋まった。

「エルミーナさん。何も言わずに、すぐ町を出発してください」

ユンデ卿の依頼を断る。推薦の話はなくなる。だから、他の方法で名を成す。

「あなたと話せて本当によかつた……どうかお元気で！」

返事を聞くまえに走り出す。

振りきるように角を曲がり、ひたすら駆ける。

道ゆく人々に何度もぶつかりそうになつても力の限り走つた。

ちらりと空を見上げると、夕焼けで赤く染まりはじめていた。

暗殺依頼、お断りします

「ハア……ハア……ッ！」

ユンデ卿の屋敷……二階建てほどの高さの壁には、うむを言わさぬ威圧感があった。うわさでは庭がとくにすごいらしい……

「い、入り口は……どこ、だろう……ハア」

近くまでできたのは初めてだ。道にそって走ってきたものの、パツと見ただけではどこから入ればいいのかわからない。

さすが『町いちばんの広さ』と言われるだけあるな、と思った。だけど……こんなに壁が高いのはなぜだろう？

誰かが入ってこないようにって理屈はわかるけど、まるで砦みたい
に――

いや、今はどこから入るのが一番大事だ。

「あつちを……曲がった……ところかな……」

壁にそって歩くにつれて、息も整っていく。

いまや太陽は壁に隠れて見えないほど沈み、反対の方角から星が見えはじめていた。

「星か……」

エルミーナさんは町を出てくれただろうか？

あの人の瞳が、美しく強くかがやきつづけますように……
迷いはない。

やさしい風、草のさざめき……すべてが背中を押してくれているようにさえ思える。

「あつ」

角を曲がり、門とともに黒づくめの人物が立っているのが見えた。

「ル・ハイドさん……？」

偶然だろうか。そうつぶやくのと同時にこつちと目が合った。表情から読みとれるものはなにもない。

初めて会ったときから怖かった。今はもっと怖いけど、恐怖を乗り越える力がある。

堂々と『悪い報告』をしよう。

「来たか、青年……」

「……報告があります。ユンデ卿に会わせてください」

彼はなにも言わずに敷地の中へと案内してくれた。

「広いな……」

正面奥に見える屋敷は特別おおきいものではなかった。壁に囲まれた土地の多くは、雑草だらけの無骨な地面と倉庫のような建物で占められている。

花や木がたくさん、規則正しく……なんて想像とはずいぶん違った。

特に目を引いたのは、吹きさらしになっている倉庫だった。

置かれているのは大砲、投石器、それに匹敵するほど大型の……石弓？

「なんだか武器庫みたいだ」

「……あながち間違いではないな」

「え？」

どういう意味だろうと尋ねても返答はなかった。

ル・ハイドさんが歩くさきは屋敷ではなく、ひとつ手前の保管庫だった。

「ユンデ卿……青年が来た」

「おお、待っていたぞ」

収集品をながめていたらしきユンデ卿は、『良い報告』を期待してか声はずむ。

「聞かせてもらおうか。どのように仕留めた？ 剣か、弓か？」

いよいよ報告のときがきた。心臓が大きく脈打つ。

「ユンデ卿……」

「はやく、はやく申せ！」

「申しわけありません。暗殺依頼は……なかつたことにしていただきたく存じます」

「……なんだと？」

「尊敬される人間になり、父の汚名をすすぎたい気持ちは変わりません。ですが……いえ、だからこそ……彼女を手にかけるわけにはいきません」

「トーマスくん……ダグラスの仇討ちと出世が同時になうのだぞ？」

「これ以上の機会があると思うのか？」

「……『仇』はもういません」

「仇の子は仇でない、と」

「その通りです」

「ふん……きれいごとを」

ユンデ卿は大きいため息をついた。

「出世のほうも不意にするか」

「はい。いつか自分の力で……あなたの力を借りずにやりとげてみせます」

「これほど頼んでもやらぬのだな？」

「いかに卿の頼みといえど……聞けません！」

できるかぎりの誠意をしめすため、地面に両手をついて頭を下げた。これくらいで許してもらえとは思わないけど――

「やれやれ。君の父には借りがあるゆえ、便宜を凶ろうかと思つたが……仕方ない。ル・ハイド、そやつを殺せ」

え？

「断る」

「……貴様もワシに逆らう気か」

「俺の狙いはアンナ・ルル・ド・エルミタージュの命ただひとつ。無関

係の指示にしたがうつつもりはない」

「つまりぬ理屈を……それでダグラスに義理をたてたつもりか」

「好きにとれ」

「ま、待つてくださいい！」

僕を殺すと言った？

それにアンナ・ルル・ド・エルミタージュって、まさか——

ぜんぶ聞き違いだったら。はかない希望にすがって尋ねた。

「僕が手にかけてようとしたのは……女王様だったんですか!? 女王様を消せとおっしゃっていたのですか!?!」

「そうだ」

ル・ハイドさんが淡々と即答した。

頭の中がぐるぐるする——

「なんで……なんで……!」

「トーマスくん」

背を向けて言ったウンデ卿の声は、棚に両手をついてうなだれた。

「二十年前、われわれは一度しくじっていてね……そのとき、名誉とひきかえに救ってくれたのが君の父親なんだよ」

「……だったら僕の『仇』はあなたじゃないですか!?!」

「ハハハハ! なにを言う。あやつの失墜は法の裁きによるもの。その根源たる当時の女王こそが真の『仇』……違うかな?」

「違う! 絶対に違う!」

許せない!!

この自分勝手な老人を組み伏せようと飛びかかった……そのとき。

卿が振りむきざまに、いつの間にか手にした石弓を——

「ぐあ……っ!」

肩が糸でピンと引っ張られたような感覚とともに、僕の体はあおむけに倒された……背中が地面を認識した直後、火のついたような痛みが襲った。

「あ……く……っ……うう! うううう!!」

「誰かを消せという依頼……『断れば消される』とは思わなかったのかね？」

「そ……そんなっ！」

「残念だよ。君をこの手で殺さねばならんとは」

「ル・ハイド……さん……」

助けを求めても、返事はない。

「ハアツ……ハアツ……！」

体をいくらよじつても、痛みがどこかへ飛んでいってくれないどころかどんどん強くなる！

全身が熱い！ どうしようもなく痛い、熱い、痛い！

「石弓とはすばらしい武器だな。剣や弓とちがって力をこめずに済む……いくらか気が楽というものだ」

こんな恐ろしい人たちだったなんて！

「む……弦を引くにはかなり力があるな……」

エルミーナさん！

「……うむ。よし、できたぞ……待たせたな。お別れのとときだ、トーマスくん」

どうか無事で――

『落ちよ、星剣！』

轟音、そしてなにかが砕ける音。体中が突風にさらされるような感覚。

命が散るってこういうものなのかな――

と、思ったものの……痛みが消えない。つまり、まだ生きている？
うつすらを目をあけても、土煙でなにも見えない。

灰色の世界のなかでル・ハイドさんの声がひびいた。

「来たな……アンナ・ルル・ド・エルミタージュ……!!」

いつか、また

ル・ハイドさんの言葉の意味を考えようとしたとき、雷のような衝撃と残響が一瞬とぎれた。

「……エルミーナさん！」

「おつ目が覚めたか、あんちゃん！」

「ちよつと我慢してくださいねー」

「え……あぐっ!!」

不意にやってきた痛みは石弓にやられたときとは違うものだった！ まるで体からなにかを抜き取られたような――

「うう……僕、気を失ってました？」

「そうですねー。あ、手当てしているので動かないでください」

視界がはつきりしてくると、僕のそばに二人の女性がいるのがわかった。

「もしかして……昼の旅芸人さんとおひねりのメイドさん」

肩の応急処置をしてくれているのはメイドさんのほうだ。テキパ

キしてるな……

「じゃなくて、エルミーナさん!!」

「ほわっ」

「ちよ、動いたらアカンて！」

上体を起こしてあたりを見まわす。体がフラフラするけど構わない。ユンデ卿たちは女王様を葬ろうとしている……なんとしても守らなくては！

そう決心した僕の目に映った光景は――すさまじい速さで、身の丈ほどの大剣を振るうエルミーナさんだった。

「はあっ！」

「ぐわっ!!」

五人……以上いる警備兵が、なすすべもなくやられていく。剣が、槍が、彼女にいつさい届かず跳ねかえされる。

その剣技は、僕が『剣のつむじ風』と名付けた技なんて足元にもおよばない——まさに神業だった！

「ええい、飛び道具だ！ 飛び道具をつかえ！」

武器のぶつかりあう金属音がひびく中、ユンデ卿の怒号がひびいた。

すると数人が壁役となつてエルミーナさんの前に立ち、その間にひとり、またひとりと保管庫に駆けこんでいく。あそこにはたくさんの石弓が——！

「まずい！」

「あ——!?!」

芸人さんたちの声が聞こえた気がするけど、それどころじゃない！

腹にありつたけの力をこめて吠えた。

「やめろ、やめてくれ!! その人は……エルミ……そのお方は女王なんだ!! アンナ・ルル・ド・エルミタージュ様なんだあああ!!」

「トーマスさん!?!」

『隙あり……』

ビーン……と、どこから弦の音。まさか石弓——

「あ……ああ……!」

エルミーナさんが倒れることはなかった。

気づけば左腕が……なにかをかつぐような形になっており、その手には首筋を狙ったと思しき矢が握られていた。

「これほど気がそれた一瞬において止めるとは。素質は先代……いや、それ以上か」

「その声はル・ハイドだな!? もう一発うて! 早く殺せ!」

「女王よ、今は退いておく。だが覚えておけ……星の光で闇をはらうことはかなわぬと」

「おい逃げる気か! ワシを置いてか! 同志たるこのワシを!!
ル・ハイドオオオオオオ!!!」

「姐さん、あいつ逃げるつもりやで!」

「追いかけたいのはやまやまですけど……お二人を置いていくわけにはいきません」

「くう……ウチにお嬢みたいな腕つぶしがあつたらなあ」

あつという間のできごとだった。警備兵たちはぽかんとしているのか動きが止まっていた。

彼らに駆け寄りながら、もういちど叫ぶ。

「その人はハイナリア王国の女王なんだ!! 武器をおろせ、おろすんだ!」

「女王だって……?」

「そんなバカな」

「いやしかし——」

「ハハハハハ!!」

笑い声をあげたのはユンデ卿だった。

「お前のようなクス……『乱心のダグラス』の息子の言葉など、誰が信じるというのだ! お前ら、耳を貸すな!」

なぜだろう。父の不名誉な二つ名を聞いたのに、心の中で波が起きることはなかった。ぼうぜんどころちらに視線を向ける兵士たち。

「ユンデ様……恐れながら申しあげます」

ひとりが手を挙げ、おずおずと言った。

「その、恐縮なのですが……この青年を存じております。父とは似ても似つかぬ、正直でまじめな青年で——」

またひとりが言う。

「あの……わたくしも似た評判だと聞き及んでおります」

「なんだ、ワシが嘘をついているというのか」

「し、しかしながら先ほどの男も『女王』と……」

「どうなのですか、ユンデ様!?!」

「うるさい! うるさいうるさいうるさい!!」

「ユンデ様!」

主従の言い合いが次第に熱を帯び、醜くなっていく。そのとき一本の矢が、両者の間に放たれた。

「ひっ!?!」

エルミーナさんが、つかんだ矢を地面に投げたのだ。石弓で放たれたかのごとくまっすぐに、深く突き刺さっている。

「ユンデ卿……これまでです」

あつという間に『この方は女王である』という空気が支配的になった。兵士たちが一転、自分たちの主君を壁際に追いつめる。

僕も……彼の前に立つひとりに加わった。

「あー、やめだやめだ! どいつもこいつも役に立たん! もうワシの負けでいいわい!」

ぶつきらぼうに吐き捨て、座り込んだ老人。とても『賢のユンデ』の二つ名とはほど遠い姿だ……哀れみすら覚える。

「おお、いいことを思いついたぞ……トーマスくん。ワシを仇だとか言っておったな。その肩を射抜いたのもワシだ。ほれ、今が好機ぞ? 仕返しに殺せ。殺してみろ。ん?」

「そうですね……」

そばの棚に並ぶ武器から……ひとつを選ぶ。

僕はムチを手にとり、宿敵の体に『巻きつけ』た。

「くっ……なんのつもりだ？」

「僕の夢は仇をとることではありません。あなたのことは、法の裁きにゆだねます」

「なるほど自分の手は汚さんというわけか！　ハハハハハ！　まじめまじめ！　ハハハハハ!!」

狂乱の笑いがむなしくこだまする……が、笑いとともに鈍い打撃音が鳴った。

「ハガッ……!」

音の主は、あのメイドさん。

「おっとお……すいませんね。急いで縄を持ってきた勢いで、蹴っちやいましたー」

「トーマスさん……」

「エルミ……じよ、女王様……その、申しわけありません！」

「謝ることなどありません。あなたの迷いながらも正しくあろうとする姿……崖道で見たときから信じていましたよ」

「あ……!!!」

あのととき……『標的』にむかって弓を引き、目が合つて……驚いて、止めた。

僕は相手の顔を覚えた。だから覚えられて当然だったんだ。

「お嬢様、書き終わりましたよ。最後に署名をお願いします」

「……トーマスさん。これは今回の一件をしたための書状です。カランダ公まで届けてくださいますか？」

「僕が、ですか？」

「ええ。ぜひ、あなたに」

女王様はそういうと、いたずらっぽく笑った。

「途中で読んでもいいですよ？ ふふっ」

「どういう意味だったんだろう……」

道中ずつとドキドキしていた。兵士ではなく僕を指名し、いかにも読んでほしそうな言い方。期待をふくらませるなというほうが無理な話じゃないか？

「よ……読んじやおうかな?」

ふるえる指先を必死に落ち着かせながら、紙を広げる。そこに書かれていたのはユンデに対する告発。それから――

ひとつめは、書状を持参した者を騎士に推薦すること。

ふたつめは、前騎士団長ダグラスについて再調査の命令。

以上だった。

「わああー……!!」

極上のよろこび！　そして甘酸っぱくてしょっぱい……言葉で表せない気持ち！

感情のままに後ろをふりかえり、万感の思いで頭を下げた。

「ありがとうございます……そして、ありがとうございます!」

カランド公に仕え、お付きとしてもういちど……あの方に会いたい。

それが朝の陽ざしの中にかかげた、僕の新しい夢だ。

野盗のウワサ

「もきゅもきゅ……」

「はぐはぐ……」

「ぽりぽり……」

なだらかな山に草木がおいしげるコルン地方をおとずれた女王一行は、茶屋でひとときの休息を満喫していた。

「んー！ もちもちとした食感とほのかな甘さがたまらん！」

「ヒノカ、頬がゆるみっぱなしですよ」

「おっ言うなあ、お嬢。でも人のこと言えん……っつて」

「ぽりぽり……」

「なんで団子食ってそんな音がするねん！」

ルネの胸にツツコミがズバリ入った。

「まあ……ルネ、また隠しおやつですか？」

「いえいえ、めっそうもありませんー」

「ならばひとつくださいな。ふふっ」

「ウチも！」

「やっぱりそうきますよねー……」

「お客さんたち仲がいいねえ」

店の主人が感心して声をかけてきた。

「女の子三人で旅してるなら……この先の山には気をつけるんだよ。

さいきん野盗が出るらしいからね」

「まあ。ご忠告ありがとうございます」

「山さえ越えれば宿屋がある。暗くなる前にそこまで行けば安全だと思っ」

女王には考えがあった。ヒノカとルネも察しているだろう……

「あの顔、ぜったい野盗を探すつもりやで」

「ですねえ……」

くるりと振りむき、笑顔で返す。

「その通りです。というわけで、つきあってくださいね」

「しゃーないなあ」

こうして野盗さがしが始まった――

山の頂上をすぎ、下りも残り半分かといったころあいで、一行はあえて道を外して進むことにした。空が見えないほどの森の中を、草と低木をかきわけて歩きつづける。

「ああ困りました！ 道に迷ってしまったかもしれない。おほほほ」

「ここはー、おちついてー、休憩しませんかー」

「演劇にはむいとらんな、このふたり」

迷ったふりをしながら一定範囲をまわりつづけた……が、人の気配がやってくることはなかった。

「……出てきませんね」

「そうやな……まあ盗っ人も、誰かを毎日襲うもんじゃないやろ」

「運がいいのか悪いのか……」

「そろそろ先へ進んじやいましょう。さすがに野宿をするわけにはいきません」

日が落ちはじめたのか、じよじよに暗くなっていく。こうなると夜になるまでは早いもの。一行は道までひきかえし、急ぎ足で山をくだった。

話のとおり、山のふもとに宿屋はあった。見渡すかぎりの野原にたったひとつの建物。旅人を受け入れるには充分すぎる広さだ。

「ほほー、りっぱなもんやなあ。ゆうに三十人は泊まれそうやで」

「いくつ部屋があるんでしょー？ どうですか、たまにはひとり一部屋でぜいたくな宿泊でも――」

「ダメですよ。無駄づかいはいけません」

「ぶー」

ヒノカ直伝・限られた資金をだいじにする習慣は、すっかり女王のなかに根づいていた。それに――

「……それなりの人数の気配を感じます。空気が三つあるとも限りませんよ」

「なるほど、確かに――」

「ごめんくださいませ！」

扉を開けると同時にシャンシャンと鈴の音が鳴って、来客を知らせる。奥からばたばたとやってきたのは、二十代なかばとおぼしき男性だった。

「い、いらっしやいませ！　こんな夜ふけに……さぞお疲れでやんしょ」

「ひとり一部屋で――」

「ごらっ、ルネ」

「はい」

「……たいへん失礼いたしました。旅芸人一座の座長、エルミーナと申します。この三人で、お部屋をひとつ使わせてください」

「ふむふむ。今夜はだれも泊まってませんし、料金そのまま一部屋ずつでもかまいます――」

だれも？　と、聞き返そうと思ったが……やめておいた。

「……ああつ、いえ、失礼！　そういうわけにやいかねえでやんすね！」

宿の主人はぺこりと頭を下げ、受付の奥にむかう。

「ナタリー！」

「はいよお」

彼と同じ年ごろの女性。丸くふくらんだお腹が目をはいた。

「わあ、かわいらしいお嬢さんたち！　いらっしやいませ」

「こんばんは」

「オレはスーパの用意をしてくる。お客さんの案内をたのむ」

「わかったよ。さあさあ、すぐその部屋に——」

「ダメだ！」

「えっ!？」

「いや……その……まだ掃除がすんでないんだ。一番奥の部屋にしてくれ」

「はい？　ちゃんと掃除するときなさいよ。ずっとヒマだったんだからさ」

「すみません……」

「やれやれ。このひとつたら」

ナタリーと呼ばれた女性はためいきをついて申しわけなさそうに、しかし明るく案内してくれた。

そんな彼女が突然、驚いたような声をあげたのは廊下にはいつてすぐのことだ。

「あっ——」

「!?　どうされました？」

「なんでもないよ、ごめんね。ちよつとお腹を蹴っただけ……誰に似たのか、ヤンチャな子で」

やさしげに腹部をさする姿。

「それって——」

「……うん。赤ちゃんがいるの。もう産まれてもおかしくないんだ」

すぐ後ろから、ヒノカとルネの感嘆の声があがった。女王の胸にもあたたかいものがこみあげてくる。

「まあ……っ!」

「部屋の番号を教えてくださいたらウチらは大丈夫やで。その……あんまり動かないほうがええんちゃいますか？」

「だいじょうぶ！　むしろ動かないと落ち着かないんだ。さいごまで案内させて、ね？」

カラカラと笑う彼女から感じる包容力は、母の強さだろうか。

「そか。それならお願いするで!」

「ナタリーさん。私たちが滞在しているあいだに何かあったらお呼びください。ここにいるルネは、医学に覚えがございしますので」

「ちよ、お嬢様!？」

「……ほかにも困っていることがあれば……ぜひおっしやってください。力になれると思います」

「ありがとうございます。じゃあ、もしものときはお願いしちやおうかなー!」

女王たちは案内された部屋のなかで、歩きどおしだった足を休めた。しかし――

「……さて、聞き耳をたてる者はいないようです。今後について話しましょう」

「やっぱりか。お嬢の様子からして、なにかを感じとってる気がしとつたんや。姐さんもか?」

「もちろん。それにしても責任重大ですねー……」

宿屋の主人の態度と言葉、そして建物から感じとれる気配を考える……穏やかな休息はもう少し後になりそうだ。

扉をノックする音。主人がスロープを運んできたのは『作戦会議』が終わった直後のことだった。その手はちいさく震えていた。

「私はあなたがたを助けたいのです。きつとお役にたてると思いますよ」

話をきくにつれ、彼のかかえる事情が明らかになっていった。

「……実はオレ、野盗とつるんでるんでやんす。客の中から『ねらい目』を見定める役でさあ。ナタリーとここで商売しはじめて、すぐにあいつらがやってきて……」

語るにつれて、主人の目から涙がこぼれおちる。

「いわば『みかじめ料』ってやつで。協力すればオレたちには手を出さないってことで……これはオレの独断で。ナタリーはこのことを知らないんでやんす」

「ナタリーさんのために、ずっとおひとりで戦っていたのですね……」
「そんなキレイなことじゃ！ 自分たちのために何人の客を売ってき
たか……」

「はい、質問がありまーす」

ルネが手をあげた。

「今回は眠り薬をつかおうとしましたよね。どうしてですかー？」

「ど……どうしてそれを!?!」

「んー、において。料理を出されても口にしちやダメですよーって、さつき話してたところです」

「は……ははは……お嬢さんたち、いったい何者なんですかまったく……」

ヒノカたちと目をあう。聞かれたときの返事は決まっている。

「ふふふ、通りすがりの旅の者です」

「さーて。では行きましようか、お嬢様！」

「ええ」

まずは他の部屋にひそむ賊たちを退治する。

宿屋の主人には、何食わぬ顔で厨房へともどるよう指示をした。いまごろは眠り薬スープを温めなおしているはず。

悪人といえどスープは温かく。女王の意向だった。

「向かって左の部屋に三人……右には二人。ルネ、左側をお願いします」

「かしこまりましたー」

そつと廊下に出て、抜き足、差し足、忍び足……二人とも扉のまえに立った。目で合図をおくり――

「今です！」

同時に、すばやく扉をひらく。女王が開けた部屋では、男たちが椅子にもたれかかっていた。

「うおっ!?!」

「なん――」

「失礼しますっ!」

ひとりは、サツとふところの武器に手をかけた。しかし女王のほうが早い。胸元へ杭をうちこむように手刀をみまった。

もうひとりは立とうとしたところ、いきおいあまって椅子からすべりおちている。床にうちつけた腰がよほど痛かったか、迎えうつどころではなさそうだ。

「いててて……テメツ、なんなんだテメエ！」

「通りすがりの旅の者です」

「わけわかんねエぞぐえっ!?!」

用意していた縄で手早く縛りあげる。ヒノカ直伝の、抜け出せない縛り方。

「クソツッ! だれかたすけてくれ! たすけてくれエ!」

じたばたしながら声をはりあげるが、だれもあらわれることはなかった。

つかまえた野盗の全員がスープで眠ったころ。

宿屋の主人は、最愛の女性にすべてを打ち明けたのだが――

「知ってたよ」

「ナタリー……まさか、今までのこと全部？」

「うん。知ってる。あんたのことならなんでもね」

「そう、だったのか……」

「あたしも同罪だよ。あたしたちのために、ずっと見ないフリしてたんだから」

「ナタリー……」

「ひとりで背負わせてごめん……ごめんね……」

「謝るのはオレの、オレの……う……う……うあああああ！」

「うう……ええ話やな……」

「……しばしの間、そっとしておきましょう」

涙がふたりの間を満たすまで、そうすべきだと思った。

女王たちは賊から聞きだした『拠点』へ乗りこむ用意をはじめた。野盗を捕らえ、この地方をおさめるコロン公を呼ぶのだ。

書状をとどける役目は主人が引き受けてくれた。あとは――

「……ナタリーさんを一人にするわけにはいきません。よってルネは残ってください」

「いやはや、責任重大ですね」

「お嬢、どうやって拠点に近づくつもりや？ 騒ぎを起こしたらひとりくらい逃げるかもしれないで」

「外に荷車がありました。それを使いましょう」

「……なるほど、眠り薬を使ったのは『無傷の若い女性を仕入れるため』やったな」

「ええ、『仕入れ』のふりをして近づきます。荷物の役はこの私……」

「じゃあウチは荷車を引く役目か？」

「重かったらごめんなさい。あつ、とちゆうまでは一緒に歩きますから安心してくださいね」

「はははっ！ お嬢の体格なら最初からでもだいじょうぶや、任せと
きー！」

コンコンとたたく音がして、扉が開いた。

「お待たせしやした、お嬢さん。もう……大丈夫です」

したためておいた書状を手にとり、主人に手渡した。

「では、これをコロン公のところまでとどけてください。必ずお力添えをしてくれます」

「ははは……オレはあんたたちを助けて、ナタリーを連れて逃げるつもりだったんだけど。なんだかすごいことになっちゃまって」

「あなたの勇気が女神にとどいたのですよ。ふふっ」

「お嬢様ー！ お気をつけてー！」

「あんたー！ しっかりねー！」

見送りに手をふつてこたえながら、荷車を引いて歩きだす。

借りものの外套を身にまとい、フードをふかくかぶった女王とヒノカ。見た目はまさに宿屋の人間そのもの。

あとは拠点に近づいたら背を曲げ、肩ひじを張って華奢な体格を隠せばいい。

「さあヒノカ、がんばりましょう！」

「おうー！」

車輪がえがく二本の線とともに、ふたりは進む。

月夜のたたかい

「月がきれいですね」

「そうやな……きれいや」

「まるくて、明るくて……」

「途中で食べた団子、うまかったなあ」

「まあ、ヒノカったら」

月明かりのもと、荷車を引く女王とヒノカ。今宵は満月……蒼くそまつた平原が風にそよぐと、まるで湖の底にいるようにさえ思えてくる。

「ははっ冗談や、冗談」

空を見つめたまま、ヒノカはつづけた。

「お嬢と初めて会ったときも……こんな夜やったな」

「ええ……よく覚えています」

初めてのお忍び、ましてや誕生日の夜のこと。忘れるはずがない。「城の外の景色……星のかがやき……町の光、すべてが美しく見えました。そして最愛の友人とも出会えた大切な日です」

「……まーた始まったで。お嬢の人ったらしが」

ヒノカについて思っていることを話すと、彼女はもじもじすることがある。なぜなのかわからないが、いわく『人ったらし』というそう

「そ、それはそうと！ おかみさん、根性のすわつとる人やったな」

「ええ。ご主人の話をすぐに受けいれる姿にはおどろかされました。

あの、ヒノカ……？」

「なんや？」

「うまく言えないのですが、あの人から母親の強さと言いますか……そのようなものを感じませんでしたか」

「ああ、肝っ玉かあちゃんってやつやろ」

あつさりと肯定されのが少し意外だった。ナタリーが特別だと思っていたからだ。

『きもったまかあちゃん』とは、ありふれたものなのですか?」

「ウチのかあちゃんも似た感じやったで。まあ、ありふれた性格なのかはちよつとわからんけども」

「ヒノカのお母様……いつか会って、お話してみたいですね」

親子はきつと似ているのだろうと思う。いまのヒノカを形づくった、いろいろな出来事を聞いてみたかった。しかし――

「……そういえば教えたことなかったな。ウチの両親、もう死んどるねん」

「っ……ごめんなさい」

「ええってええって。謝ることやないで」

気分を害した様子はまったくなかった。世間ではよくある会話なのかもしれないが、もし施政の影響で亡くなったのなら……女王として責任を感じずにはいられなかった。

「おとうちゃんは事故、おかあちゃんは病気や。だれのせいでもない」
「……ありがとう、ヒノカ」

こうして心をささえられるのは何日目だろうか。さきほど『最愛の友人』と表現したが、それではとても足りない。

「ウチの家、なかなか貧乏でな。なんちゅーか……物心ついたときから『えらい人間はみんな敵や!』なんて思ってたんや。でもな」

肩にポンと手がおかれた。布越しでもあたたかく感じられる。

「お嬢と会ってからは……ちよつと変わった。だからその……」

ひと呼吸の沈黙。荷車の音だけが、しばしの時をつつんだ。

「いつもありがとうな」

返事をするかわりに、肩の手をやさしくにぎりしめた。今はそれで充分だった。

「へへっ」

「ふふっ」

出会った日とかわらぬ月が、ふたりを見守っていた。

かわいた雑草と土のうえを歩きつづけ、小さな丘をのぼる。宿屋の主人の話では、丘のむこうに野盗の拠点があるそうだ。

頂上から見下ろすと焚き火らしき明かりが見えた。そばには大きなテントがひとつ、小さなものがみつがある。

「あそこですね……」

「よっしゃ、やるか」

女王は荷車に寝ころび『仕入れた娘』に、ヒノカは外套を深くかぶりなおして『野盗の一員』となった。

「準備はええか？ 連絡用のたいまつ、つけるで」

「はい。どうか気をつけて」

目を閉じ、そのときを待つ……ボツという、火のついた音が聞こえた。

ガタガタと荷車がゆれる。ある方向から人間の気配がやってくる……目的地に近づきつつあることがはつきりとわかった。

男たちの野太い声がとぶ。

「おーい、こつちだ、こつち」

「待ちくたびれたぜえ」

たいまつを振る音。

返事をすれば声で変装だと見抜かれてしまう。身振り手振りで応じるよう、ヒノカとうちあわせ済だ。

荷車がとまった。多くの足音が近づいてくる……その数、十人。

「どんな女かはやく見てみようぜ」

「なあ、ちよつとでいいから『味見』してーんだがよ」

「バカ！ それでキズモノにしたら、バレたらどうすんだ」

「わかんねえだろそのくらい。へへへ……」

「おまえらしい加減にしろ！ 『無傷の若い娘』じゃねえと依頼主が金を払わねえかもしれねえだろうが！」

「へ、へい！」

いま発言したのが親玉だろうか。彼は『依頼主』と言った。つまり雇った者がいることになる。

「だから傷がつかねえように味わえ」

「うひよー！ー！ー！」

「さっすが親分！」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ！ さっそくいただきまーす!!」

歓声をあげながら、ひとりが荷車に乗りこんできたようだ。

「……ああん？ こりやまだガキじゃ——」

目を見開いて、のぞきこんでいた男をつきとばし、高々と跳躍した。
「来たれ、星剣！」

閃光と衝撃をともなつて、女王のもとに星剣が飛来する。その姿は雷をつかむ物の怪に見えただろうか。

「ぎゃああああ!!」

「バ、バケモノ！」

「お、おおお、おおお前らおおお、おおち、落ち着け!?!?」

「野盗たちよ、観念しなさい！」

反撃してくる相手を経験したことがないのか、ほとんどの者は尻もちをつき、地面を這いずって逃げようとしていた。

立っていたのは二人だけ。そのうちの一人を電光石火、ふみこみからの袈裟斬りでうちたおす。

「ぐへっ！」

「なんなんだこいつは!?!」

「親分、やっちまってくだせえ！」

「あ？ 親分は？」

頼みの『親分』は、立っていた残りの一人だったが……

「うおー！ 逃げるが勝ちだぜええええええ!!」

「お、おやぶううううん!」

女王に背をむけ、武器をも捨てて逃げだしていた。

「逃がしません!」

忍ばせていた重し付きの縄を投げつける。ヒノカから借りた捕縛用の道具だ。

「うおっ!?! おっおっおっおお!?!」

命中すると重りがぐるぐると回転し、体に縄を巻きつけていく。

『親分』はたちまち体勢をくずした。

「くそお、なんだこれはああああ!!」

「おやぶ——ブホッ!?!」

女王は残る者たちにも一打をくらわせ、動く力を失わせた。

「……あれ、もしかしてもう終わったんか？ え、ほんまに？ やつと一息つけるって思ってたのに?」

野盗全員が地面に倒せ伏すのと、ヒノカが荷車の下へと避難し終わったのは、ほぼ同時のことであった。

野盗の雇い主

氣力が尽きた男たちを全員縛りあげるのに時間はかからなかった。これから『依頼主』について聞きださなければならぬ。

「さて親分さん」

「ひゃ……ひゃい」

「あなたの依頼主のことを聞かせてもらえますか？」

「『マカザ』ってスケベ野郎でさあ！」

「そうそう、コルなんとかって偉エやつ……あーっと、親戚だつていう話ですぜー！」

「コルン公だ、コルン公！　なんでそこまでしか覚えてねえんだ」

「ヒヤヒヤヒヤ！　すまん！」

「親分のテントに屋敷までの地図があつたはず！」

「あつたあつた！」

マカザ。直接の面識はないが、コルン公から名を聞いたことがある……遠戚の問題児として。

名前と血縁者をサラリと言つてのけたうえに、地図までもっているとなれば真実なのだろう。しかし――

「ずいぶんあつさりと白状するのですね？」

「そりやもうアネゴの戦いぶりに感服したもんで！　かつこよかつ

たつすよ！　な、お前ら！」

「へい親分！」

「惚れましたぜアネゴオ！」

「おいおい。お嬢の戦いぶりを見て、真つ先にトズラこいたのは誰やったかなあ？」

「ああアレは失敗したな！　あつしもアネゴにぶつ叩かれりやよかつたぜ！　アツハツハツハ！」

「親分、うらやましいですか？　うらやましいですか？　ワハハハハ！」

縄で自由を奪われているにもかかわらず、野盗たちは笑いあつてい

た。ある意味、手ごわい。

城を出てはじめて、女王は頭をかかえた。

「……ヒノカ、この反応は……予想外です……」

「ははは……人つたらしの本領発揮ってことにしとこうや」

こうして彼らはすべてを話した。女王への心酔からか、こぞって裁きを受けると言い出すほどであった。

「余罪の調査をふくめ、あなたたちの処遇はコロン公にまかせる予定です。そのつもりでいるように」

「了解であります！」

「では全員、宿屋までついてきなさい」

「へいアネゴ！」

「荷車は俺らにひかせてください！」

「よしなに」

「よつしや行くぞお前らあああ！」

「おお!!」

「はあ……」

それは月がどこかへ飛んでいきそうなほど賑やかな、女王とヒノカと、十人の野盗の行進だった。

「で、マカザつちゆう男はどうやってこらしめるんや？ 屋敷に乗りこむんか？」

道中でヒノカがたずねる。

「ルネを向かわせようと思います。『仕入れが完了した。品質がとても良いので、部下が妙な気をおこす前にひきとってほしい』と」

「なるほど。宿屋の主人に持たせた書状で、コロン公に呼びだしをかけたる所にマカザも……一網打尽ってわけやな」

「はい」

「おそろしいお嬢やで」

「親分……なんかすげえ話をしてますぜ？」

「ああ。俺たちのアネゴは、とんでもねえお方なのかもしれねえな……」

「さすがアネゴだ……」

「よくわからんけどすげえ……」

「ごほん。さあ、宿屋にもどったら仕上げにかかりましょう」

宿屋の前ではルネが見張りをしていた。さすがの『団体客』におどろいたようだ。

「あれっ、お嬢様。その人たち……ずいぶん素直についてきたようで」「話すと長くなりまして。ナタリーさんの様子はどうでしたか？」

「言い聞かせて寝てもらいました。さすがに夜が遅いですからー」「そうですか……大事なようで安心しました」

聞きだした情報と、黒幕であるマカザを呼びだす計画を伝える。すると、察しのよいメイドは次の仕事をすぐに理解した。

「じゃあ、その人をおびき寄せるのは任せておいてください」

「夜通しで苦勞をかけますが……頼みます」

「いえいえ、わたしは待つてる間にちよびつと仮眠をとったのでだいじょうぶですー。お嬢様たちこそ今のうちに休んでくださいな」

宿屋で捕まえた者たちは、物置小屋に収容されていた。そこへさらに十人がやってくると、さすがに驚いたようだ。

拠点にいる仲間たちもやられたのだから無理もない。

女王は先にヒノカを部屋で休ませ、小屋の見張りを買って出た。野盗たちはしばらく騒がしくしゃべっていたものの、じきに寢息に変わっていった。

壁に背中を預け、宿屋のふたりについて考える。

主人は身の安全のため悪人に手を貸さざるをえなくなった……ナタリーに秘密で。しかし今回、ここを捨てても足を洗う決心をし、すべてを打ち明けた。

ナタリーもまた動じずに受け入れ……いや、動揺はあつたはずだ。たとえ察していたとしても。

彼らの心は強い。そしてヒノカが言っていた『肝っ玉かあちゃん』という言葉が合わさる。

子供をさずかり、親になることでより強くなったように思えてならない。

「母上も同じだったのでしょうか……」

女王が知る先代は、自分が産まれる前の話ばかりだ。

もしも母が『母』になり、ひとりの人間として成長したのなら……

「あなたの背中はまだまだ遠いようです。母上……」

手をのばしても届かない。

空にかがやく星のように。

それでも求めてやまない、夢。

しばし思いを馳せ、ゆっくりと目を閉じた。

「ん……」

まどろみの中にあつた意識がすこしずつ戻ってくる。

顔をあげると、山のむこうの空がうっすらと赤く染まり、朝日がやってきていた。

「ああ……とてもきれい……」

しかし、いつまでも見とれているわけにはいかない。そもそも――

『んごおおおー』

『ぐがーぐがー』

浸るにはすこし騒がしかった。

固くなっていた体をのぼしていると、宿の入り口からナタリーが出てくるようすが見えた。こちらに食事を持ってきてくれたようだ。

「お嬢さん、おはよう」

「おはようございます。お早いんですね」

「宿屋の朝はこんなものだよ。ほら、スープをどうぞ。変なものは入っていないから安心して」

丁重に礼を述べ、あたたかい朝食を口にする。思えば一晩じゆう夜風にふかれつづけていた……身に染みる。

「もう一人のお嬢さんから聞いたよ。全員捕まえたんだって?」

「はい。ですが、彼らを雇った者がいます。これから対処しますので、もう少しだけご辛抱を願います」

「そりやありがたいけど……昨日からやってることがすごすぎて、なんて言ったらいいのやら」

ナタリーがお腹をさすりながら笑う。うまれてくる子供のためにも、マカザを逃がすわけにはいかない。

しばしの時間を談笑してすごしていると、遠くから馬の蹄の音が聞こえてきた。

「誰かが近づいてきます。ナタリーさん、宿に戻ってください」

「……わかった。どうか気をつけてね!」

「さて、コロン公とマカザ。どちらが先についたのでしょうか……」

ひびく怒号

宿屋へやってきた馬は四頭。うち一頭にはルネが乗っている。先に来たのはマカザのほうだった。

徒歩や馬車ではなく、自ら走らせてやってきたのなら……相当な急ぎ足だ。

「どうどう、どうどう！」

高らかな声をあげて急停止させた若い男。ルネに目をやると無言の合図がきた。『こいつです』と。

「さあ来ちゃったぞ。おいメイド、仕入れた女はどこ？　まさかあそこのガキんちよじゃないだろ？」

「まさかー、中にいますよマカザ様。そりやもうすごーいのが」

「俺ちゃんは君もいいと思うんだけど。いっしょに来てよ、な」
なめるような視線がルネの全身にそそがれる。

「あらあらご冗談をー」

「よし持って帰る！　決定！　ハハハハ！」

「んー……」

女王は、マカザがひとしきり笑い終わったところで話しはじめるつもりだった。

だからルネには耐えてもらうしかない。口から発することはできないが、心のなかで目いっぱい激励をおくった。そして――

「星剣よ……私のうしろに」

背後に星剣を召喚した。

「ハーわらったわらった。じゃ、いよいよ対面しようかなつと」

ふたりの家来とともに下馬したマカザ。こちらには目もくれずに通ろうとしたが、そうはいかない。星剣を横にあげて行く手をふさぐ。

「……ん？　なにかなこれは……つと！　とと？」

剣を引っぱる、押す、叩く……しかし女王の剣は微動だにしない。

「……あのさ、なに？」

「残念ながら、あなたがこの先へ進むことはできません」

「ハア……これだからガキんちよはキライだよ」

これみよがしに手をパンパンとたたく。家来たちがにじりよつてきた。

「つまみだせ。ついでに……」

とつぜん、全員そろってニヤリと笑う。

「お前らこういうの好みだっけ？ 好きにしていどうぞ」

「ごちそうさまです」

「さすがマカザさま氣前がいい！」

左右からつかみかかろうとする家来の手を、一歩ひいてかわす。ぶつかりそうになった両者をまとめてなぎ払った。

「うげっ!？」

「ぎゃー!？」

よろけた先にはマカザ。彼をまきこみ、三人で肩を組むような姿勢になった。

「はっ!？」

両手をひろげて剣を一文字に構えると、強く前へ踏み出す。

「ちよ、まてまてまてまて!!」

「うわああああー!？」

押し返された男たちは、まともに踏ん張ることもできずひっくり返った。

「痛ってえー!？」

すぐに動ける状態でなくなったようすを見下ろしながら、大地に星剣を突き立てて宣言する。

「マカザ、ならばに共の者たち。欲望にまみれたその非道……断じて許しません」

「ハア!? なんだお前、えらそうに！ 俺ちゃんが誰だかわかってん

のかコラ！」

つばを飛ばしながら騒ぎつづけるマカザ。彼は女王との面識がないので、ここで身分を明かしても効果は見込めない。

コルン公が到着するまで拘束の必要が……と思ったが、どうやら待つ必要はなかったようだ。

「……来ましたね」

前方、道のむこうで遠くはためくのはコルン公の旗印だった。それを指差し『縁戚』の到来をつげる。

「あれをぶらんなさい」

「俺ちゃんに命令するな！ 後ろになにがあるって……ああ！」

そういいながら振り返ったとたん、マカザと家来たちがにわかには活気づいていく。

「あの旗は……おじちゃんじゃないか！ おーーーーーい！ おじちゃん！ こつちだ。こつちだー！」

「コルン様？ おおーコルン様ー！」

「おれらをお助けくださいい！」

「ハハハハ！ 女神様は俺ちゃんたちに味方してくれたぞ！」

「万歳！ 女神様万歳！」

こうして初老の領主は、本人が想像しなかったであろう熱い歓迎をうけることになった。

女王は騎士団を連れてくるよう要請していた。捕まえた野盗たちを連行してもらうためである。もちろんマカザたちも。

「いいところに来てくれたよおじちゃんーん！」

「お……お前はマカザ？ どうしてここに……いや、それよりも女王――」

「聞いてよ聞いてよ！」

マカザは、うろたえる相手の言葉をさえぎるように叫びながら女王

を指差した。

「あのガキンちよがいきなり殴ってきたんだ！ 暴力だ！ 虐待だ！
犯罪だ！」

「……なに？ いまなんと言った？」

「殴られたんだ！ しかも見ろよ、あんな武器で！」

泣きつかれたコルン公は驚きの表情を隠さなかった。縁戚の男と『ガキンちよ』を交互に見る……どんだん目が大きく開かれていく。

「お前……いったいなにをしたんだ……まさか……」

「いいからさっさと成敗してくれよ！」

「コルン様！ 俺たちは通りすがっただけなんです！」

マカザの家来たちも騒ぎはじめた。

彼らは知っているのだ……公爵の性格を。

「わ、わかった。わかったから、すこし静かにしててくれ……」

コルン公は何度もうなずき、なだめながらも女王の前に歩んでいった。

「……女王陛下。フージ・マジ・コルン、ここに馳せ参じました……」

「はっ！」

ひざまずいて頭をさげるが、声は小さくふるえていた。

「おじちゃんにしてんの？」

「く、口をつつしまんか。こちらにおわすお方は我が国の女王、アンナ・ルル・ド・エルミタージュ様なのだ」

「あっそ。で、早くぶった切ってくれない？」

「なっ……!?!」

その言葉に騎士団もどよめく。

「そいつのことなんて興味ないし。いきなり俺ちゃんを殴ったのは事実なわけ。だから処罰！ 当然のことじゃん」

「あわ……あわわ……」

「生意気なチビ。俺ちゃんが誰かもわからないバカ。ああそうだ、バカだから力が強いんだきつと。よくいるよなそういうやつ。あと俺ちゃんを見る目が冷たい。人のあたたかみってもんがない。生きる価値なし。ブスでカスでバカ——」

「うるさい!!!」
「!!!!!!」

大地も割らんばかりの怒声に、さすがの女王も一瞬だけ肝を冷やした。ルネがこんなに大きな声を出すなど、記憶にない。

「その口をいまずぐ止めろ!!」
「ヒッ!」

マカザだけではない。その場にいるすべての人間が口をつぐんだ。どよめきもささやきもない。風すらも、ちぢこまったように止んでいく。

憤怒のメイドからだただよう気迫はすさまじく、騎士たちが武器に手をかけるほどだった。

殺意。

誰もがそう解釈しただろう……彼女をよく知る、女王をのぞいて。

鉄拳制裁

ルネの目はかかってないほど鋭かった。天を衝いた怒号とは裏腹に、音をたてず一歩ずつ……ゆっくりとマカザの前へ歩く。

「おい女、そこまでだ……止まれ」

騎士のひとりが声をしぼりだしたものの、目が合うなり一歩二歩と退いてしまった。

「うう……っ」

「マカザ……！」

「うげっ……」

彼女が首をつかんでも、もはや止めようとする者はいない。ひとりのメイドにたじろぐばかりの貴族と騎士たち……異様な光景だった。

「た、たすけ……て……」

マカザは体に力がいらなくなったか、首にかけられた手を支えに、半ばぶら下がった状態だ。

女王は知っている。ルネの力ならば喉をにぎりつぶすことも可能だと。そしてそれを決して実行することはないと。

「……わたしにいやらしい視線を向けるのはいい。わたしのことをどう言ってもかまわない。でも、女王様を……そうだと知ったうえで侮辱するのだけは許さない」

わずかに声を震わせながら、ルネは手を離れた……

「昔のわたしだったら、あなたの命なんてどうにでもしただろうね。だけど今は……女王様に仕える今は……ちゃんとした裁きにかける。もどかしくて仕方ないけど、わたしはあのお方の従者だから」

「ルネ……」

彼女の気持ちは察するにあまりある。女王として、その忠義に報いなければならない。

だが――

「ハハッ、ハハハハ！ なら俺ちゃん助かるじゃん！ おじちゃんが俺ちゃんを裁くなんてムリムリ！」

「いや、その……女王様のご命令とあらば……やらんことも……」

「へー！ じゃあ聞くけどさ、俺ちゃん悪いことしたの？」

「うむむ……」

「フン、メイドもえらそうに。ようするに度胸がないんだろ。ホラ氣に入らないなら殴ってみろよ、その代わりただじゃすまないぞ？」

助かったとみるや強気になるマカザ。言いよどむコルン公。もはや自身が語るほかない。女王は星剣を地面につきたて、一喝した。

「静粛に！」

うやうやしくひざまずく者、いまだ動揺を隠せぬ者、余裕の笑みを浮かべる者……全員がこちらを見ている。

「マカザ。欲望のために若き女性をさらおうとは言語道断。見過ごすことはできません」

「はい証拠だして、今すぐ」

「そうだそうだ。証拠を出せ証拠を！」

「……ルネ、小屋から彼らを連れてきてください」

「ただちに」

「ゲッ！」

野盗たちがぞろぞろと現れると、マカザの顔は青くなっていった。

「あなたたちに指示を出したのは、この男に違いありませんか？」

「間違いありません！」

「昔からのお得意様ですぜ！」

「待てよ！ そんな汚いやつらの言うことを信じるのかよ、俺ちゃんよりも!?!」

「黙りなさい。この期におよんで言い逃れを——」

「ワアアアこのガキイイイ!!」

「無礼！」

マカザは短剣をぬいて襲いかかってきた、が——
うめき声すら許さない速度の鉄拳が、彼の顔面にさく裂した。水車のように、全身がぐるりと回転するほどの威力だった。

ルネが『ほどほどに本気で』人を殴る光景を見たのは、訓練をのぞけば実に久しぶりのことだ。

あつけにとられる皆をよそに、本人は涼しげな表情で手をふいている。

「はあ……ちよつとすつきりしたかも」

「では改めて……マカザ、ならびに共の者たち。以前よりコロン公がその悪行に頭を悩ませていましたが……ここまでです。コロン公、こちらへ」

「は、はい……」

「この地方を治める立場にありながら、彼らに甘い対応をつづけ、野放しにした責任は重大です。おわかりですね？」

「もうしわけございません……」

「マカザたちを裁くのはあなたの役目。ですがそのまま任せるわけにいきません。こちらで監視をつけさせてもらいます」

「か、監視……でございますか？」

「ルネ。近隣の有力者へ応援要請を。そして人員が到着するまでは、あなたが余罪の調査をやっておあげなさい」

「……！ よろこんで」

これが女王なりの、ルネへの回答だった。彼女が託す『ちゃんとした裁き』の一助に。

あとはコロン公にすっかりしてもらおうだけだ。

「こ、このメイドが調査を？」

「コロン公。彼女の能力は保証します、よいですね？」

「か、かしこまりました。女王様のご命令とあらば……」

深々と頭を下げるコロン公。マカザの件はこれでよし……そしてもうひとつ、女王には言うべきことがあった。

「ところで、書状を届けた者はどこに？ 姿が見えませんが……」

「はい、野盗の一味だということで、ただちに牢へ入れてございます」

「……その機敏な対応を、マカザたちへも公正に行えるよう期待します」

「き、肝に銘じます……！」

これだけ念を押しておけば、コロン公はしっかりやってくれるはずだ……

「彼が悔い改め、私たちを救ったことは書き記したとおりです。処遇については一つ提案が——」

翌日。

女王の計らいによって宿屋の主人が返ってきた。かねてより治安の悪かった近辺を開発する。そのための『宿泊所』を提供して罪を償うのだ。

数日もすれば、人が集まってくることだろう。何年もかかる大仕事だ。

「女王様とはつゆ知らず数々の無礼……どうかお許しください」

「いいえ、どうかお気になさらず。それよりも、ナタリーさんのほうはいかがですか？」

「はい。『もうすぐ』だということ……今はお医者さまもついていますから」

「そうですか。では、元気な子が産まれるよう祈っています、とお伝えください」

「あ、ありがとうございます！ きつと喜びます」

「あなたがたの勇気と愛情、そして強さ……学ばせてもらいました。では、名残惜しいですが……まいりましょうか」

「どうかお気をつけて」

道中、ヒノカがきりだした。

「お嬢、ルネの姐さんには行き先を伝えてあるんか？ もう何日か、かかるやろ？」

「もちろんですよ」

「それならええわ。んー、次はバレンノース地方か……なんだか懐かしいなあ」

ヒノカと出会うきっかけになった事件……『西の名君』バレンノース公の側近が起こしたものだ。

先日、月夜がなつかしいとふたりで話した。今は旅立った日の青空が思い出される。

あのころに想像していたよりもはるかに楽しく、充実した旅であった。

思わぬ再会

潮風がかおる西の都バレンノースに到着した女王たちは、別行動中のルネが追いつくまで滞在を続けることに決めた。

「さあさあ、よつてらっしゃい、みてらっしゃい！ お代は観てのお帰りやでー！」

商船が行き来するこの港町は、旅芸人にとってよき『稼ぎ場所』である。今日もヒノカは稼いでいた。

艶やかかつ優雅な舞のみならず、両手をつかわずに笛の音を操る妙技。女王も何度か教えてもらったものの、まだ笛の演奏だけでせいっぱいだ。

船乗りと商人たちをはじめ多くの人々がヒノカに魅了されていたが、手じまいのあとも熱い視線を送りつづける少女がいた。こちらと同じくらいの年ごろだろうか。

宿へ歩きだそうとしたとき、こちらに駆けより話しかけてきた。

「ありがとうございます踊り子さん。すごくきれいだった」

「こりやおおきに。明日もやるから、よかつたら見たってや」

「明日か……」

ほんのすこしだけ顔がくもる。

「……うん、時間があつたらぜったい来る」

「おう、待ってるで！」

「……あつそうだ！ これ、おひねり。ぜんぶ持ってつちやつていいからね！」

そう言つて布袋をヒノカに渡すと、少女は走って去っていった。

「今の方は明日も来てくれるでしょうか？」

「ああ……うん、そうなるってええな」

「……？ どうしました？」

ヒノカは心ここにあらずといった様子で、袋をまじまじと見つめている。彼女にしてはめずらしい反応だ。

「おかしい……やたら重たいでこれ。お嬢、ちよつと持つてみ」
「はい……っ、これは……」

手のひらほどの大きさだが……たしかに重かった。手が地面へと押しこまれるようだ。

厚みのある板状の物体。女王はこれに近い感触のものをひとつ知っている。

「金……？」

「きんらん？ あんな普通の子が持ち歩くか？ もし持つてても、ぽーんと人に渡せるもんちやうやろ」

「開けてみましょう」

予想通り、入っていたのは金のインゴットだった。表面には商会の刻印がはいっている……偽物ではない。

このインゴットから金貨を15枚以上つくることができる。

それがふたつも入っていたのだ。

女王にとつては城に保管されている資産の形のひとつにすぎない。

しかしヒノカは――

「金……純金……？ いまの重……てに……にに……」

動揺のあまり意識がとびかけていた。そんな彼女に声をかけようとした、そのとき。

「きんらんらん!!」

甲高い声をあげながら突進してくる男。のぼしてきた両手をひらりとよけると、勢いそのままに倒れこんだ。

「ハアハア……あれ？ 金、金はどこだ？」

地面をさする男は、ふるまいに反して高価な服と装飾に身をつつんでいた。

インゴットとは比較にならないものの、金製とおぼしき指輪をいくつもはめている。

「そこのお方。あいにくですが、これはあなたの物ではありません」

「くうう……俺……俺だつてたくさん持つてたんだよ……もつとでか

いやつを！ たくさん！ どこに行つちまったんだよお」

「知るかいっ！」

「ヒノカ!？」

横からヒノカが威勢よく返してきたので、少しおどろいた。

「へへっ。このおっさんのおかげで目が覚めたで……って、んん？」

「うん？ なんだよ女。へへへ、俺に惚れでもしたか……って、んん????」

ふたりがギョツとしたように見合つて固まってしまった。

なにごとかと男の顔を見ると――

「あっ！」

女王も思わず声をあげた。

時間がとまったような硬直のなか、最初にしゃべったのはヒノカだった。

「あんたは確か『西の名君バレンノース公の執政代理人、ゲオル・ベレツツオ』！」

「ちがう、『西の名君バレンノース公の元執政代理人、ゲオル・ベレツツオ』だ！」

ゲオル・ベレツツオ。

初めてのお忍びでヒノカと出会った夜、酒に酔いながら彼女に絡んでいた貴族。

うれしい再会ではないが、なんとという奇遇だろうか。

「旅芸人の女……それに……まさかじよお――」

ゲオルは言いかけて大きくせき払いをした。

「いやまて、まてよ。これは……使える！」

「なんでしよう、また悪いたくらみでも？」

「いえいえめっそもございませぬ。へへへ……これはお互いに実り

のある話になると思いますよ、お嬢様。さき、こちらへどうぞ。人に聞かれたら大変ですから」

ついてくるように促す。信用できない相手ではあるが、よからぬことを考えているなら対処しなければ。

「……聞きましょう」

「さすが！」

「お嬢……」

「大丈夫です。ヒノカは私が守ります」

「おう。お互い気いつけような」

解体途中とおぼしき建物の裏まで来た……周辺に人の気配は感じられない。内密な話をするにはぴったりだった。

「この領主についてなんですがね。病床に伏してることはご存じでしょうか？」

「ええ。ご高齢もあって、直接お話しができたのは何年も前になります」

「お世継ぎがないという話も知ってますよね？」

「アンタがその座を狙ったんやないか」

「黙れ、今はこのお方と話をしてるんだ」

「ゲオル。彼女は私のたいせつな友人です。言葉をつつしみなさい」

「は、ははあ！ 失礼しました、取りげします！」

調子のいい男である。

「……いいでしょう。では、続けて」

「実はバレンノース公には一人娘がいたんですよ。しかし行方不明になった」

「今から20年ほど前……先代のころの出来事。そう聞いています」

「なぜ？ どうして？ そこまでのご存じないでしょう……何をかくそう、当時このゲオルが情報を伏せたんですよ。なかなかの隠しっぷりでしょう」

ゲオルの言うとおり、その後の記録はない。ゆえに女王は詳しい事情を知らない。

そして新たに調べようとも、本人に尋ねることもなかった。

バレンノース公が娘を……たったひとりの子を大事に思っていないか
かったはずがないからだ。

当時の彼の心情は、察するに余りある。

だが――

「理由、気になりませんか？」

「いいえ」

「へへへ、高尚ですなあ。じゃあここからが本題だ」

「まだあるのですか？」

「娘の娘……つまりバレンノース公からみて孫になりますな。最近になつて見つかったと、町でウワサになつてるんですよ」

『『見つかった』……まさか……!?!』

女王は心臓をつかまれるような衝撃を受けた。予想外ではない……だが限りなく可能性が低いと考えていた言葉だったからだ。

「ひらたく言えば駆け落ちだったというわけです」

公爵の孫娘

そんな……見つかった……まさか、この短期間に……？」

「おっ！ 意外そうな反応だ。へへへ、食いついてきたな」

その言葉を聞いて、自分の心臓が暴れていることによろやく気づいた。

平静をよそおう無表情の仮面をかぶり、つとめて呼吸をちいさく、規則正しく行う。

「……お孫さんが見つかったとなると、バレンノース公の後継に推す動きがありそうですね」

姿を消した公爵の娘。その血を引く者が見つかったとなれば、世継ぎ問題に大きな波が起きるだろう。

重大な事件が起きる可能性も考えられた。

「もちろん城では大騒ぎですよ。もし俺がまだ執政代理人だったら……邪魔きわまりない存在だ」

「今は『元』やろ？ もう関係ないんとちゃうか」

「だけど！ おもしろくない、おもしろくないぜ。その孫をかつぎあげてる男が、いわゆる政敵ってやつなんだよ」

ヒノカの言葉を受け、ゲオルはにぎりこぶしをパンパンとたたき、くやしそうに吐き捨てた。

「お嬢様ア……あんたのせいで俺は落ちるとこまで落ちたんだ。なあ、あいつもここまで落としてくれよ」

「拒否します。そのような個人的感情のために、私が行動すると思いませんか？」

「いいや、あんたはやらなくちゃいけない。立場上、あいつのたくらみを止める義務があるはずだ。なぜなら——」

「コラー……！ ようやく見つけたぞ、ゲオル・ベレッツォ！ もう逃がさん！」

「げっ！」

遠くからひびく大声とともに三人の衛兵の姿が見えてきた。ゲオルは飛びあがって逃げようとしたが……女王がそれを許さなかった。「なぜここにいるのか疑問でしたが……よもや逃走中とは、大胆でしたね」

「ま、まて！ 情報を教えてやったじゃないか！ たのむ、見逃してくれ！」

「あなたが自分の政敵をきらっている、それが有用な話とは思えませんが……」

「え？ あ、そうか!？」

そうこうしているうちに衛兵が到着……するなり、肩にかけていた縄を使って脱走者を縛りあげる。

「ゲオル、観念しろ！」

「ニセモノ、ニセモノなんだ！ そいつはニセモノなんだああああ！」
「わけのわからんことを！ コラ、おとなしくするんだ！」

ゲオルはひたすら『ニセモノ』と繰り返しながら連行されていった。

「……俺はこの女たちに、ゲオルと何を話していたのか調べてから戻る」

「了解だ！」

残ったひとりの視線に、ヒノカが食ってかかる。

「おっちゃん、ウチらがあいつの仲間かなにかと思っとるん——」
「ヒノカ」

女王が止める。そして後ろへ下がらせた。

この男は衛兵ではない。とてつもなく危険な存在だ。

「……見抜いているか。アンナ・ルル・ド・エルミタージュ」

「ええ。たとえ変装していても、これほど近づけばわかるというものです……ル・ハイド」

「そのとおり……」

変装を解き、正体をあらわしたのはル・ハイド。以前に女王の暗殺をもくろんだ人間のひとりである。

しかし今、この黒ずくめの刺客からは殺気が感じられない。『姿を見せに来た』といわんばかりに。

「ここで私の首をとるつもりはないようですね」

「……正面からやりあって勝てると思っていない。だが闇に紛れても防がれる……ならば、罠にかけるまで」

そう言うとき彼は風のように跳躍。建物の屋根へ飛び移った。

「ゲオルの言葉を補足しよう。発見された『バレンノースの孫娘』は『偽者』。ソモンという男がそう仕立てあげている」
「っ……!」

「お前は動かざるを得ない。女王としてな」

「ソモンがいる場所、それは――」

「バレンノース城で待っているぞ」

ル・ハイドはどこかへと去っていった。

「お嬢。大丈夫か？」

「ええ……ここで剣を交えずに済んで……ヒノカに何もなくてよかったですと思います」

「……あのな、ちょっと顔つきが変わつとるぞ。ゲオルの話聞いてからや」

「バレンノース公の孫の偽物とは、さきほどおひねりをくださった方ではないかと……純金を渡すなんて普通ではないでしょう？」

「あの時はまだ偽物だと聞いてへん。話そらすな」

あつさりヒノカにつっこまれた。

女王は嘘が苦手なぶん、言葉にせず伏せておくことには長けている。物心がつく前から女王として政治にかかわってきたからだ。

しかし彼女には通じなくなってきた。ともに旅をする仲で……素の顔をよく知るからだろうか。

それは嬉しく思っているが、今回に限ってはすこし困る。

「なんで『孫が見つかった』って聞いて、あんなに驚いたんや?」

核心をついてきた……

「貴族の娘がどこぞの男と駆け落ちした、なんてよくあるウワサやろ。お嬢……何を知つとるんや」

鋭い考察がとても手ごわい。もはや言葉のやりとりでは爺や……ジョゼフ以上かもしれない。

急にふきつける風が、女王たちの髪をゆらしていた。

「明日、あの娘さんが再び来るか確かめましょう。それができたら全て話します」

ある意味『逃げ』ではあるが、今は確証のない情報ばかりなのも事実。

金のインゴットをおひねりに渡してきた少女こそが、発見されたバレンノース公の孫娘……その偽物である。

か細い理屈の糸がつながるか、はたまた切れるのか。

お忍びの道中、『不安』を感じたまま就寝するのは初めてのことだった。

「よつてらっしゃいみてらっしゃい! さあさあ、お代は観てのお帰りやー!」

翌日。

同じ時間、同じ場所でヒノカが芸を披露しはじめた。女王もまたいつものように、頃合いを見ておひねりの回収をする役だ。

「来た……」

集まった見物客がもりあがってくるころあい……あの少女が、他の

人々よりもいくらか離れた場所に立っていた。

目を閉じて笛の音に耳を傾けている様子だった。そのうちに涙がこぼれはじめ、両手で顔を覆う。

ただならぬ事情があるのだろうか。女王は調査のためではなく、彼女のためにできることはないかと考えた。

これが終わったら声をかけよう……そう考えながら皿を手にとつて小銭を集めはじめたとき。

銀貨を何枚もいれる者がいた。メイド服を着た、よく知っている顔

「どもー。お元気そうで」

ルネだった。

調査のためコルン地方に残っていた彼女が、ようやく追いついてきたのだ。

ヒノカの母

ひさしぶりに顔を見せたルネは、いたずらっぽく笑いながら『しばらく向こうで見えています』と合図を送ってきた。

女王は手伝ってほしいと思いつけたところで、それを改めた。従者が目の前にあらわれるまで気づかなかったのは、不覚にほかならないと自覚したからだ。

この旅はヒノカとふたりで出発したもの。後日ルネが追いかけてきたことに気づいたのだが、そのときもなかなか姿を見せなかったものだ。

気取られていると知りながらも呼ばれるまで待つ……実力あるふたりならではの戯れ。

ルネは女王の心が大きく乱れていると見抜いた。そして自らの力で乗り越えるべきだと考えているのだ。

「……ありがとう」

ちいさくつぶやき、気持ちをふるいたたせる。おひねりの受け取りを手早くすませ、泣いている少女に声をかけた。もちろんヒノカを連れて。

「こんにちは。来てくれてうれしいです」

「ぐすつ……うん」

「私は、一座の座長でエルミーナと申します。こちらは共の者です」

「ヒノカや。また会えたな」

「あたしはソニア……」

ソニアは涙をぬぐうと、昨日に負けないほど目をかがやかせた。

「やっぱりすごいね……最後にもう一度みられてよかった。おひねりは……持ってないけど……」

「あはは！ 昨日のぶんでお釣りがくるってもんやろ」

ヒノカの言うとおり、金のインゴットだったのだからお釣りどころではない。

大金を手にしたことのない彼女は、金銭感覚を維持するため『持たない、見ない、触らない』と昨夜から誓いをかけたほどだ。

よって今は女王が預かっている。

「え、えへへ……」

「……つかぬことをうかがいますが、ウワサになってるバレンノース公のお孫さんとは、あなたのことではありませんか？」

「……あはは、旅の人にも知られちゃってるんだ。その話」

ソニアはつらつらと話しはじめた。

「しかもあたしのことだとわかっちゃやうなんて……って、あなたたちにはそう思われてもしかたないか」

「ええ。昨日いただいたものを見て、もしや……と思ひまして」

「びっくりさせてごめんね。でも、本当に感動したから。もう二度と外には出られないかもしれないから……だから——」

「いたぞ、あそこだ！」

衛兵がこちらに向かって走ってくる。まるで昨日のゲオルと同じような状況……しかし今回は助けるべきだ。

公爵の孫に仕立てあげられたこと、おそらく本人の意志ではない。そんな直感があった。

「逃げまじょうっ！」

「お、お嬢!？」

「わわわっ！」

女王は、ヒノカとソニアの手をとって走り出した。

「あ！ コラ、待て……うおおっ!! すべる——!？」

ルネが援護してくれたのだろう。追手の気配がちかづいてくることはなかった。

道ゆく人々をかきわけ、かきわけ、宿屋までたどりついた。

「ソニアさん、とつぜん連れだして申しわけありませんでした」

「う、うん。びっくりしちゃった」

「ウワサの件で、お話を聞きたいと思っていたのです。内密にしますから、どうか……」

「ちよい待ち。ウチもお嬢から聞きたいことがあるんや。忘れてへんやろな」

「もちろんです。その話もするつもりですので……」

部屋の鍵をかけた女王は、ふたりに向かって語る。

「ソニアさん……あなたは公爵のお孫さんではない。そうでしょう？」

「っー」

瞬間、ソニアはびっくりと反応した。顔もみるみる青ざめていく。

ゲオルの言葉をそっくり信じたわけではない。そう推測する理由が他にもある。

「どうか落ち着いて……咎めるつもりなどありません。ただ、あなたはおっしやいました。『二度と外には出られない』かも、と」

ためらいながらも頷いたのを見て、尋ねる。

「誰かに強制されているのですか」

「どうして命令だつてわかるの……？」

「もし本物の孫娘が名乗りをあげたとしても、信じてもらうことは難しい……擁立する者が必要です」

「……うん、そうだよ。ソモンって人が来て……いろいろ教えこまれて……今日、公爵様の城に行く予定だったの」

「そうですか……いろいろと教わりましたか」

これを利用しよう……少々強引だが。

「……実は私、バレンノース公には少々くわしいのです！ あなたが

教わったという知識を試させてください」

「へ？」

「ん？」

「あの方の孫になりきって、答えてくださいね」
わざとらしいと自覚している。ふたりの面食らった顔からもわかる。

それでも自分を鼓舞させるため、あえて道化のようにふるまう。

「お嬢、なに考えて——」

「どうかお付き合いを……お願いです……」

「……わかった。好きにせえ」

懇願するように聞こえたのだろう。ヒノカは了承してくれた。

「第一問。バレンノース公の名前は？」

「レオ・ヴィ・バレンノース」

「正解です」

領主の名前は多くの人が知っていて当然。序の口の質問だ。

「第二問。あなたの母は子供のころに大けがをしたことがあります。原因はなんでしょう？」

「えっと、馬に乗つてるときに落ちちゃったから」

「落馬……そのとおりです」

そんな調子でいくつか質問をなげかけたところ、ソニアはすべて正解した。『教育』は行き届いているようだ。

ならば最重要であるこの質問にも答えられるはず。

それは『ヒノカにも尋ねるはず』だった問いであり、女王がためらっていたものだった。

「……最後の質問です。あなたの母親の名前は？」

「リア・カチ・バレンノース」

「っ!？」

「……正解です。ヒノカ、あなたは……どうですか？」

「ウチは……って……」

「ヒノカのお母様の名前を……教えてください」

「リア・カチ……お父ちゃんは苗字がないって……そのまま……」

「ヒノカさん……それってまさか……」

リア・カチという珍しい名前。

苗字のない父。

駆け落ち。

予想も、覚悟もしていた。それでも心に重いものを感じずにはいられない。

女王がもつとも懸念していたのは、ヒノカが『祖父』のもとに残ることだった……

通りすがりの旅の者です

「ちよ、ちよい待ち！ まさかウチのお母ちゃんが『バレンノース公の娘』だったっていうんか!？」

ヒノカに両肩をつかまれ、大きくゆさぶられる。反応を見るかぎり、やはり母親の身分のことは聞いていなかったのだろう。

もし知っているならば今までの旅の中で、世間話に出てきてもおかしくなかった。

「でも珍しい名前だし、偶然とは思えな……あつ！」

ソニアは両ひざをつけて頭を下げる。

「あ、あたし……ごめんなさいヒノカさん……ほんとうにごめんなさい！」

「いや謝らなくてええ……っていうか、親の名前が同じだけで、まだわからんやろ？ ほんまに偶然かもしれんやろ？」

たしかに名前の一致だけならば、女王もこれほど強い確信を持つことはなかった。

「お嬢にしてはずいぶんと決め打ちやないか？」

「もちろん他にも判断材料があります。ヒノカ……いつも使っている笛を見てください」

「……これか。これがどうかしたか？」

「はい。笛の頭にどこされた彫刻……それはバレンノースの紋章なのです。裏には古文字で『リア』とも彫られていますよ」

「……ホンマかいな。ウチが知らないからって、適当なこと言っとるんじゃないやろな」

文字はともかく、紋章ならばソニアという証人がいる。

「盾の中に描かれた、流れる川、その中にたたずむ一本の剣。ソニアさんなら見たことがあるでしょう」

「……ほんとだ！ バレンノース様の紋章だよ、あたし何度も見せら

れた！」

さすがのヒノカも『偶然』ではすませられないと悟ったのだろう……力が抜けたようにへたりこんでしまった。

「……お嬢は、最初からウチのこと……公爵の孫やと思ってたんか……？」

「いいえ。初めて気づいたのは、初めて笛を教わった、あのときです……」

「なら最近か……」

「ええ。ヒノカが芸を始めるといつも見惚れてしまうので、それまで笛の装飾を気にしたことはありませんでした」

「いやいや、そないなこと言わんでええから！」

「病で亡くなったお母様の形見だから、大切にあつかってほしいと言っていましたね」

「……両親が死んで、家もなくて……そんなウチにとって、これが故郷みたいなものや。唯一のつながりやねん」

ヒノカの目からひとすじの涙が流れる。

「ウチがほんとうに孫だとしたら……この笛が……お母ちゃんが、つないでくれたんかなあ……っ」

宿の部屋のなかで、しばしのあいだ嗚咽だけがあった……

落ち着いてきたころあいを見て、女王はふたたび話しはじめた。

「私は謝らなければなりません。今まで話さなかったのは、あなたがバレンノース公のもとに行ってしまうと思ったから……」

目をふせ、ヒノカに頭を下げる。

「つまり個人的なわがままのせいです。申しわけありませんでした」

この地へ来るまでに話すべきだという後悔があった。ヒノカが許すとわかっているからこそ、心苦しさが胸を刺す。

「……今でなけりや、聞いても信じなかったと思うで。気に病むこと

やない」

「ヒノカ……」

ああ……あなたならそう言うと思っていました。

「ヒノカさん、あたしが言うのもなんだけど、バレンノース様のところに行くの？」

ソニアの問いかけに、ヒノカはしばし考えこむようにして答えた。

「いや難しいなあ……ずっと知らなかったわけやし、おじいちゃんがいるからって『じゃあ会いに行きます』とはなかなか……」

「絶対、会いにいったほうがいいよ！」

これまでとはうって変わって強い言葉に、女王もすこしおどろいた。

「ソモンが言ったの。バレンノース様はもう長くないって」

「っ！」

「あたしね、孤児院にいたの」

孤児院。この言葉がソニアの口から出たとき、部屋の空気がすこし変わった。

「みんなでよく話してたんだ。あたしたちの本当の家族はどんな人だろうって。ごっこ遊びもたくさんしたりして。でも、もう……」

こぼれた涙をぬぐって、ソニアはつぶけた。

「会わなかったらきつと後悔する……ヒノカさんは優しい人だから。バレンノース様が亡くなったら、寂しかったかな、とかいろいろ考えちゃうんじゃない？」

「それは……」

「ヒノカ、私からもお願いします。どうか公爵と会ってください」

女王もまた、はやくに両親を亡くし、祖父母もいない身である。

ヒノカとバレンノース公を引き合わせたいと思う一方、最愛の友人

を手放したくもなかった。

「だがいまは――」

「公爵の病状は、私の耳にも届くほどです。猶予はありません」
「お嬢まで……」

ヒノカはしばらく黙っていたが、やがて大きくうなずいた。

「……わかった！ ふたりの言うとおりにや。ここで会わなかったら、もうそれまでなんやな」

「ヒノカ……！」

「正直に言うともまだ孫だつてことも信じられん……半信半疑や。けど、お嬢の鋭さを信じるわ！」

女王はほっと胸をなでおろした。その中に熱い決意がみなぎりつつも、わずかに寂しさの風が吹いている。

「……で、どうやってバレンノース公のところまで行くつもりなんや。まさか乗りこむつもりじゃないやろな？」

「うふふ、そのまさかですよ」

「やっぱりそうなるんかい！」

ヒノカのツツコミが胸にたたきこまれる。それが心の隙間を埋めてくれたように感じられた。

「お嬢のことやから心配はせえへん。といたいところやけど、今回はあの男が気になるな……待ち伏せでもしとるんやろか」

「ル・ハイドですね。彼の言う罫とは、城をさしているのでしょうか。ですが受けて立ちますよ」

「あ、あのう……エルミーナさんっていったい何者なの……？」

「ほれほれ、ソニアがぼかーんとしとるで。こういうときはなんて返すんや？」

「通りすがりの旅の者です」

ルネの反撃

話をしていくうちに自然といつもの雰囲気かもどってきた。

この先いさかいと別れがあっても、自分たちなら乗り越えていける。そしてより強く結びつくと思えた。

そして『いつも』にはもうひとり、欠かせぬ者がいる。女王は天井に向かって呼びかけた。

「ルネ、そろそろ入ってきていいですよ」

『かしこまりましたー』

一枚の天井板がずらされ、ルネの頭がひよつこりと姿をあらわした。

「あらためまして……お嬢様、ヒノさん。おひさしぶりですー」

「うおっ！ 姐さん、天井裏におったんか!？」

数日ぶりに再会したメイドは、口元をあげてほほえみながら、ヒラリと着地した。

「にししっ。ソニアちゃんの追手を足止めしてからすぐここに。むしろお嬢様たちより早く着いちゃってたりしまして」

「ならば宿屋の前で待っていてもいいと思いますが……ルネらしいですぬ」

ルネは幼少のころからいたずら好きだった。今は場をわきまえるようになったものの、遊び心をいつも忍ばせている。

旅ではいつも楽しそうにふるまって周囲をなごませてきた。

「先ほどは一本とられましたけど、これで返しましたよ」

「んー『孤児院』と聞いたとき、思わずガタつとやっちゃいましたからねー……おあいこってことにしましょうか」

女王は、広場でルネがあらわれるまで気づかなかった。

ルネは、『孤児院』と聞いて音をたてて気づかれた。

ふたりが主従であるかぎり、このようなやりとりがこれからも続くだろう。

「なあソニア……物音、聞こえたか？」

「あたしは他を気にする余裕なんてなくて……」

「ウチも同じや……」

「天井からメイドさんが出てきたり、もうなにがなんだか……」

ひそひそと話す声が聞こえるのはさておき、女王は尋ねた。

「ルネ、あなたが反応した理由……教えてもらえますか？」

ルネが語った孤児院の情報は、聞き捨てならないものばかりだった。

ひとつ、人身売買を行っていること。『商品』はもちろん子供たちだ。

ふたつ、設立にかかわったのがソモンという名の男であること。

みつつ、おそらくバレンノース公はこの事実を知らないであろうこと。

そして――

「わたしもあそこで育ったんですよね……子供心にあやしすぎて逃げちゃいましたけど」

「そうだったのですか……」

「で、幼いながらもたくましく生きてきた盗賊が『お城』に忍びこんだところ……耳の良いお方に見つかっちゃったわけです」

「ははーんなるほど。姐さんの実力のワケがやっとなんてわかったで」

「ちよつと待って！ あたし、子供を売ってたなんて知らないよ!？」

ソニアが声をあげた。

「院長先生だってやさしい人だし、とても信じられないよ……それって昔の話なんじゃないの、証拠はあるの?」

「残念ですけど、これはわたしの記憶だけじゃありません。別件の調査で、証拠が出てきたんですよ」

別件とはコルン地方のできごと。貴族の男が欲望のために女性をさらおうとした事件だ。

「あの男の口ぶりは初犯のものでないと思っていましたが……まさか『買って』いたのですか？」

「はい。『将来有望』な子を見つくり、屋敷で『育成』していました」
「なんてこと……」

「メイドさん、買われた子つてもしかして……三人いる？ 連れていかれてから五年くらいたつてる？」

「……はい」

そう聞いたソニアはへたりこんでしまった。彼女が受けた衝撃はいかほどのものか……察するにあまりある。

「……許せへんな。特にソモンっちゅうやつ、やっていい商売とわるい商売があるってもんや！」

「ヒノカの言うとおりで。バレンノース公のためにも対処しなくては」

ヒノカをバレンノース公のもとへ送る。ソモンの悪行を裁く。

ふたつとも必ずやり遂げねばならない。さらにどこかでル・ハイドの罠が待ち受けているだろう……

旅のなかで幾度となく世直しをしてきた女王だが、これがもつとも困難なものになりそうだった。

夕方になり、女王とルネは孤児院へ向かった。

ソモンの所業を知る証人として、院長を確保するためだ。

この作戦はふたりだけで行うものではない。援軍のあてがあった。

「調査隊が来る時間にまちがいはありませんね？」

「はい。まじめなコルン公の家来らしい、しっかりした人たちです
ら」

人身売買が明らかになり、コルン公は調査隊の派遣を決めていた。ルネも彼らとともにこの町へはいる予定だったが、報告のために先
行してきたのである。

「おっ、きたきた。お嬢様、きましたよ」

やってきた調査隊は、待っていたルネに礼をした。

「ルネ様。われら一同、到着いたしました！」

「ご苦労さまですー。さっそくですけど、やっちゃいますか」

「はっ！」

最初は自分に任せてほしい、と願い出たルネがさっそく扉をたたいた。

「……なんだね君たちは？」

扉を開けて出てきたのは白髪まじりの男。

孤児院側には事前通知をしていない。相手からみれば抜き打ちという形。

とつぜん訪れた者たちにおどろいているようだ。

「おひさしぶりですね、院長先生」

「……どこかで会ったかな？」

「以前ここで暮らしていたルネです。覚えてませんか？」

男はしばし考えるしぐさを見せたが、すぐに首をふった。

「なにを言うかと思えば……どれだけの子供がいると思っっているんだね。いちいち覚えてるわけがないだろう」

「記憶にひっかかるものありませんか？」

「くだいね君は。用がないなら子供たちの迷惑だ、帰ってくれ」

「……そうですか」

ため息をついたルネは懐から書状をとりだし、院長に見せつけた。

「コルン地方の公爵の命により、ここの調査に来ました。おとなしく協力してください」

「なにっ!？」

「さっきの答え次第ではやさしくしてあげようかと思いましたが、
なしですね!」

彼女はふっきれたように晴れやかに、そしていたずらっぽく笑っ
た。

こうして孤児院に強制調査がはいり、不相応な大金や契約書、顧客
の一覧表などが見つかった。

証拠はそろった。

残る課題はすべてバレンノース城で解決するだろう。
決戦のときが近づいていた。

決戦、バレンノース城

ルネと調査隊による容赦ない捜査がはじまっても、孤児院の子供たちがおびえることはなかった。

むしろ正義の味方がきたと言わんばかりに応援してくれている。いままでのしかえしにと、縛られた院長を蹴ろうとする子がいるので見張りがついたほどだ。

「ルネはあやしいと感じてここを出た、と言っていましたね」

「正直ほっとしましたよー。そう思ってたのが自分だけじゃないってハッキリしたんですから」

ここが何年も放置されていたことは不覚だった。

西の名君といわれるバレンノース公は、娘をうしななって気力が衰えつつあったと聞く。

当時を知らずとも手を差し伸べるべきだった。

女王の誕生日式典など、顔を合わせる機会があったのだから。

「……お嬢様。あなたが気に病むことはありません」

気づかってくれたのか、ルネが顔をのぞきこんできた。

「わたしだってその気になれば『告発』できたはずなんですから。昔のことを探られたくなくて黙っていた、わたしのせいでもあるんですよ」

「いいえ、私の……などと言っていたら、ずっと責任のとりあいになつてしまいますね」

「そーそー、わかっているじゃないですか。これからのことに力を入れていきましょー」

「ええ、おたがいに」

調査隊のはたらきにより、ソモンの悪事の証拠がそろってきたころだった。

「——嬢、お嬢!!」

ただならぬ様子の子のヒノカが走ってやってきた。

「……ヒノカ!? なにかあったのですか?」

「ソニアが……ソニアが城に行つてしまつた!」

息を切らせた彼女によると『ソモンの話、自分の力で断つてくる』と言つて宿を出てしまったとのこと。

ソモンが何もしないとは考えられない。急がなければ。

「……ルネ、ヒノカ、ここは任せます!」

全力で走るのはいつ以来だろうか。女王は道ゆく人々をかわしなから、駆け馬のごとき豪脚でバレンノース城へと向かった。

途中でソニアに追いつければ——

「くっ!」

しかしそれはかなわず、城の中へとはいつていく彼女の姿が遠目に見えたのがせいっぱいだった。

すこし遅れて門の前まできたものの、とうぜんのように門番が立ちはだかる。

「止まれ! この城になんの用だ!」

「ついさきほど、ここを通つた方にお会いしたいのですが……」

「ははははは! なにを言うかと思えば」

正直に用件を話してみたものの、それを聞いた門番は大きな声で笑つた。

「あの方は由緒正しきお人なのだ。おまえごとくとは住む世界が違う、帰れ帰れ!」

「通してやれ……」

門の奥から聞き覚えのある声がひびいた。

「ル・ハイド殿!? しかし——」

「通せ」

「は、はい！」

ル・ハイドだった。

「彼が待っている」と覚悟はしていたが……正門で姿をあらわすとは。」「ついでにい」

その先に罠があるのは火を見るよりも明らかだった。しかし、騒ぎを起さず中へ入るにはしたがうしかない。

ル・ハイドとともに進んださきは中庭だった。

ときはすでに夕暮れ。城も、庭の草木も赤みがかっている。

目の前にいる黒ずくめの男だけが夕日に染まらず、夜のように漆黒であった。

「待っていたぞ、アンナ・ルル・ド・エルミタージュ」

「ル・ハイド。ここが罠の中……ですか？」

「そうだ」

付近に他の気配は感じられない……数で押すつもりではないようだ。

「せっかくの機会です。あなたの目的を聞かせてもらえますか」

「女神の直系……王家の血を絶つ。それだけだ」

「……ハイナリア王国の伝承……」

「多くは語らぬ」

腰に下げていた剣を抜きつつ、ル・ハイドは言った。

「星剣を呼ぶがいい」

相手に武器をとらせるのも策のうちなのだろうか。

彼の目から狙いを読みとることはできない。

受けて立つ。女王は空に手をかかかって叫んだ。

「来たれ、星剣！」

星剣が手におさまった瞬間、ル・ハイドが剣を振り下ろした。距離

があるにも関わらず――

「っ!？」

こちらの間合いに「伸び」てきた剣を紙一重でかわす。

刃がほそい紐でつながれ、ムチのようにうねる……初めて見る武器だった。

「やはりこのような不意打ちは通じんか……だが慣れぬ得物にどこまで対処できる？」

ル・ハイドが縦横無尽に刃をしならせる。それはまるで無数のヘビのようだった。

体や武器に巻きつけられれば大きく不利になる。受けたりはじき返すことができない点で、剣や槍とはまったく違う。

女王はたくみな足さばきで攻撃をかわす。

横に跳び、上へ跳び、間合いを詰めようとするが、相手もわかつている……距離をとる動きに徹して攻撃してきた。

「くっ……」

「いかに達人といえど、剣がとどかねばどうしようもあるまい!」
かすかに『ピン』という音が聞こえた。まるで糸が切れたような――

なにかが風を切って飛んでくる音がして、女王は『それ』を星剣でなぎ払った。

短い矢……石弓かなにかが付近においてあるのだろう。

「チツ、あれをも防ぐか……」

「糸が切れると発射……まさに罠ですね」

「さすがと言っておこう。だが、一発で終わりだと思っははいまいな?」

「……っ!」

そこからはまさに猛攻だった。

脅威はムチのような剣だけではない。無数にはられた糸が切られるたびに、矢が別方向から襲ってくる。

罨を撃ちつくすまで持ちこたえつつけるのは得策ではない。ならば――

「はあっ！」

相手のヘビのような剣がひとときわ大きくしなつた一瞬。女王は星剣を『投げた』。

矢にも劣らぬ速さで一直線、ル・ハイドめがけて飛んでいく。

しかし星剣が穿つたのは壁だった。

いかに鋭い投擲でも、たった一步、横に動けば当たらないのだ。

「……ふん、みごとな一投だが、残念だったな。この距離で当てられる俺ではない」

ル・ハイドはそう言うと、スラリと剣を『もう一本』抜いてかまえた。

「二刀流……!?!」

そして両腕を大きく振りかぶり……

「終わりだ、アンナ・ルル・ド・エルミタージュ……!」

いま!

「星剣!!」

壁に突き刺さっていた星剣が呼びかけに応える。

女王の手と星剣をむすぶ線上に、ル・ハイドはいた。

決着

女王の手へともどる星剣が進路上、ル・ハイドの背中に突き刺さった。

鞘に収まっているため貫くまでにはいたらない。彼ともども『女王にむかって飛んでくる』。

「ぐうおおおおおおー！」

姿勢を低くして足をのばし、前方へすべりこむ。敵を頭上にかわしつつ手を伸ばす。もどってきた星剣をつかもうとしたが――

「……………これは!?!」

ル・ハイドの武器が幾重にもまきついていった。柄も、鞘も、見えな
いほかに。

つかめない!

反対側の壁へと激突するのを見送る。

とはいえ、全身をたたきつけられた相手には大きな痛手になったはずだ。

「ガハッ……………だが……………」

もういちど星剣を呼んで同じように……………そう思いついたときには遅かった。

「取ったぞ……………!」

立ちあがった相手は、がんじがらめの星剣をふみつけて引っ張った。

「うおおおおお!!」

ガラスがきしむような鈍い音とともに、『星』が砕けた。

「……………お前の武器は死んだ。こちらは無傷とは……………いかなかったがな」

見ると、ル・ハイドの二刀の紐が切れていた。彼の力がどれほどの

ものかを物語っている。

残った数枚の刃……伸ばせば並の剣ほどの長さになるだろう。

「数多の星が集うとも、夜を照らすにはほど遠い。この国を導く一等星よ……闇に消えるときが来た」

来る。こちらの接近をゆるさず、距離をとりつづけられる脚力が……向かってくる。

大きく両腕を振りかぶり――

「アンナ・ルル・ド・エルミタージュ、覚悟!!」

「星剣!」

女王はふたたび星剣を呼んだ。強く踏みこみ、一閃……返しにもう一太刀。狙いは腕。

初めて『重傷』を負わせるつもりで打ちこんだ。しかし手ごたえが想像とはるかに違っていた……

「星……剣……? ばか、な……」

崩れ落ちるル・ハイド。破壊された腕は、割れた陶器のように粉々になっていった。まるで――

『数多の星』……そうか……剣はひとつでは……なかったのか……」

「ル・ハイド……あなたは一体……?」

「俺は……闇だ……光あるところに現れる闇……その星剣のおかげで気づいた……無数の星があるのなら……闇もまた……」

黒ずくめだった彼の容姿が、色あせて灰になっていく……

「俺がここで散ろうとも……闇は……いずれまたやってくる……何年さきかわからぬ。案外……すぐかもしれないぞ?」

王家の伝承には次の一節があった。『星の光が近くによれば、影を成すことかなわず』と。

「かならず打ちはらってみせます」

男は塵となった。彼が何者だったのか、調べても判明するかわからない。

いま確かなことはひとつ。たとえ新たな刺客があらわれても負けない、かがやける女王になるといふ決意だった。

「……まったく、大きな音がするから来てみれば。口ほどにもない男だ」

「エルミーナさん!?!」

「黙れ。口をひらく許可はしておらん」

決戦の熱がのこる中庭にやってきた壮年の貴族。縄にかけられたソニアを連れている。

「あなたが……ソモン」

「いかにも。ふむ、これがあの男か?」

さきほどまでル・ハイドだった灰のかたまりを、無造作に蹴って飛ばしながら言う。

『『邪魔をするものが来る』と言うから好きにやらせたが……こんな大がかりな仕掛けをしておいて敗れるとは情けない』

「ル・ハイドは何者だったのですか?」

「知らん。人間じゃなからうが、灰にならうが関係ない。ようは使えるか使えないかだ」

「エルミーナさん、逃げて!」

「黙れと言っておろうが!」

「きやあつ!」

捕らわれの少女を殴りつけるソモン。

「ソニアさん!」

「おおっと、動くな。動けばこの娘の命はないぞ?」

彼の目からは野心と暴虐の火が見てとれる。なんとしても止めな

くては――

「この地は我のものになるのだ、誰にも邪魔はさせん！ 皆の者、出会え、出会えええ!!」

呼びかけに応じた兵士たちが押しよせる。

「女子供でもかまわん！ このものを斬り捨……んん!？」

そのときソニアが宙に飛びあがった……正確には『上から強く引っぱられた』。

「わわわわ、なにこれっ!？」

城壁の上に、ヒノカとルネの姿があった。投げ縄をつかつてソニアを引き寄せたのだ。

「ヒノカ！ ルネ！」

「芸人の投げ技、なめんなやー！」

「メイドの腕力もですよー！」

「いやメイド関係あるんか！ 腕力に！」

いつものふたりを見ていると力がわいてくる。ル・ハイドと戦う前よりもみなぎってくる。

ここまで旅ができてよかった……改めてそう思った。

「まあええか！ お嬢ー！ ソニアはこっちで守るから、思いきりやっただれやー!!」

「……ありがとう」

援護に應えるため、星剣を上段にかまえた。

「ソモン……あなたの悪事もここまでですー！」

「くそっ、かまわん！ まずは目の前のこやつを斬れ！ 斬れ、斬れええ！」

兵士たちは状況についていけず動揺しているのだろう……剣筋が

乱れ、腰も引けていた。

「なにをしておる馬鹿どもが！ さっさと行かんか！」

ソモンの怒声に押され、やみくもに突っこんでくるばかり。

気力に満ちた女王は、今日いちばんの速さと強さをもって星剣とともに舞った。

総勢十五人……すべてを一撃で倒し、もはや立っているのはソモンのみ。

「お、おのれええええええ!!」

狂乱したか、悪人は武器も持たないまま飛びかかってきた。

冷静にその胴体を打ち抜き、戦いは終わった。

「お待ちせしました。こちらは終わりましたよ」

「ははは……お嬢、はやすぎやで！」

見上げると、ソニアの拘束をほどいている途中だったようだ。

「もうちよっと待っててな」

「ええ……」

女王の帰還

こうしてソモンを捕縛できた。しかし裁くべき立場のバレンノース公は病の身……となれば、女王が直々にくだすしかない。

「く……くそつ、貴様ら……我だけを縛りつけるとはどういうことだ！ ほかの兵どもはどうなんだ、ええ!？」

すっかり意気消沈した様子の兵士たちは、武器を置いて座りこんでしまっていた。

たったひとりに制圧されるのも困りものだが……これをきっかけに精進してほしいと思う。

それにはきっかけが必要だ……たとえば、病床の主君が気力をとりもどすような吉報が。

「ルネ、調査隊のみなさんはここへ向かっているのですね？」

「もうじき着くころかと思えますー」

「他公の手の者を介入させるのは気がすみませんが……今回はしかたがな——」

「ソモン様、ソモン様あー!!」

声をあげて中庭にはいつてきたのは、あの門番だった。

「たいへんです！ コルン公の調査隊とかいうものたちが……あ、あれ……?」

「お、到着したみたいですねー」

「ソモン様、どうして繩に……?」

「いいところに来た！ 我を助ける、いますぐだ！」

「えっ?」

こちらをちらりと見る門番。

「む、無理ですよオレひとりじゃ！」

「やれといったらやるんだ！ だいたいお前たちは——」

「……お嬢様、そろそろ言っちゃってもいいですか？」

「はい。どうぞ」

「ご静粛に！ こちらのの方はハイナリアの女王、アンナ・ルル・ド・エルミターージュ様であらせられるぞー!!」

ルネの声がひびきわたる。その場にいる全員が彼女のほうを向いた。

「ええ!？」

「女王様だって!？」

「あー！ そういえば聞いたことがある!」

「門番！ 知っているのか!？」

「お、俺は城を出入りする人間と話す機会が多いんだが……アンナ女王様がお忍びで各地を旅してまわり、悪人どもをこらしめていると何度かウワサになっていた……まさか本当だったとは……!」

「その人、よく知ってますねー。まっ、ウソだと思えばなら調査隊のみなさんに聞いてみてもいいですよー」

「女王様」

「ああ、女王様!」

兵士たちがつきつきとひれ伏す中で、青い顔でぼうぜんとしているのはソモンだった。

「そんな……まさか……我にこんなことが……なぜ……バカな……」

「ソモン。偽りの公女を作り上げ、権力を握ろうとした件。それに孤児院と結託しての悪行……断じて許すわけにはいきません」

余罪がある可能性も考えられる。時間をかけて調べる必要があるだろう。

立て続けになっちゃいますが、ルネにも働いてもらおうつもりだ。

「さあ、彼を牢屋へ連れていきなさい」

「ろう……や……我、が……」

今回の事件の黒幕は、放心状態のまま連行されていった。

しばらくのち、女王とヒノカは扉の前にいた……この先がヒノカの祖父、バレンノース公の自室である。

「……ヒノカ、心の準備はできましたか？」

「どう準備しろっちゅーねん……なにも想像できん」

「そうですね。でも、きっと大丈夫……いきますよ？」

コンコンと扉をたたいて、開けた。

部屋の中は薄暗く、ろうそくの小さな明かりだけがゆらめいていた。

「誰だ……？」

声の主はもちろんバレンノース公だ。

動く気配はない。ほとんど寝たきりだと聞いていたが……どうやらその通りらしい。

「なにやら騒がしかったが……何かあったのか？」

「お休みのところ失礼します。バレンノース公……おひさしぶりですね」

「君は……いや、あなた様は……!？」

「どうかそのまま。お体にさわります」

「……おどろきました。まさか陛下がいらっしやるとは……ますますお母上に似られましたな……」

「積もる話がありますが……今日はぜひとも、会わせたい方がおりまして。さあ、ヒノカ……」

扉を開けたときから、背中にはりついていヒノカを引っ張りだした。

おずおずとしながらも懸命に口をひらく。

「……ええと……ウチは、その……ヒノカと言います。生まれはこの

地方で、おか……母の名前はリア・カチです」

「リア……まさか……！ 顔をよく見せてくれるか？」

ベッドにかけより、膝をつくヒノカ。バレンノースは上体をおこして、彼女の顔をじつと見つめた。

「ああ、間違いない。リアの面影がある……あの子が、こんなに立派な娘を……」

「自分でいうのも変やけど、ウチの顔だけで信じてええんか……？」

「そうや、この証拠を見てからでも——」

「ひよつとして笛を見せるつもりかな？」

「……！ そ、そうや。これ、母の形見で……」

「形見……」

バレンノースの頬に涙が光る。

「つらい思いをしてきたのだな……わしが頑固だったばかりに……すまない。わしがあのふたりを認めてさえいれば」

「おじいちゃんっ！」

泣いているのだろう。ヒノカの声は震えていた。

「ウチは幸せや。小さいころから、今まで……ずっと幸せやったで。おじいちゃんが謝ることなんて、なんもないで……」

「わしを祖父と呼んでくれるのか……」

「……当たり前や。だからウチのことも——」

「ヒノカ。わが孫娘よ」

「……あ」

女王は退室した。ふたりの時間を過ぎしてほしいから……

今。そしてこれからも。

さまざまな想いが目頭を熱くさせる。

「……うまくいったみたいですね。お嬢様」

「ええ。私ももらい泣きしてしまいました」

「……ヒノさん、ここに残るんでしょうか？」

「きつと。いえ、必ず。たったひとりの肉親なのですから」

「肉親ですか……ちよつとうらやましいですね」

「ふふつ、たしかに。私も肉親はいませんが……城のみんなが自分の家族だと思っています」

「おっと！ それってわたしも入ってます？」

「もちろんですよ、ルネ」

「じゃあわたしにも家族がいるってことで……にししっ」

笑顔のルネにひとつ、お願いをする。

「そんなあなただけに頼めることがあります。ヒノカを支えてあげてくださいませんか？」

「あーやつぱりそう来ますか。生活が変わったら大変そうですね。でもねー。わかりました！」

女王の『家族』のひとりは、胸をトンとたたいて了承してくれた。

「そのかわりと言ってはなんですが、わたしからもお願いがあります」
「わかりました、聞きましょう」

「そろそろ『家族』に、お顔を見せてやってくださいませ」

そう。こんなに女王の気持ちを知っているルネだからこそ、無二の友人を任せられるのだ。

「……ふふつ。もとよりそのつもりです。あのふたりを見ていたら、ちよつとだけ恋しくなってしまうました」

旅立ちにはヒノカと二人だった。

途中でルネが合流して、三人になった。

その旅の帰り道は、女王一人だった。

女王様は十六歳

女王の誕生日がせまるころ、いつも城の中は準備で大忙しだ。

特に宰相ジョゼフと騎士団長ピエールは、昨年のももあつてか念の入れようが違う。

「ピエール。いよいよ誕生日前夜のパーティーじゃな」

「はい。しっかりと女王様をお守りする所存です。すべて予定通りに……」

「予定通りだと？ 甘い、甘いぞピエール！ あのお方のこと、隙あらばまた飛び出すに決まっておる！」

「……誰が飛び出すのですか？」

「じよ、女王様！」

「聞こえていましたよ、爺や？」

「ならばこの際です、はつきり言わせてもらいますぞ。また城から出ようと考えておられるのでしょうか？ あなた様は先代の血をひくたった唯一のお方。もしものことがあれば取りかえしがつきません！ 前回うまくいったからといって、次もと思われているなら大間違いです。ええわかります、わかりますとも。直に見て回ってこそ真実が見える、それも一理あるでしょう。しかしここは我慢のしどころですぞ！ 女王様は玉座にしっかりとお座りになって、われわれが百聞にも勝るきめ細やかな報告を届けますから。まったく誰に似たのやら。先代もお忍びをくりかえしましたが、そこを見習ってもらっては困ります。そもそも——」

はじまってしまった。

城にもどった女王の悩みの種。ことあるごとにお忍びを控えるよう言ってくるジョゼフだ。

話の内容はいつも似通っているし、とても長い……昔から説教をす

ると時間のかかる人物だったが、昨年のお忍びのこととなると今までの比ではなかった。

よほど先代女王にも悩まされたのだろうと思う……が。

「母上がたびたび抜け出されたのは、爺やから逃げるためでもあったのでは……」

「なにかおっしゃいましたか？」

「いいえなにも。おほほほほ……」

ジョゼフの話が終わるころにはパーティーがはじまる時刻。

急いで身支度をととのえ、大広間へと向かう。

数多の有力者たちが、女王を祝福しに集まっていた。用意された立食をつまみながら『そのとき』を待つ。

ある程度の時間がたつと、進行役が杖で床をかるくたたき、来場者の名前をよみあげる。

呼ばれた者、およびその従者が、主役たる女王のまえに進みでて祝福の言葉を述べる。これを順番に、全員がおこなうのだ。

多くの場合、一年にいちどの顔合わせ……あるいは初対面になる。だが今回は違う。

「ドーコー伯爵から女王陛下へ、祝福の言葉です！」

「女王陛下、お誕生日おめでとうございます」

「おひさしぶりですね、ドーコー伯爵」

「おかげさまで、最近は大強いメルル焼きの作品が多く作られています。いずれ陛下にもお見せできるかと」

「まあ！ 楽しみにしています」

豊かな資源をもつメルルバルの町。すばらしい工芸品が今日もつ

くられ、人々を魅了しているだろう。

「カランド公爵から女王陛下へ、祝福の言葉です！」

「陛下……ご機嫌うるわしゅうございます」

「……先日の件、対処いただけたようによりです」

「20年前……たったひとり、おのれの責任だと申しでたダグラスを裁いて、事件の幕を引き、名乗り出なかつた家臣の悪心に気づかなかつた。このカランド、一生の不覚。面目次第もございません」

「同僚を守ることが彼の意志だったのでしよう。守られた者たちが心を改めなかつたことが、残念でした……」

「はい。とうてい償いきれる過ちではありませんが、せめて……」

カランド公は、後ろにひかえる騎士の青年を前に出させた。

「ダグラスの子トーマス……この者を必ずや、立派な騎士に育てあげてみます」

「ええ、お願いします」

緊張しているのか、トーマスは赤い顔で直立不動になっていた。

「私からも応援させていただきます、トーマス殿。お父上に恥じない騎士に……期待しています」

「あ、は……はははい！ 光栄でああ、ありがとうございますエルミ……女王様！」

「うふふつ、緊張されているのでしようか？」

「初めての式典ですし無理ありません……しかし、来年はもつとしっかりしてもらわないといけませんな」

「それはそれは、楽しみです」

「あの……どうか、お手柔らかに……」

硬くなっている今のトーマスを見ていると面白い。しかしそれ以上に成長した姿を想像するのもまた楽しみである。

たとえば、弟や息子を見まもる気持ちはこういうものだろうかと思つた……もつとも彼は年上だが。

「コルン公爵から女王陛下へ、祝福の言葉です！」

「た、多大な迷惑をかけたにも関わらず、迎え入れてくださり感謝いたします……」

「コルン公。もっと強気になっていただかないと、いつかまたマカザのような者が現れてしまいますよ」

「マ、マカザがふたたび!? そ、それは困ります」

女王は縮こまってしまったコルン公をなだめ、はげました。

どうにか持ちなおし、心おきなく雑談にに応じてくれるようになったころ、待望の話題がやってきた。

「あの宿屋の夫婦なのですが、出発前に様子を見にいきました」

「ぜひ聞きたいと思っていました！ お元気ですか？」

「はい、無事に子供も生まれまております。男の子ですよ。それはもうにぎやかで——」

それからの話はとても長くなった。自身の子育ての苦労などを延々と語りはじめたからだ。

ジヨゼフと気が合うかもしれないと、女王はふと思った。

そして、ついに『彼女』の番がまわってきた。

「バレンノース家の御令嬢、ヒノカ様より女王陛下へ、祝福の言葉です！」

ヒノカ。バレンノース城で別れたとき以来の再会だった。

白いドレスに身をつつんだ彼女は真珠のように、滑らかで一目をひきつける美しさがあった。

従者として仕えることになったソニアを連れ、優雅で堂々としたふるまいを見せている。

これを見て『少し前まで旅芸人だった』と信じる人間はいないだろう。

『お初にお目にかかります』、女王様。ヒノカ・カチ・バレンノースと申します」

「会えてうれしく思います、ヒノカ」

月がひとつ、星が無数にひろがる夜空。

全員の祝福を受け終えた女王は、テラスでひとり休憩を取っていた。

頬をなでる風がつめたくて心地いい。

「……お、いたいた。ウチの読みはさえとるなあ」

「ヒノカ！ 待っていました」

厳かなドレスを身にまといつつも、旅をしていたころと変わらな
い、気さくなヒノカがいた。

それにしても……

「うふふっ……」

「あはははは！」

ふたりで大いに笑い合った。

「ははは……わらいすぎやで！ その顔をあそこの連中に見られるわけにはいかんやろ！」

「大丈夫です、周りには……誰もいませんから！」

「ま、お嬢がそういうならそうなんやろな」

「バレンノース公はお元気ですか？」

「ずっと寝込んでいたのがウソのようにな。医者が『気力でここまで持ちなおすなんて』とびっくりしとったわ」

「ヒノカが来てくれたからでしょう？」

「へへ……その代わりお嬢と別れることになってしもうた。どうや、ウチと会って元気でしたか？」

「もともと元気ですが……そうですね、いつそう高揚していますよ」

「ホンマにそれだけか？ あのと泣きながら別れを惜しんでたのは誰やったかな？」

「す、少ししか泣いてません！ ヒノカのほうこそ……」
「ちよ、泣いてへんわ！」

他愛なく、しかし大切な時間。いつまでも語り合いたかったが、今は式典の場。

「……さて、いつまでも主役が席をはずすわけにはいかないやろ？」

「ええ。戻らなければなりません」

「名残惜しいけど……またな、お嬢……つと、戻るときは時間差をおいたほうがええか。先に行ってるわ」

深夜までつづく式典のあと、夜が明けるところには城下町で行われるパレードの支度をする。

毎年、馬車にのって人々から祝福を受けてきた。しかし今年は様式を変える……女王たつての希望だ。

「今日はよろしくお願いします、ソラ」

馬にまたがり、その顔を優しくなでた。ブルルツと気合のはいった返事がたのもしい。

ソラ……旅の路銀をかせぐため、競馬場へと足をはこんだ縁で出会った競走馬。

女王が、女王杯というレースで騎乗し、優勝した……あの景色を生涯わすれることはない。

自ら騎乗してパレードにのぞみたい。女王がそう考えたときに思い出したのが、ソラをそだてた牧場の親子だ。

いずれ誕生日式典を見にいきたいと言っていた。
ので、招待をかねてソラを借りられないか使いの者を出し、了承を得たのだ。

ソラの移動のため親子が城へ来たのは数日前のこと。

両親はひっくりかえるほどの驚きよう。娘のアニーは女王のまわ

りをぐるぐる回ってはしゃいだ。

今日の式典もどこかで見ていることだろう。

「女王様、お時間です」

「わかりました。では出発しましょう」

門をくぐり、城下町へと進みだした。パレードの始まりだ。

「じよおうさまー!」

「女王さまー!」

「おめでとうございまーす!!」

歓声のなか、手を振ってこたえる……馬上だとまた違った景色だ。

「みなさま……温かいお言葉をありがとうございます!」

青空の嵐とも形容されるパレードはいつにも増して熱気に包まれていた。

盛り上がっているのは、いつもと違うからだろうか?

それとも……

「凛々しくなられた気がする」

「女王様って乗馬が得意なのかな?」

「なんて頼もしいお姿……」

去年より民の目線に寄りそえていたら。人として成長できていたら、とても嬉しく思う。

お忍びの旅は女王にとつておおきな一歩だった。

そしてこれから何度も、大小の一步を重ねていく。

理想は高い。まだまだ母の……先代の背中では遠いと感じている。

だからこそ――

翌日。

城下町の聖堂で祈りをささげる人々の中に、ヒノカの姿があった。

「今日この町を出発するで。アイツのこと、これからも見守ってやってくれな……」

「では、私はヒノカのことを見守ってくださいるようにお祈りしましょう」

一年前と同じく、女王はヒノカのとりにいる。

「それじゃおあいこやん。あー……じゃあせつかくや、ルネの姐さんのこともお願いしとくわ」

聖堂を出ながら話をつづける。

「今さらですが、ヒノカが旅に出ても問題はないのですか？」

「お嬢が言うかい！」

ビシツと胸元にツツコミがはいった。この感触もひさしぶりで、出発の実感がわいてくる。

「私は二回目。お忍びについてはヒノカより先輩ですから」

「先輩ねえ……ま、ウチはおじいちゃんソニアに言ってるから大丈夫や。ちゅうかお嬢こそ誰かに言ってきたんか？」

「……ルネがきつとなんとかしてくれよう。ね？」

「コラコラ、お嬢が抜けだしたら大騒ぎどころじゃないやろ！」

「次回から事前に言っておこうと思います……」

「早くも三度目をたくらんどるとは、家来も大変やな……」

庭の木から飛び出した鳥たちが、町の外へと向かう姿が見えた。去年よりも一羽多い……来年はもっと増えているだろうか？

いや、来年よりも『今』に想いをはせよう。女王はそう思いながらヒノカの手をとった。

「さあ、出発しましょう！」

女王たちが聖堂前から見えなくなるころ、木の枝が大きくゆれた。降ってきたのはひとりのメイド……ルネ。

「お嬢様つてば、『なんとかかしてくれる』なんて、言ってくれますねー。あのおじいさん、すごく話が長くて眠くなっちゃう……となると」

うんと伸びをしたあと、紙と筆をとりだし文章をしたためる。

「……よし、去年と同じく手紙で『なんとか』しましょう。というわけで騎士団長……お小言をもらう役、お任せします。すみません……あっ！」

なにかをひらめいたルネは、いつもの笑みを浮かべながら駆けていった。

「今回はあそこに置いていこうつと。誰が見つけるかなー？ にしっ」